

島根大学構内遺跡第1次調査 (橋繩手地区 1)

-宍道湖北東側における「縄文海進」期低湿地遺跡の調査-

1997年

島根大学埋蔵文化財調査研究センター



1. 「島根大学構内遺跡」遠景（南西から）



2. 丸木舟出土状態



1. 東西セクション断面（北から）



2. アカホヤ火山灰層と「繩維土器」出土状態

序 文

島根大学の敷地内には、かつて、薬師山古墳や菅田丘古墳等の存在が知られており、また、大学周辺においても著名な遺跡が豊富に残っています。特に、近隣の西川津遺跡やタテチョウ遺跡等は、かつての「古穴道湾」沿岸部に立地する低湿地遺跡として膨大な量の遺物の存在が明らかにされ、全国的にも注目されています。同様に、敷地の大部分が「古穴道湾」沿岸部にあたる島根大学においてもこうした遺跡の存在が予想されていたことから、平成6年4月に島根大学埋蔵文化財調査研究センターを発足させ、構内遺跡発掘調査ならびに研究の体制を整備する運びとなりました。

本書は、第2体育館建設に伴って、平成6年6月から11月まで実施した構内遺跡第1次発掘調査成果の報告書です。本次調査では、縄文時代早期末から中期初頭にかけての土器群や日本最古の丸木舟が出上する等、多くの貴重な成果に恵まれることができました。こうした成果については、一般市民、学生を始め、広く各方面から多大な关心が寄せられているところです。これらより重要な意義は、遺跡や遺物という歴史的な場を大学構内で、日常的に、保持、活用していくことによって、今後の教育、研究活動の面に、はかりしれない効果が期待されるところにあると考えています。本書が、今後の埋蔵文化財に対する研究と理解、これを活用した普及啓発、教育の一助になれば幸いに存じます。

なお、発掘調査の開始以来、本書の刊行に至るまで、学内の関係者を始め、島根県教育委員会等各方面から多大な御協力、御支援を賜りました。ここに衷心よりお礼申し上げます。

平成9年3月

島根大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長 北川 泉

例　　言

- 1、本書は、島根県松江市西川津町1060番地（旧字名：橋繩手）島根大学構内において実施した島根大学構内遺跡第1次調査の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は、第2体育館新設工事に伴い実施した。
- 3、発掘調査は、1994年6月6日から1994年11月4日にかけて実施した。調査面積は、約1200m²である。
- 4、発掘調査は、島根大学埋蔵文化財調査研究センターが実施した。体制は、第1章に示している。
- 5、本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系Ⅲによった。
- 6、遺物の洗浄、実測、製図は、会下和宏、埴生典子、沖野拓矢、黒木欣綱、大橋 覚、野崎祐臣を行った。
- 7、遺物観察表は、埴生、様田植久が作成、編集した。
- 8、本書の執筆は、会下があたった他、中村唯史・徳岡隆夫・三瓶良和・中山勝博（島根大学総合理工学部）、川崎地質株式会社、能城修一（農林水産省森林総合研究所）の各氏・機関に玉稿を賜わった。
- 9、本書の構成・編集は、田中義昭の指導のもとに会下が行い、埴生、様田がこれを補助した。
- 10、出土遺物と発掘調査に関わる記録類は、全て島根大学埋蔵文化財調査研究センターで保管している。
- 11、調査及び本書の作成にあたっては、以下の方々に御協力・御指導を賜った。記してお礼申し上げます。

赤澤秀則（鹿島町教育委員会）、麻生 優（千葉大学）

足立克己（島根県埋蔵文化財調査センター）、網谷克彦（教賀女子短期大学）

池田滿雄（島根考古学会）、井上智博（大阪府文化財調査研究センター）

今岡一三（島根県教育委員会）、岡本東三（千葉大学）、川原和人（島根県教育委員会）

宍道正年（島根県埋蔵文化財調査センター）、高橋 譲（ノートルダム清心女子大学）

塙本敏夫（元興寺文化財研究所）、中村陵子（島根県埋蔵文化財調査センター）

西尾克己（島根県教育委員会）、宮本一夫（九州大学）、村上 勇（広島県立美術館）

百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）、柳浦俊一（島根県埋蔵文化財調査センター）

家根祥多（立命館大学）、山田昌久（東京都立大学）、山手誠治（北九州市教育文化事業団）

山本悦世（岡山大学）、山本 清（島根大学名誉教授）、吉野健一（千葉県文化財センター）

（50音順、敬称略）

本文目次

第1章 調査に至る経緯と組織	1
1 調査に至る経緯	1
2 島根大学埋蔵文化財管理運営委員会規則	2
3 調査研究組織	3
第2章 遺跡の立地と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	6
(1) 穴道湖、中海周辺の縄文遺跡	6
(2) 島根大学構内遺跡周辺の歴史的環境	11
第3章 調査の方法と経過	21
1 調査の方法	21
2 調査の経過	22
第4章 基本層序	23
第5章 遺 物	32
1 土器、陶磁器	32
(1) 第8層上面（アカホヤ火山灰層下位）出土の縄文土器	32
(2) 第5層（アカホヤ火山灰層上位）出土の縄文土器	44
(3) 第5層上面、第6層上面（アカホヤ火山灰層上位）出土の縄文土器	45
(4) 第4層下位砂層出土の縄文土器	53
(5) 縄文土器の編年的位置	64
(6) 第1層出土の土器、陶磁器ほか	67
2 石 器	88
3 木 製 品	98
(1) 丸木舟	98
(2) その他の木製品	98
(3) 橋縄手地区出土木製品の樹種同定結果（概報）	110
4 自然遺物	113
(1) 種 実	113
(2) 自然木と樹種同定結果	113
第6章 島根大学構内遺跡（橋縄手地区）の古環境復元	116
1 橋縄手地区における花粉・珪藻分析（概報）	116
2 地質学的検討からみた橋縄手地区的古環境	122
第7章 考 察	130
1 遺跡の景観と人類活動変遷の諸段階	130
2 丸木舟について	133
第8章 ま と め	137

図 目 次

図1 調査地位置図 (1/10000)	1
図2 島根大学構内遺跡周辺の地質	5
図3 繩文前期前半の遺跡 (中村1996をもとに作成)	9
図4 1918(大正7)年の調査地周辺 (1/20000、大日本帝国測量部発行地形図をもとに作成)	15
図5 島根大学周辺の遺跡 (1/25000)	17
図6 グリッド設定図	21
図7 調査区東西主軸線 (D・E間ライン) 断面図 (1/60)	25
図8 調査区西壁断面図 (1/60)	27
図9 「第2層下位砂層」の分布 (1/300)	29
図10 「第4層下位砂層」と出土遺物の分布 (1/300)	29
図11 「第5層上面・第6層上面」出土遺物の分布 (1/300)	30
図12 「第5層」と出土遺物の分布 (1/300)	30
図13 第8層上面と出土遺物の分布 (1/300)	31
図14 第8層上面出土土器 (1A類、1/3)	33
図15 第8層上面出土土器 (1A類、1/3)	34
図16 第8層上面出土土器 (1A・1B類、1/3)	35
図17 第8層上面出土土器 (1B類、1/3)	36
図18 第8層上面出土土器 (1C類、1/3)	37
図19 第8層上面出土土器 (1C類、1/3)	38
図20 第8層上面出土土器 (1D類、1/3)	39
図21 第8層上面出土土器 (1D類、1/3)	40
図22 第8層上面出土土器 (1D・1E類、1/3)	41
図23 第8層上面出土土器 (1E類、1/3)	42
図24 第8層上面出土土器 (底部、1/3)	43
図25 第5層出土土器 (2類、1/3)	44
図26 第5層上面・第6層上面出土土器 (3類、1/3)	46
図27 第5層上面・第6層上面出土土器 (3類、1/3)	47
図28 第5層上面・第6層上面出土土器 (3類、1/3)	48
図29 第5層上面・第6層上面出土土器 (3類、1/3)	49
図30 第5層上面・第6層上面出土土器 (3類、1/3)	50
図31 第5層上面・第6層上面出土土器 (3類、1/3)	51
図32 第5層上面・第6層上面出土土器 (4・5・10B類、1/3)	52
図33 第4層下位砂層出土土器 (3・6・7・8類、1/3)	55
図34 第4層下位砂層出土土器 (9類、1/3)	56

図35 第4層下位砂層出土土器（10A類、1／3）	57
図36 第4層下位砂層出土土器（10A類、1／3）	58
図37 第4層下位砂層出土土器（10B類、1／3）	59
図38 第4層下位砂層出土土器（10B類、1／3）	60
図39 第4層下位砂層出土土器（11類、1／3）	61
図40 第4層下位砂層出土土器（12類、1／3）	62
図41 第4層下位砂層出土土器（13類、1／3）	63
図42 第4層下位砂層出土土器（13類・底部、1／3）	64
図43 第1層出土遺物（1／3）	68
図44 第1層出土遺物（1／3）	69
図45 第1層出土遺物（1／3）	70
図46 第1層出土遺物（1／3）	71
図47 第1層出土遺物（1／3）	72
図48 第8層上面出土石器（2／3）	89
図49 第8層上面出土石器（2／3）	90
図50 第5層出土石器（2／3）	91
図51 第5層上面出土石器（2／3）	92
図52 第6層上面出土石器（2／3）	94
図53 第6層上面出土石器（2／3）	95
図54 第4層下位砂層出土石器（2／3）	96
図55 第4層下位砂層出土石器（2／3）	97
図56 丸木舟（1／20）	99
図57 第7層出土木製品（1／3）	101
図58 第7層上面出土木製品（1／3）	102
図59 第6層下位粘土層出土木製品（1／3）	102
図60 第5層出土木製品（1／3）	103
図61 第5層上面出土木製品（1／3）	104
図62 第5層上面出土木製品（1／3）	105
図63 第6層上面出土木製品（1／4）	105
図64 第4層下位砂層出土木製品（1／3）	107
図65 第4層出土木製品（1／3）	108
図66 第4層出土木製品（1／3）	109
図67 樹種鑑定用プレパラート作製フローチャート	111
図68 花粉ダイアグラム	117
図69 珪藻ダイアグラム	118
図70 珪藻総合ダイアグラム	119
図71 島根大学構内遺跡の周辺地形と調査地点	122
図72 橋繩手地区の堆積層	123

図73 模式柱状図と土器から明らかにされる堆積時期	124
図74 堆積層の有機炭素・窒素濃度およびC/N比とイオウ濃度	126
図75 橋繩手地区周辺の古地理図	128
図76 繩文時代の丸木舟	136

表 目 次

表1 穴道湖周辺の縄文遺跡	7
表2 中海周辺の縄文遺跡	8
表3 縄文土器の分類	64
表4 出土土器観察表	74
表5 木製品樹種一覧表	110
表6 樹種鑑定結果一覧表	112
表7 自然木樹種一覧表	114
表8 試料採取基準	116
表9 橋繩手地区採取試料とアカホヤ既知試料に含まれる火山ガラスの化学組成	125
表10 縄文時代の丸木舟一覧表	134

第1章 調査に至る経緯と組織

1 調査に至る経緯

島根大学の敷地は、その大部分がいわゆる「古宍道湾」ないし「古宍道湖」の縁辺部に相当することが、これまでのボーリング調査成果の蓄積によって認識されていた。また、近隣に存在する西川津遺跡やタテチョウ遺跡からは膨大な量にのぼる土器、木製品が出土しており、同様な立地条件にある本構内においても遺跡の存在が予測されていた。

こうした状況の中で、島根大学では、構内の諸施設を長期にわたって継続的に増改築していく計画が立案され、それに伴い埋蔵文化財の調査研究、保存を行う必要性、緊急性が生じてきた。

1994年1月、94年度工事の対象となった第2体育館建設予定地において小規模トレレンチの試掘調査を行ったところ遺物包含層が確認されたことから、早急に本格的な発掘調査を実施することが必要となった。こうした経緯を経て、1994年4月に埋蔵文化財調査研究センターが発足し、組織的な発掘調査に着手することとなった。

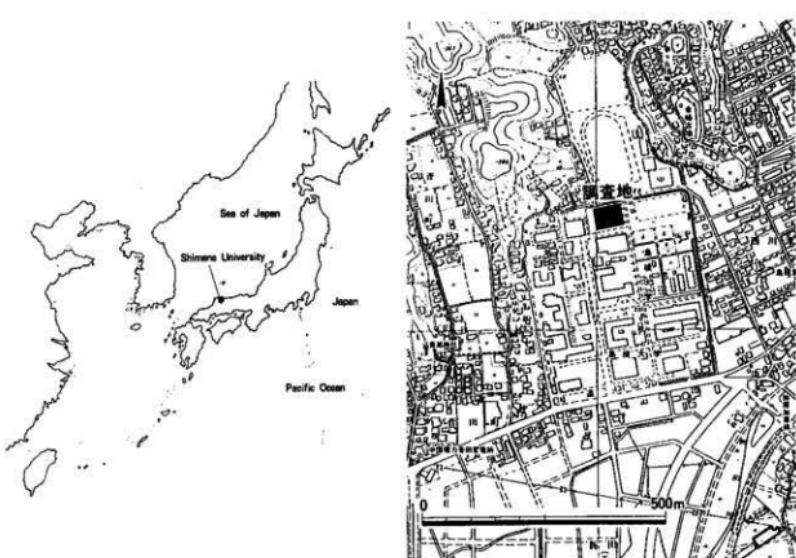


図1 調査位置図(1/10000)

2 島根大学埋蔵文化財管理運営委員会規則

(平成 6 年島大規則第 9 号)

[平成 6 年 4 月 22 日制定]

(趣旨)

第 1 条 島根大学構内の埋蔵文化財（以下「埋蔵文化財」という。）の発掘調査及び修復保存に関する重要事項を審議するため、島根大学に島根大学埋蔵文化財管理運営委員会（以下「管理運営委員会」という。）を置く。

(審議事項)

第 2 条 管理運営委員会は、次の各号に掲げる事項について企画し、審議し、及び決定する。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に係る基本計画に関すること。
- 二 埋蔵文化財の修理保存に係る基本計画に関すること。
- 三 その他埋蔵文化財に関する重要な事項

(組織)

第 3 条 管理運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 学長
 - 二 各学部長
 - 三 第 7 条第 3 項に規定する副センター長及び同条第 1 項に規定する研究員のうちから 1 名
 - 四 各学部教官代表 各 1 名
 - 五 事務局長
- 2 前項第 3 号に掲げる研究員である委員は、学長が選考する。
- 3 第 1 項第 4 号に掲げる委員は、学部長の推薦に基づき学長が任命する。
- 4 第 1 項第 4 号の委員の任期は、2 年とし、再任を妨げない。ただし、補次の委員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 5 委員会に委員長を置き、委員長は、学長をもってこれに充てる。

(会議)

第 4 条 委員会は、委員長が召集し、議長は、委員長をもってこれに充てる。

2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

3 委員会は、委員の 3 分の 2 以上の出席をもって成立し、出席委員の過半数をもって議決する。

(委員以外の者の出席)

第 5 条 委員会が必要と認めたときは、委員会に委員以外の者を出席させ、その意見を聞くことができる。

(調査研究センター)

第 6 条 管理運営委員会の下に、埋蔵文化財の発掘調査及び修復保存に当たるため、埋蔵文化財調査研究センター（以下「調査研究センター」という。）を置く。

(調査研究センターの組織)

第 7 条 調査研究センターに次の各号に掲げる職員を置く。

- 一 研究員 埋蔵文化財の専門的知識を有する教官若干名

- 二 調査員 埋蔵文化財の専門的知識を有する教官1名
三 調査補助員 必要に応じて採用する非常勤職員
- 2 調査研究センターにセンター長を置き、センター長は学長をもってこれに充てる。
3 調査研究センターに副センター長を置き、副センター長は第1項に規定する研究員のうちから学長が任命する。
4 センター長は、調査研究センターの管理・運営を総括する。
5 副センター長は、センター長を補佐し、埋蔵文化財の発掘調査及び修復保存の指導・監督を行なう。

(研究員及び調査員)

- 第8条 研究員及び調査員は、当該教官の所属する学部長等の承諾を得て、学長が任命する。
2 研究員は、必要に応じて埋蔵文化財の調査研究を行う。
3 調査員は、副センター長の指導の下に専ら埋蔵文化財の発掘調査及び修復保存に当たる。

(報告)

- 第9条 副センター長は、埋蔵文化財の発掘調査を終了したときは、センター長を経て管理運営委員会に調査結果を報告するものとする。

(事務)

- 第10条 管理運営委員会の事務は、庶務課が処理し、調査研究センターの事務は、施設課において処理する。

(雑則)

- 第11条 この規則に定めるもののほか、管理運営委員会に関し必要な事項は、管理運営委員会において定める。

附 則

- 1 この規則は、平成6年4月22日から施行する。
2 この規則の施行後最初に任命される第3条第1項第4号の委員の任期は、同条第4項の規定にかかわらず、平成8年3月31日までとする。

3 調査研究組織（平成6年4月22日～平成7年3月31日）

管理運営委員会

委 員 長	学 長	山 田 深 雪		
委 員	法文学部長	島 屋 一 康	教育学部長	渡 辺 悅 男
	理学部長	吉 川 通 彦	農 學 部 長	本 田 雄 一
	法文学部教授	富 野 囁 一 郎	教育学部教授	相 良 英 裕
	理学部教授	大 西 郁 夫	農 學 部 教 授	平 塚 貴 彦
	副センター長	田 中 義 昭	研 究 員	渡 邊 貞 幸
	事務局長	金 塚 勇		

埋蔵文化財調査研究センター

センターア長 学長 山 田 深 雪

副センター長	法文学部教授	田中 義昭		
研究員	法文学部教授	渡邊 貞幸	教育学部教授	林 正久
	理学部教授	徳岡 隆夫	理学部教授	時枝 克安
	農学部教授	片桐 成夫	汽水域研究センター助手	竹廣 文明
事務局	施設課長	中岡 一男		
調査員	助手	曾下 和宏		
調査補助員		埴生 典子	黒木 欣綱 沖野 拓矢	

(職名は当時のもの・敬称略)

第2章 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

中国山地と島根半島の間の東西に伸びる宍道低地帶には、中海と宍道湖の2つの汽水湖があり、それに挟まれる位置の松江低地北縁部に、島根大学構内遺跡は位置する。

中海と宍道湖は、内湾が三角州や砂州によって閉鎖された海跡湖である。松江低地は、島根半島から流れ出る朝鶴川の下流に形成された小規模な沖積低地で、宍道湖に西面し、低地の南を宍道湖からの流出河川である大橋川が東西に流れる。松江低地の地下には、軟弱な完新統中海層泥層が分布し、この地層は宍道湖底、出雲平野下に連続する。この中海層泥層には、内湾性の貝化石が含まれることがあり、また、6300年前に降灰した鬼界アカホヤ（K-A h）火山灰層が挟まる。

本次調査の行われた橋綱手地区は、丘陵に北から南へ向かって開いた谷の出口にあたり、この谷の集水域には新第三系松江層の玄武岩及び砂岩が分布する。

(中村唯史)

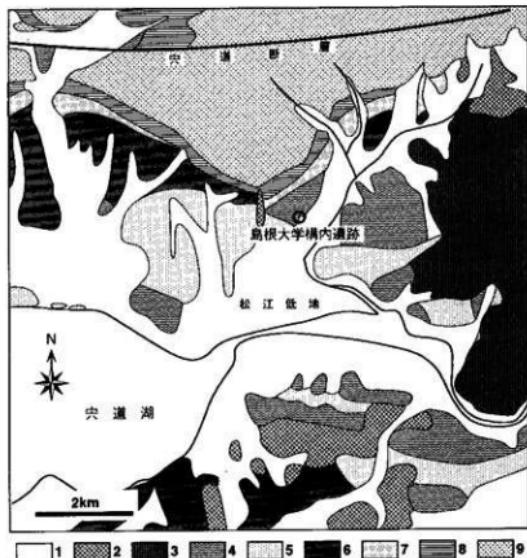


図2 島根大学構内遺跡周辺の地質

- 1 完新統 2 段丘堆積物 3 和久原安山岩 4 松江層玄武岩
5 松江層砂岩 6 布志名層泥岩 7 大森層砂岩 8 黄岩および礫岩
8 久里・川合層頁岩 9 久里・川合層流紋岩・石英安山岩溶岩および同質火碎岩
(島根県地質図編集委員会編、1982年をもとに作成)

2 歴史的環境

島根県は、山陰地方の西方に位置し、旧国制では、県東部「出雲」と県西部「石見」、日本海に浮かぶ「隠岐」より成る。

日本海に突出した島根半島は、対馬暖流を介した九州地域文化¹⁾を受容する際、有効とされ、さらに朝鮮半島、あるいは北陸地域²⁾との交流も想定されている。加えて、山越えルートによる山陽、近畿地域との交流も頻繁であったといえる。こうした周辺地域との文化交流が認められる一方で、弥生後期の土器様式や墓制³⁾に代表される様に、地域的独自性が強いことも看取される。

また、中海、宍道湖等の大規模汽水域の存在は、本地域文化の展開と特質を考察する上で看過出来ない位置を占める。前述した様に、宍道湖・中海は海跡湖で、完新世における海面変動が関与して、地形などの環境が大きく変遷していることが判明している。この形成過程については、時代ごとの具体的な古地形の様相が復元されつつあり⁴⁾、こうした変遷と人類遺跡との相関についてが、問われるところである。

(1) 宍道湖、中海周辺の縄文遺跡

宍道湖、中海周辺には、今のところ縄文早期末（織維土器の段階）以降に遺跡が形成されることが認められる（表1・2）。このうち、縄文早期末から前期にかけての遺跡は、主として丘陵裾部と低湿地の「遷移帯」付近で検出される傾向にある。こうした遺跡は、一側面で、「縄文海進」によって形成された浅海性の内湾、入り江等の水域環境、生態系に対する積極的適応を契機として成立、展開したと想定され、そのことは発掘によって出土する魚貝類遺存体⁵⁾や丸木舟、漁撈具、石器組成などによって端的に示されている。同時に、これらの遺跡群が、この内水域を媒介として相互に有機的関連をもっていたことも推測される。また、宍道湖周辺では、中期の遺跡が比較的希薄であることが特徴である。

以下、代表的な遺跡についてのみ概観する。

a、宍道湖周辺

西川津遺跡（松江市西川津町、図3-6）

宍道湖の北東側、朝酌川の氾濫原に形成された大規模な低湿地遺跡。1980年以降、河川改修事業に伴って継続的に調査されている。縄文時代から近世に及ぶ複合遺跡で、主に縄文早期末～前期初頭及び、縄文晚期～弥生時代を中心とした大量の上器、木製品が出土しており、付近に「拠点的」集落の存在を想定させる⁶⁾。当地域における縄文早期末～前期初頭の土器様相、あるいは縄文晚期から弥生時代前期における初期農耕文化の生成・発展の歴史的過程を追及する上で、重要な位置を占める。

特に、縄文前期初頭の上器群は、条痕文、刺突文、押引文、沈線文、隆帶文、貝殻腹縁文など多様な様相を示している。これらの土器群は、いわゆる「西川津式」と呼称され、九州「轟B式」や近畿「粟津S Z 1式」との関連など、当該期の土器研究にとって重要な位置を占める。その他、石器、スクレーパー、石斧、尖頭器状石器、石錘、砥石、石皿、磨石などの石器、骨角器、木製品などが出土している。

原ノ前遺跡（松江市西川津町、図3-5）

宍道湖の北東側、朝酌川の氾濫原に形成された低湿地遺跡で、西川津遺跡の下流部、タテヨウ遺跡の上流部に位置する。1992～93年に本調査がおこなわれている。縄文前期、晚期、弥生～平安時代の遺物が出土している。主な成果として、古墳時代後期から平安時代までの朝酌川の河道の変遷が明

表1、宍道湖周辺の縄文遺跡（No.は文献番号と一致する）

No.	遺 跡 名	所 在 地	時 期					特 記 事 項
			草 末	前	中	後	晚	
1	島根大学構内遺跡 (橋繩手地区)	松江市西川津町	○	○	○			K-A h 検出、 丸木舟（前期）
2	島根大学構内遺跡 (諸田地区)	松江市西川津町				○		
3	島根大学構内遺跡 (深町地区)	松江市西川津町		○				K-A h 検出、 櫂、ヤスの柄（前期）
4	タテチョウ遺跡	松江市西川津町	○	○	○	○		
5	原の前遺跡	松江市西川津町	○	○		○		K-A h 検出
6	西川津遺跡	松江市西川津町	○		○	○		K-A h 検出
7	法吉遺跡	松江市法吉町			○	○		
8	右台遺跡	松江市東津田町		○	○	○		
9	後谷遺跡	松江市東長江町	○	○				水中遺跡
10	宍道湖底遺跡	松江市西浜佐陀町	○					水中遺跡
11	北講武氏元遺跡	八束郡鹿島町				○		
12	佐太講武貝塚	八束郡鹿島町		○	○	○	○	丸木舟（晚期）
13	猪目洞窟遺跡	平田市猪目町			○			
14	矢野遺跡	出雲市矢野町				○	○	
15	三田谷遺跡	出雲市上塙治町				○		
16	上長浜貝塚	出雲市上長浜町	○	○				
17	原山遺跡	簸川郡大社町			○	○		
18	出雲大社境内遺跡	簸川郡大社町			○	○		
19	菱根遺跡	簸川郡大社町	○					
20	結遺跡	簸川郡斐川町	○	○				
21	後谷遺跡	簸川郡斐川町			○	○		住居址（晚期）
22	武部遺跡	簸川郡斐川町			○	○		
23	御領田遺跡	簸川郡湖陵町			○	○		
24	三部竹崎遺跡	簸川郡湖陵町				○		
25	奥ノ谷遺跡	簸川郡湖陵町				○		
26	姉谷恵比須遺跡	簸川郡湖陵町				○		
27	三部八幡下遺跡	簸川郡湖陵町					○	

表2、中海周辺の縄文遺跡（No.は文献番号と一致する）

No.	遺 跡 名	所 在 地	時 期				特 記 事 項
			草 木	前	中	後	
28	サルガ鼻煙台洞窟遺跡	八束郡美保関町					
29	サルガ鼻洞窟遺跡	八束郡美保関町		○	○	○	
30	梅現山洞窟遺跡	八束郡美保関町				○	○
31	小浜洞窟遺跡	八束郡美保関町				○	○
32	含靈塔下遺跡	八束郡美保関町		○			水中遺跡
33	玉井遺跡	八束郡美保関町				○	
34	江島遺跡	八束郡八束町			○	○	
35	寺の脇遺跡	松江市手角町		○	○		ドングリ貯蔵穴1基
36	権太作遺跡	松江市手角町				○	
37	夫手遺跡	松江市手角町			○		ドングリ貯蔵穴1基
38	柳瀬遺跡	松江市手角町			○	○	ドングリ貯蔵穴
39	松崎遺跡	松江市新庄町				○	
40	荒船遺跡	松江市上本庄町					
41	さっぺい遺跡	松江市八幡町					
42	的場遺跡	松江市八幡町			○		
43	才の井遺跡	松江市竹矢町		○	○	○	
44	法華寺前遺跡	松江市竹矢町			○		
45	才塚遺跡	松江市竹矢町				○	
46	竹矢小学校校庭遺跡	松江市竹矢町		○			
47	竹の花遺跡	八束郡東出雲町		○	○		○
48	鶴貫遺跡	八束郡東出雲町				○	
49	春日遺跡	八束郡東出雲町				○	
50	明子谷遺跡	安来市島田町				○	
51	島田黒谷I遺跡	安来市島田町		○	○	○	
52	目久美遺跡	米子市目久美町		○	○	○	○
53	陰田第1遺跡	米子市陰田町					ドングリ貯蔵穴48基（中期）
54	陰田第7遺跡	米子市陰田町		○	○	○	ドングリ貯蔵穴5基
55	陰田第9遺跡	米子市陰田町		○			
56	西灘遺跡	境港市外江町		○	○	○	○
57	北灘遺跡	境港市外江町				○	水中遺跡
							水中遺跡

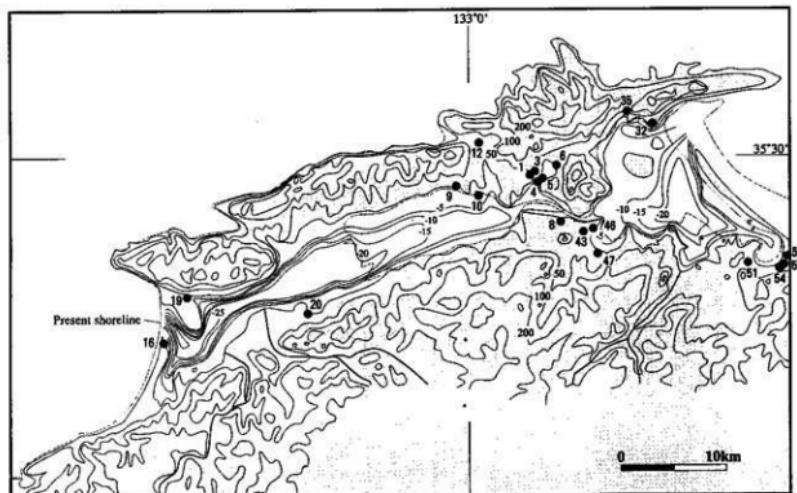


図3 縄文前期前半の遺跡（中村1996をもとに作成）

らかにされ、それに伴う石組護岸構造や橋脚などが検出されている。その他、古墳時代前期と考えられる地震によって生じた噴砂現象の跡が検出されており注目される。

タテチョウ遺跡（松江市西川津町、図3-4）

宍道湖の北東側、朝酌川の氾濫原に形成された低湿地遺跡で、原の前遺跡の下流部に位置する。1949年、74年、77年以降調査がおこなわれている。縄文早期末、前期、晚期、弥生～近世の各時代にわたる遺物が出土している。

佐太講武貝塚（八束郡鹿島町、図3-12）

宍道湖の北側、島根半島の中央部にある講部盆地の西端に位置する。医師、本田繁蔵氏によって認められ、1919年、吉田文俊氏によって試掘された。1932年には、黒板勝美氏によって、踏査され、1933年に国指定史跡となっている。近年では、93～94年に調査が行われている。

貝塚を構成する貝は、ほとんどが汽水性のヤマトシジミで占められることから、「出雲國風上記」にみられる「佐太水海」や「恵曇波」の前進と考えられる潟湖で採取したと推定される。

土器は爪形文土器、条痕文土器を中心として出土している。爪形文土器については前期前半「北白川下層I式」と考えられる。また、前期初頭「轟B式」や中期の土器なども出土している。その他、石斧、石鎌、石皿、磨石、石錘などの石器、貝輪、骨製尖頭器、獸骨などが出土している。

出土遺物の年代や層位関係の検討から、この貝塚の形成は前期初頭ないし前半に始まり、少なくとも中期には終了したことが推定される。

菱根遺跡（簸川郡大社町、図3-19）

出雲平野の北端、出雲大社から北山山麓沿いに東へ約1.3kmの丘陵裾部に位置する低湿地遺跡。1954年、同志社大学の調査團によって調査されている。

出土した土器は、縄文や条痕調整を有し、平底の「繩維土器」で、いわゆる「菱根式」として当地域の標準型式とされ、早期末に位置付けられている。その他、石鎌、石匙、削器、石錐などの石器、骨針、鳥獸類の骨、人骨などが出土している。

上長浜貝塚（出雲市、図3-16）

出雲平野西方の海岸砂丘地に立地する遺跡で、1992～93年に調査が行われている。奈良時代後半～平安時代末期に形成された貝塚だが、最下層の51層、52層から、前期初頭「轟B式」系、早期末「繩維土器」、石鎌、スクレーパー等が大量に出土している。

b、中海周辺

目久美遺跡（米子市目久美町、図3-52）

中海の南東、新加茂川流域に位置する低湿地遺跡。1934年、梅原木治氏により調査されたのを最初に、1982～83年には本格的な調査が行われた。縄文早期末から弥生時代中期までの遺物が出土している。縄文土器は、早期末から晩期のものまで層位的に検出されており、編年研究上、有力な調査例となっている。また、中期に比定されるドングリの貯蔵穴が48基検出されている。

陰田遺跡（米子市陰田町、図3-53・54・55）

中海の南東、目久美遺跡の南西に位置する低湿地遺跡。主として縄文前中期から中期前半頃までの遺物が出土している。土器は、山陽「里木I式」から「船元I～IV式」の範疇に比定されるものが多く出土している。その他、石鍤、石皿、敲石、磨石、石鎌、石匙、石棺などの石器、獸類や魚類の骨、貝類、人乳歯、クルミ、ドングリ類などが出土している。また、木の実貯蔵穴が5基検出されている。

竹ノ花遺跡（八束郡東出雲町、図3-47）

中海の南西、意宇平野に位置する低湿地遺跡。縄文前期土器を主体として、縄文早期末から晩期の上器、弥生土器、石斧、石鎌などが出土している。前期の土器群はI～V群に分類されており、九州「轟B式」系統や山陽「羽島下層式」系統等に対比されている。

含雲塔下遺跡（八束郡美保関町、図3-32）

中海北岸に突出した丘陵の汀線付近において、1939年、佐々木謙氏によって確認された、縄文前期前半～末の遺跡。「磯ノ森式」系の爪形文土器や「大歳山式」系の縄文地突帯爪形文土器のほか、磨製石斧、打製石斧、石鎌などが出土している。

サルガ鼻洞窟遺跡（八束郡美保関町、図3-29）

中海北岸の丘陵先端部に開口する四箇所の海蝕洞窟遺跡で、国史跡にされている。1934年と1936年に佐々木謙、小林行雄、倉光清六氏らによって調査された。最大の第一洞は、入口付近に海面から約4mほどの土砂が堆積している。

上器は、縄文後期のものを主体として、縄文前中期～晩期、弥生土器、須恵器などが出土している。後期後半の縁帶文土器は「崎ガ鼻式」として当地域の標準型式とされ、山陽「津雲上層式」に対比されている。その他、石斧、石匙、石鎌、石錐、磨石、石皿、凹石などの石器、牙製垂飾、硬玉勾玉、貝輪、抉状耳飾などの装身具、鳥獸類や魚類などの骨、貝類などが出土している。また、縄文後期の人骨が数個体分検出されている。

権現山洞窟遺跡（八束郡美保関町、図3-30）

サルガ鼻洞窟遺跡の東約2km、山裾の崖面に開口する海蝕洞窟遺跡。1934年、佐々木謙氏によって報告された。洞窟の床面は、標高約2mほどである。

出土した磨消繩文土器は「輪現山式」として当地域の標準型式とされ、山陽「彦崎KⅡ式」、近畿「元住吉山式」に対比されている。その他、石鏃、骨製尖頭器などが出土している。

(2) 島根大学構内遺跡周辺の歴史的環境

本遺跡は、松江市市街地の北東郊外、山地から派生した「菅田丘陵」と「金崎丘陵」の谷部にあり、丘陵裾部や低湿地一帯にかけての広範囲に形成されている。いわゆる「古宍道湾」ないし「古宍道湖」の最奥部縁辺に相当する。また、近隣には、前述した西川津遺跡、タテチヨウ遺跡等が存在する。

「繩文海進」期には海岸線がこの地域まで進入していたと考えられ、前述した「宍道湖・中海」周辺遺跡群と同様の性格を有したものとして理解してよい。また、低湿地遺跡の特性から、花粉化石、木材化石、火山灰等、古環境変遷を復元する際、有力な資料が得られることを可能としている。このため、海面変動や気候変動に伴う古地形や植生等、空間構造の変遷とこれに即応する遺跡の動態、適応過程を具体的に追及する上で格好のフィールドといえる。

本次（第1次）調査地（橿原手地区）は、「菅田丘陵」の東側裾部と冲積地の変換部にある。調査の結果、「繩文海進」期の海成層、アカホヤ火山灰（K-A h）層、繩文早期末から中期初頭にかけての上器群、丸木舟等が層位的に検出され、該期の文化内容や「繩文海進」の諸相解明に曙光をあてる貴重な成果を得ている¹⁾。また、第1次調査地の南約300mに位置する第2次調査地（諸田地区）では、「繩文海進」後の海退に伴い、水域の沿岸流によって形成された繩文晚期の砂州が検出され、該期には新たな沖積地の形成が進行していたことが確認されている²⁾。

本遺跡西側の菅田丘陵には、薬師山古墳³⁾、小丸山古墳⁴⁾、菅田丘古墳⁵⁾などが存在していたがいずれも消滅している。薬師山古墳は、一種の箱式棺を主体としたものと考えられ、倣製四乳鏡、刀、鉄鏃、滑石製有孔円板、須恵器（山本編年1期）等が出土している。

東側の金崎丘陵には金崎古墳群⁶⁾が存在していたが一部は破壊されて、現在は国指定の1～5号墳のみ残存している。このうち、1号墳は、全長約32mの前方後方墳で、竪穴式石室（竪穴系横口式石室とみる説もある）を主体部にもち、副葬品として直刀、倣製内行花文鏡、玉類、垂飾耳飾、須恵器（山本編年1期）等が発見されている。

注

- (1) 角田徳幸「出雲の後期古墳文化と九州」『風土記の考古学』3、同成社、1995年
- (2) 渡辺貞幸「『出雲連合』の成立と再編」『古代王權と交流』7、名著出版、1995年
　　渡辺貞幸「弥生・古墳時代の出雲」『風土記の考古学』3、同成社、1995年
- (3) 田中義昭・渡辺貞幸他「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」島根大学法文学部考古学研究室、1992年
- (4) 高安克己・竹広文明「『風土記』時代の出雲の自然環境」『風土記の考古学』3、同成社、1995年
　　徳岡隆夫・中村唯史他「島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡」『LAGUNA 汽水域研究』3、島根大学汽水域研究センター、1996年
　　中村唯史「島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡」『島根県地学会会誌』11、1996年
- (5) 竹広文明「中海・宍道湖周辺における生業関連資料集成」『LAGUNA 汽水域研究』2、島根大学汽水域研究センター、1995年
- (6) 田中義昭「弥生時代拠点集落の再検討」『考古学と遺跡の保護 甘柏健先生退官記念論集』、1996年
- (7) 会下和宏他「島根大学構内遺跡（橿原手地区）発掘調査概報！」島根大学埋蔵文化財調査研究センター、1995年
　　会下和宏「山陰地方における繩文早期末～前期初頭の上器様相について」『島根大学法文学部紀要 文学科編』23、

1995年

- (8) 会下和宏・中村唯史『島根大学構内遺跡発掘調査概報II（諸田地区1）』島根大学埋蔵文化財調査研究センター、1996年
- (9) 山本清「島根大学敷地秦師山古墳遺物について」『島根大学論集（人文科学）』5、1955年
- (10) 宍道正年「島根大学敷地裏丘陵の古墳群について」『菅田考古』11、島根大学考古学研究会、1969年
- (11) 山本清「島根大学敷地菅田ヶ丘古墳について」『山陰文化研究紀要』17、1977年
- (12) 山本清「出雲国に於ける方形壇と前方後方墳について」『山陰古墳文化の研究』、1971年
- 岡崎雄二郎ほか『史跡金崎古墳群 昭和52年度環境整備事業報告書』松江市教育委員会、1978年

表1・2の文献（文献番号は遺跡番号と一致する。）

- 1、島根大学埋蔵文化財調査研究センター『島根大学構内遺跡発掘調査概報 II（諸田地区1）』1996年
- 2、島根大学埋蔵文化財調査研究センター『島根大学構内遺跡（綾織手地区）発掘調査概報 I』1995年
- 3、島根大学埋蔵文化財調査研究センター『島根大学構内遺跡第3次調査（深町地区）現地説明会資料』1996年
- 4、島根県教育委員会ほか『朝酌川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書 I・II』1979・1987年
- 5、島根県教育委員会『朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 原の前遺跡』1995年
- 6、島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書 I・III・V』1980・1987・1989年
- 7、宍道正年『島根県の縄文土器集成 I』1974年
- 8、a、島根県教育委員会『石台遺跡 - 馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告一』1986年
b、島根県教育委員会『石台遺跡 - 馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告二』1993年
c、柳浦俊一『石台遺跡出土の縄文時代資料(1)』『八雲立つ風土記の丘No121』1993年
- 9、a、宍道正年『県下における縄文早期ないし前期土器の一様相 いわゆる「轟式」系統土器の発見一』『季刊文化化』23、1974年
b、7と同じ
- 10、7と同じ
- 11、鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 4 北講武氏元遺跡』1989年
- 12、a、山本清『佐太講武貝塚』『講武村誌』1955年
b、鹿島町教育委員会『佐太講武貝塚発掘調査報告書』1991年
c、鹿島町教育委員会『佐太講武貝塚発掘調査報告書』2、1994年
- 13、大谷從二・大國一雄・池田次郎『出雲猪目洞穴遺跡調査概報』『人類学雑誌』61-1、1949年
- 14、池田満雄・足立克巳『出雲市矢野遺跡出土の縄文土器』『島根考古学会誌』第4集、島根考古学会、1987年
- 15、島根県教育委員会『出雲・上塙治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980年
- 16、a、出雲市教育委員会『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第1集、1988年
b、出雲市教育委員会『上長浜貝塚』1996年
- 17、a、杉原在介『出雲原山遺跡調査概報』『考古学雑誌』第1冊、1948年
b、大社町教育委員会『出雲・原山遺跡発掘調査概報』1986年
- 18、6と同じ
- 19、酒詰仲男・石部正志『島根県斐根遺跡発掘報告書』『出雲古文化調査団報告書』1959年
- 20、斐川町教育委員会『島根県斐川町 遺跡分布調査報告書』1992年
- 21、20と同じ
- 22、20と同じ
- 23、湖陵町教育委員会『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書（御領田遺跡・三部竹崎遺跡）』1994

年

24、23と同じ

25、湖陵町教育委員会『一般廃棄物処理施設管理道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（奥ノ谷遺跡）』1995年
26、a、湖陵町教育委員会『庭反Ⅱ遺跡・他 昭和61年度調査報告書』1987年

b、湖陵町教育委員会『神南地区担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書（只谷Ⅰ・Ⅱ、三部八幡下、中島下遺跡ほか）』1995年

27、26aと同じ

28、竹広文明・渡辺貞幸ほか「島根半島洞窟遺跡の研究－美保関町サルガ鼻橙台洞窟遺跡の試掘調査－」「LAGUNA汽水城研究」3、1996年

29、a、佐々木謙・小林行雄「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び櫛現山洞窟遺跡」「考古学」8-10、1937年

b、山本清「美保関町サルガ鼻・櫛現山洞窟住居跡について」「島根県文化財調査報告書」3、1967年

30、29と同じ

31、山本清「島根県小浜洞穴」「日本の洞穴遺跡」平凡社、1967年

32、7と同じ

33、7と同じ

34、7と同じ

35、a、島根県文化財愛護協会『寺ノ脇遺跡 県道松江・境線改良工事埋蔵文化財緊急調査報告』1969年
b、勝部昭「寺ノ脇遺跡について」「菅田考古」5、1964年

36、35と同じ

37、山本清・佐々木謙ほか「第2章 繩文文化」「さんいん古代史の周辺（上）」1978年

38、37と同じ

39、37と同じ

40、島根県教育委員会『島根県遺跡地図 I（出雲・隱岐編）』1987年

41、7と同じ

42、7と同じ

43、島根県教育委員会ほか『国道9号線バイパス建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書 IV』1983年

44、島根県教育委員会『島根県文化財調査報告書』第5集、1968年

45、7と同じ

46、7と同じ

47、足立克己「出雲の前期繩文土器－竹ノ花遺跡出土の土器を中心として－」「えとのす」16、1981年

48、島根県教育委員会ほか『中山遺跡・巻林遺跡 一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区 II』1994年

49、43と同じ

50、島根県教育委員会『明子谷遺跡・島田黒谷II遺跡・島田黒谷III遺跡・猫ノ谷遺跡－一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 IV-1』1994年

51、島根県教育委員会ほか『才ノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷I遺跡 一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 9』1995年

52、米子市教育委員会ほか『加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日久美遺跡』1986年

53、米子市教育委員会ほか『一般国道9号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 隆田』1984年

54、53と同じ

55、53と同じ

56、37と同じ

57、37と同じ

その他の参考文献

- 会下和宏『『宍道湖・中海』周辺における縄文遺跡と古環境』『風土記の考古学』3、同成社、1995
河瀬正利『山陰地方の縄文早期・前期の様相』『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』1986年
宍道正年『島根県の縄文土器研究の諸問題』『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』1986年
西尾克己・野坂俊之『神西湖周辺の集落遺跡』『湖陵町誌研究』4、湖陵町教育委員会、1995年
竹広文明『汽水域周辺の生業－縄文、弥生時代における中海・宍道湖周辺の漁労活動－』『海跡湖堆植物からみた汽
水域の環境変化－その地域性と一般性－、平成7年度報告・資料集』高安克己編、1996年

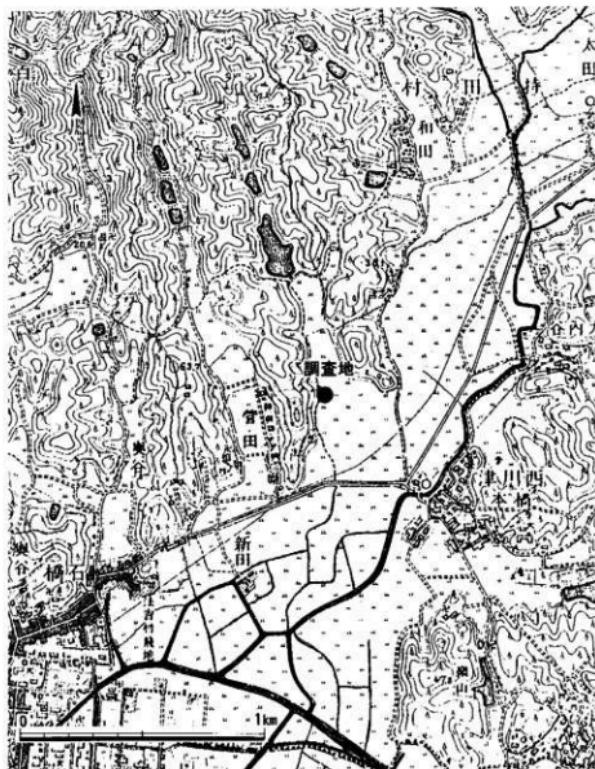


図4 1918(大正7)年の調査地周辺(1/20000)



図5 島根大学周辺の遺跡（1/25000）

周辺遺跡（図5）

- 1、鳥根大学構内遺跡 2、西川津遺跡 3、原の前遺跡 4、タテチヨウ遺跡 5、流田遺跡
- 6、小林古墳群 7、I 2 4 古墳群 8、I 1 8 古墳群 9、I 2 7 遺跡 10、I 1 9 遺跡
- 11、後谷古墳群 12、荒神古墳 13、I 2 0 遺跡 14、I 2 2 遺跡 15、川原庄の上横穴群
- 16、香々廻古墳群 17、I 2 1 遺跡 18、常熊古墳 19、小松谷古墳 20、J 5 7 古墳群
- 21、J 5 5 古墳 22、J 3 7 古墳 23、J 3 6 古墳 24、J 3 5 遺跡 25、仁王ヶ谷横穴群
- 26、向星敷横穴群 27、J 1 8 遺跡 28、西宗寺古墳 29、山根横穴 30、嵐山麓遺跡
- 31、巻遺跡 32、九日宮古墳群 33、遷倉横穴群 34、藤谷B遺跡 35、廻原古墳群
- 36、朝酌上神社跡古墳 37、朝酌小学校前古墳 38、朝酌小学校校庭古墳 39、新山遺跡
- 40、松ヶ鼻窓跡 41、間谷遺跡 42、草安切遺跡 43、廟所古墳 44、銀音山古墳 45、南尾横穴
- 46、安藏主遺跡 47、米坂遺跡 48、米坂古墳群 49、柴尾遺跡 50、G 2 3 遺跡
- 51、G 2 8 遺跡 52、G 2 2 遺跡 53、G 2 1 遺跡 54、J 2 6 古墳群 55、J 3 1 遺跡
- 56、J 2 1 古墳 57、葉佐馬古墳 58、藤谷A遺跡 59、J 3 2 遺跡 60、J 2 2 古墳群
- 61、J 2 7 古墳群 62、八色谷遺跡 63、才ノ神遺跡 64、川津第1 1号墳 65、川津第1 2号墳
- 66、中尾古墳 67、J 5 8 遺跡 68、I 4 8 古墳 69、納佐池遺跡 70、I 4 9 古墳
- 71、I 4 5 遺跡 72、石野古墳群 73、立花横穴 74、谷田遺跡 75、太田古墳群 76、納佐遺跡
- 77、I 4 6 遺跡 78、後田古墳 79、前田古墳 80、家の上古墳 81、井上古墳 82、一の谷古墳
- 83、祖子分長池古墳 84、祖子分胡麻煙窓跡 85、柴遺跡 86、J 1 6 遺跡 87、提道遺跡
- 88、橋本遺跡 89、柴II遺跡 90、柴古墳群 91、山崎古墳 92、馬込山古墳群
- 93、旧川津小学校裏古墳 94、空山古墳群 95、古屋敷古墳 96、貝崎遺跡 97、J 4 3 古墳
- 98、貝崎古墳群 99、西川津貝崎遺跡 100、持田川流域条里制遺跡 101、小丸山古墳群
- 102、I 4 4 遺跡 103、城の越横穴 104、松の前古墳 105、I 4 3 遺跡 106、銀冶屋谷横穴
- 107、穴の口横穴群 108、洞泉寺裏古墳 109、J 5 3 古墳 110、I 4 0 遺跡 111、塙の内古墳
- 112、I 3 9 遺跡 113、I 4 2 遺跡 114、I 3 7 遺跡 115、金刀比利羅谷古墳 116、国石古墳
- 117、尾山横穴群 118、大源古墳 119、I 4 1 遺跡 120、和田上遺跡 121、宮垣古墳群
- 122、深町横穴 123、J 5 4 古墳 124、深町古墳群 125、福山古墳 126、金崎古墳群
- 127、上浜弓古墳群 128、浜弓古墳群 129、菅田ヶ丘古墳群 130、宮田古墳群 131、小丸山古墳
- 132、菅田丘古墳 133、薬師山古墳 134、元井出遺跡 135、赤崎横穴 136、桜崎横穴
- 137、ひのさん山横穴群 138、折通古墳群 139、松ヶ峰古墳 140、岡田薬師古墳
- 141、二反田古墓 142、切通横穴 143、茶町遺跡 144、人參方跡 145、白鹿谷遺跡
- 146、なつめ谷荒神古墳 147、コゴメダカ山遺跡 148、長谷窓跡（推定地）
- 149、長谷越神古墳 150、栗元古墳 151、栗元機穴 152、煙硝倉古墳 153、K 3 4 古墳
- 154、赤山横穴群 155、摩利支天山横穴 156、法吉小学校裏山横穴群 157、春日遺跡
- 158、中代遺跡 159、法吉遺跡 160、石在経塚 161、久米横穴群 162、比津が崎横穴群
- 163、唐梅古墳群 164、久米古墳群 165、山根縄塚群 166、山根古墳群
- 167、吉岡兵之助宅前古墳 168、下り松II遺跡 169、鶯谷遺跡 170、下り松I遺跡
- 171、伝宇牟迦比姫命御陵古墳 172、新宮古墳 173、塙山古墳 174、松崎金一郎所有山林古墳
- 175、田中谷遺跡 176、下り松遺跡 177、下り松窓跡 178、田中谷古墳群 179、月廻横穴群
- 180、久米遺跡 181、久米第2横穴群 182、ひゅくだ横穴 183、水筋崎横穴群
- 184、ゴルフ場内横穴群 185、ゴルフ場内古墳群 186、小丸山古墳 187、K 3 8 古墳

- 188、K 3 3 古墳 189、とねり坂横穴群 190、K 3 2 古墳 191、天倫寺前遺跡
192、小池谷横穴群 193、殿山横穴群 194、東前横穴群 195、L 3 6 古墳 196、大北古墳
197、名尾荒神古墳 198、名尾丘古墳 199、かいつき山古墳群 200、井原古墳
201、山玉神社跡 202、山王古墳 203、桜本古墳 204、大門遺跡 205、桜本古墳群
206、名尾遺跡 207、平遺跡 208、法恩寺遺跡 209、法恩寺瓦窯跡 210、官ノ下遺跡
211、東生馬遺跡 212、辺田横穴群 213、生馬神社旧社地 214、大岩遺跡 215、郷戸横穴群
216、布自枳見跡 217、高専敷地内古墳群

第3章 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査は、現地表から約1.4m下までの現代盛土を重機掘削によって排除した後、下位の遺物包含層を層位ごとに人力によって掘り下げ、精査した。包含層は第1層から第8層までに大別され、層厚約4mほどある。このうち、第1層から第5層までは調査区全面を掘り下げ、第6層から第8層まではサブトレンチを設定し部分的な掘り下げを行った。サブトレンチは、調査区西側の南北トレンチ、中央部の東西トレンチ、東側の南北トレンチの3ヶ所を設定した。

遺物の取り上げにあたっては、トレンチの中心主軸線を基準として4m四方のグリッドで区分し、出土したグリッド名を記録した。グリッド名は、東西ラインを北からA～H、南北ラインを西から1～12とし、例えば、東西ラインのA、南北ラインの2に位置するグリッドはA 2 グリッドと呼称した。また、縄文時代の遺物に関しては、出土地点とレベルをすべて記録した。流木や倒木等、木材化石は1/50の図面に図示し、レベルを記録した後、すべて取り上げた。

その他、花粉・珪藻分析や硫黄分析用の試料採集等、自然科学的調査も適時行い、考古学的調査成果を補足的に後付けた。

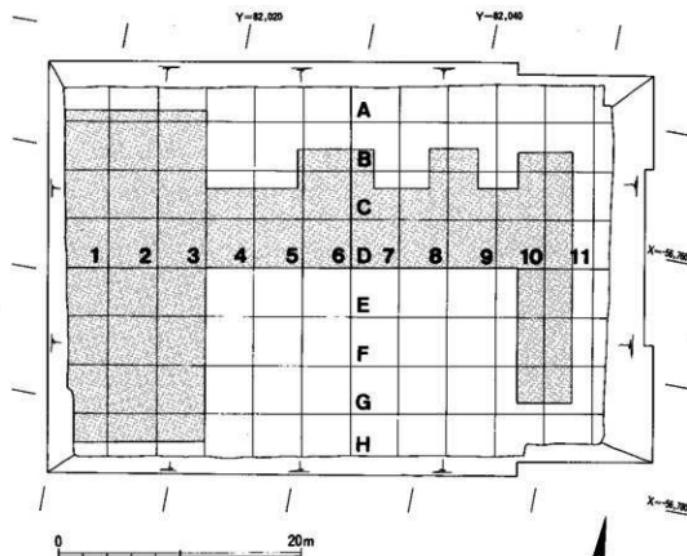


図6 グリッド設定図

2 調査の経過

調査面積は約1200m²ほどで、94年6月6日から11月4日までのおよそ5ヶ月を費やした。最上位の現代盛土は重機によって排除し、下位の遺物包含層について、第1層から、人力で層位的掘り下げと精査を行った。

第1層上面では、大正時代の水田暗渠溝等を検出した。第1層からは、縄文時代から近世までの多様な遺物が混在して出土した。このうち、中・近世の遺物には、唐津、瀬戸を始め東播系須恵器、常滑、輸入陶磁器等、各種陶磁器が出土している。

第4層は、縄文海進に伴う「古穴道湾」の海成層で、その汀線が調査区西側に位置することが確認された。

第4層を掘り下げたところで、第4層下位砂層から前期末「大歳山式」上器、中期初頭「船元1式」土器が、第5層上面、第6層上面から「轟B式」系及び「北白川下層1式」を始めとした縄文前期初頭から中期初頭頃までの土器、石器等が出土した。加えて、G1・2～H1グリッド、第5a層中に埋没した状態で、縄文前期初頭～前半の丸木舟を検出した。また、各層位において、木材化石等、有機質遺物が良好な状態で出土した。

この時点で全景写真を南から撮影した後、8月25日、研究員による調査指導会を開き、今後の調査課題、方法等について検討した。

その結果、本次調査区が、縄文時代前期を中心とした水域縁辺部の遺跡であることを確認し、その文化内容の解明について主要な課題認識をした。加えて、海成層等の理化学的解析が海面変動を始めとした古環境変遷の復元にとって有望な資料となることを認識し、自然史と遺跡との相関の解明についても問題定位を行い、学際的、総合的に調査を進めていくことを方向付けた。

第6層より下位に関しては、安全面への配慮からサブトレンチを設定して部分的な掘り下げを行い、下層の状況を確認してから再検討することとした。サブトレンチを掘り下げた結果、標高-1.5mの位置から約2cmの厚さでアカホヤ火山灰（K-A h）純粹層の堆積を検出した。

つづいて、サブトレンチを3ヶ所設定、拡張した結果、調査区西側においては、菅田丘陵の東側裾部に相当する基盤層を検出した。さらに、この丘陵裾部上面、アカホヤ火山灰層下位から、縄文早期末「織維土器」が出土した。一方、調査区東側トレンチにおいては、アカホヤ火山灰層の下位まで掘り下げたが、遺物の検出はみなかった。

こうした結果をふまえて、10月26日、再度調査指導会を開き、この時点で調査の終了を決定した。この間、9月20日に記者発表、10月4～6日に丸木舟の取り上げ作業を行っている。丸木舟取り上げ作業は、中村陵子氏（島根県埋蔵文化財調査センター）の指導を仰ぎながら進めた。また、腐植土層の水洗選別法によって、微細遺物の抽出を試みたが、特筆される様な遺物の出土はみなかった。その後、土層のはぎ取り、土壤試料の採取、現地説明会等を行った後、11月4日にすべての作業を終了した。

第4章 基本層序

図7は、調査区の東西主軸線(D・Eグリッドの境界ライン)に沿って残したセクションの北側断面図、図8は、調査区西壁の断面図である。

基本層序は現地表から1.4m下までが現代盛上、その下位が遺物包含層となる。遺物包含層は、第1層から第8層までに大別され、層厚約4mある。調査区西側中央部が、ちょうど昔田丘陵東側裾の突出部に相当し、第8層下位の粘土化した基盤層は、西側(丘陵側)から東側に、中央部から南北両側に傾斜している。上位の堆積層も、基盤層の傾斜を反映して、おむね、同様に傾斜する堆積をみせる。

遺物包含層の概要

(番号は図に示した数字と一致する。色調は『新版標準土色帖』による。)

1 第1層

しまった黄灰色泥土で、近代の水田耕土。縄文時代から中世、近世、近代の多様な遺物を含む。第2層に対して不整合に堆積する。

2 第2層

しまったオリーブ黒色泥土。須恵器片1点と上師器皿片1点が出土している。

第2層下位砂層(図9)

第2層下位、調査区南東隅において部分的に検出した砂層。H7グリッドからE12グリッドにかけて堆積する。奈良時代の須恵器が1点と炭化した木片が出土している。

3~9 第3層

黒褐色腐植土。人工遺物なし。

10~12 第4層

黒褐色泥土。上面の標高は最高で+1.2m、最低で+0.8m。人工遺物なし。全硫黄濃度分析やナクイムシの生痕を有する流木の検出から、海成層と認定している。発掘調査中、断面風化面から、海成層中に含まれていた硫黄や石膏が、粉としてふきだす現象が観察された。層中から、拳大の礫が、大量に出土している。

13 第4層下位砂層(図10)

暗褐色粗砂。第4層下位、調査区北西隅において部分的に検出した砂層。第5層上面を、D1グリッドからA4グリッド付近に堆積する。縄文前期前半~中期初頭の遺物を包含する。

14 第5a1層(図12)

黒色腐植土。調査区西側のみ堆積し、調査区中央部付近で消滅する。縄文前期初頭~前半の遺物を包含する。本層から丸木舟が出土している。上面からは縄文前期前半~中期初頭の遺物が出土している。

15 第5a2層 黒褐色腐植土。

16 第5b1層 調査区西側のみ堆積する黒褐色泥土。

17 第5b2層 調査区西側のみ堆積する黒色泥土。

- 18 第5c層 調査区西側のみ堆積する黒色腐植土。
- 19 第6層
松江層玄武岩に由来するオリーブ黒色粗砂が斜行堆積する。河川による洪水層で、比較的、短期間にのうちに堆積したものと考えられる。上面の標高は最高で+0.6m、最低で-0.2m。遺物は黒曜石が1片のみ出土する。上面において縄文前期初頭～中期初頭の遺物が出土している。
- 20 第6層下位粘土層
オリーブ黒色粘土。海成層。ナクイムシの生痕をもつ流木が検出されている。
- 21 第7a層 黒色泥土。
- 22 第7b'層
黒褐色泥土。有機質に富む第7b層から黒色泥土の第7c層へ漸移的に変化する中間層。
- 23 第7b1層 黒褐色腐植土。調査区北東A～C・1グリッドのみに堆積。
- 24 第7b2層 黒色腐植土。調査区北東A 1グリッドのみに堆積。
- 25 第7b3層 黒褐色腐植土。
- 26 第7c層 黒色泥土。海成層。
- 27 アカホヤ火山灰(K-Ah)層
灰白色細砂。第7b層、第7c層中に、厚さ約1～2cm幅で帯状に一次堆積する。調査区東側では標高-1.4～-1.6m付近に堆積し、調査区西側では上界しながら、-0.7m付近で、第8層上面にぶつかる様に消滅する。
- 28 第7d層 オリーブ黒色泥土。海成層
- 29 第7e層 黒色泥土。
- 30 第8層(図13)
しまって固い黒褐色粘土層。基盤層が風化し土壤化した層。おおむね、調査区西側から東側へ傾斜、3グリッド付近でやや傾斜変換し、さらに東側へながらに下降していく。上面から早期末「繊維土器」が出土している。

各上層から出土した遺物の年代を整理すると、第1～2層は各時代のものが混在、第2層下位砂層が奈良時代、第4層下位砂層が縄文前期前半～中期初頭、第5層上面・第6層上面が縄文前期初頭～中期初頭、第5層が縄文前期初頭～前半、第8層上面が縄文早期末になる。出土遺物から、各層位の堆積年代は、アカホヤ火山灰層上位の第6層が縄文前期初頭、第5層が縄文前期初頭～前半、第4層下位砂層が縄文中期初頭、第4層が縄文中期初頭以降、第2層下位砂層が奈良時代頃と推定している。また、アカホヤ火山灰純粹層の検出は、年代特定や海面変動の推定にとって、有効な指標となった。堆積層の観察、分析から得られた、自然環境、景観の変遷過程の様相については、第6章、第7章で、後述する。

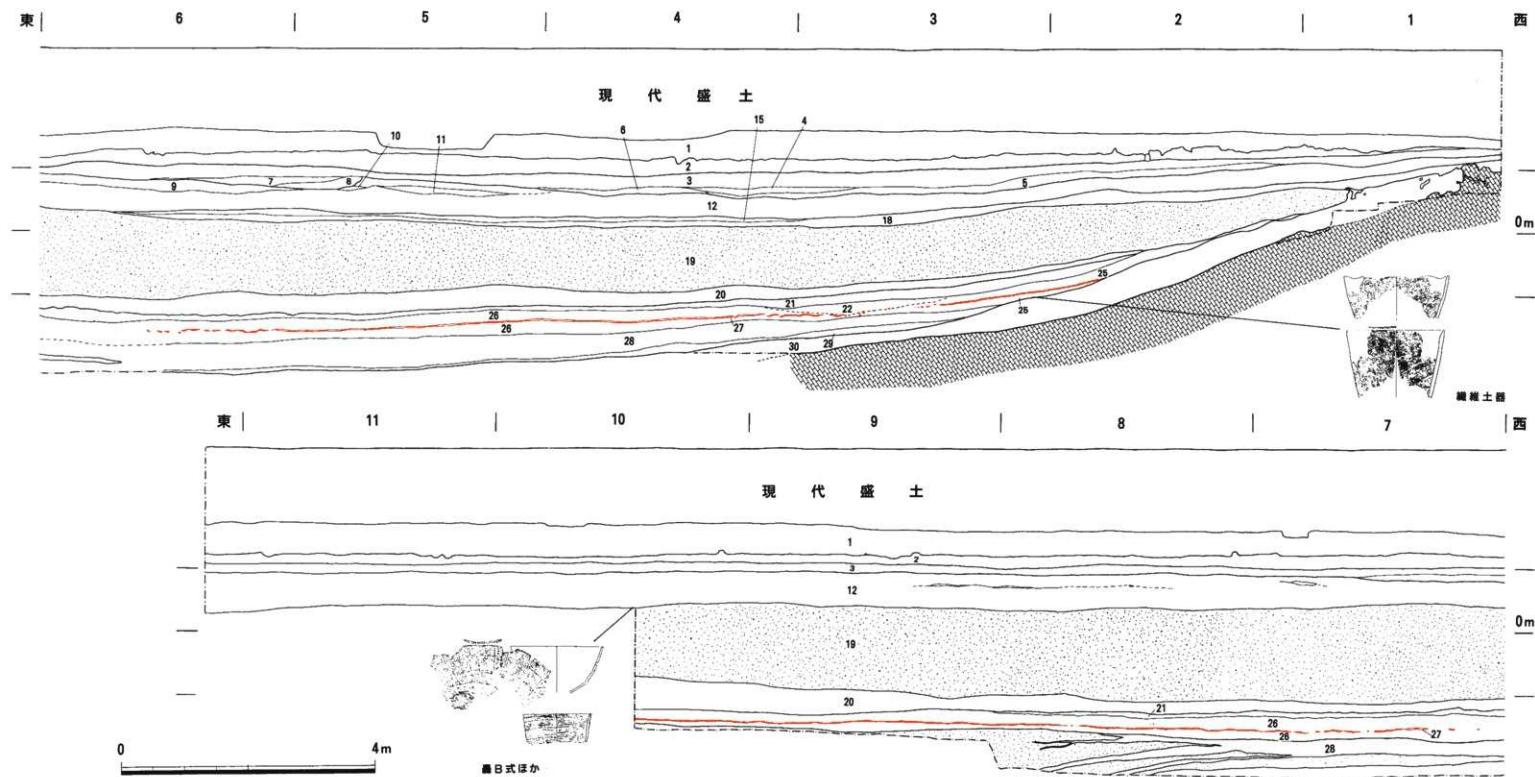


図7 調査区東西主軸線（D・E間ライン）断面図（1/60）

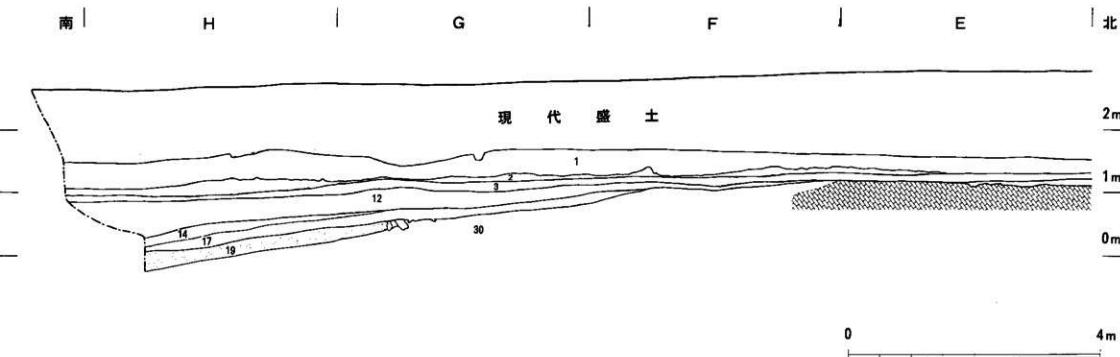
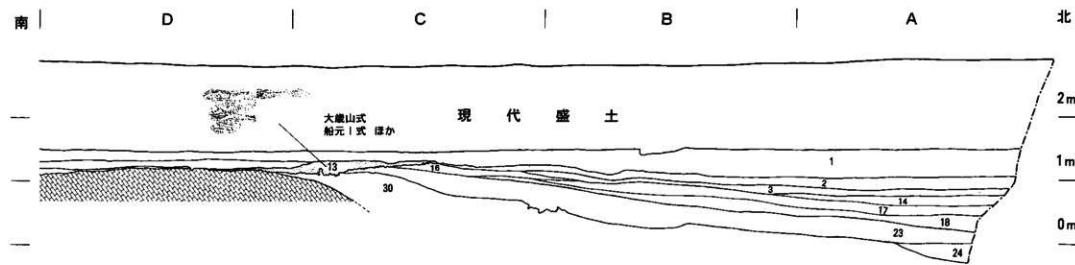


図8 調査区西壁断面図 (1/80)

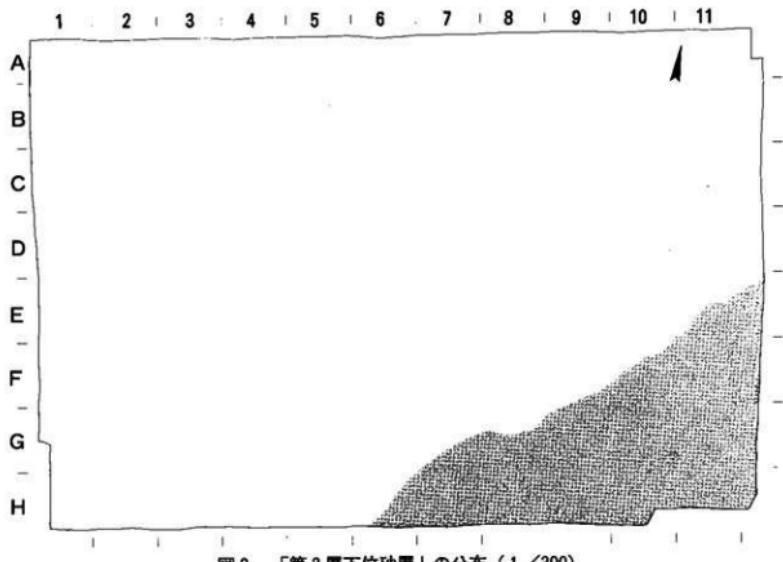


図9 「第2層下位砂層」の分布 (1/300)

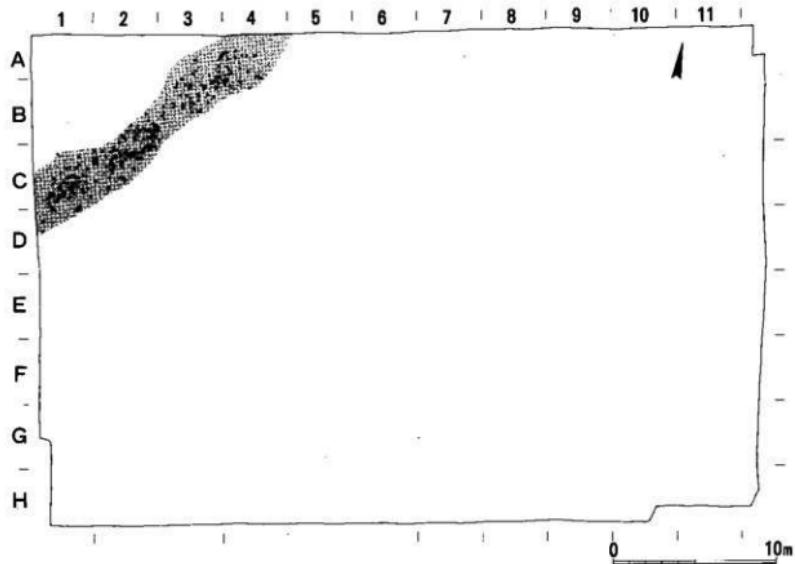


図10 「第4層下位砂層」と出土遺物の分布 (1/300)

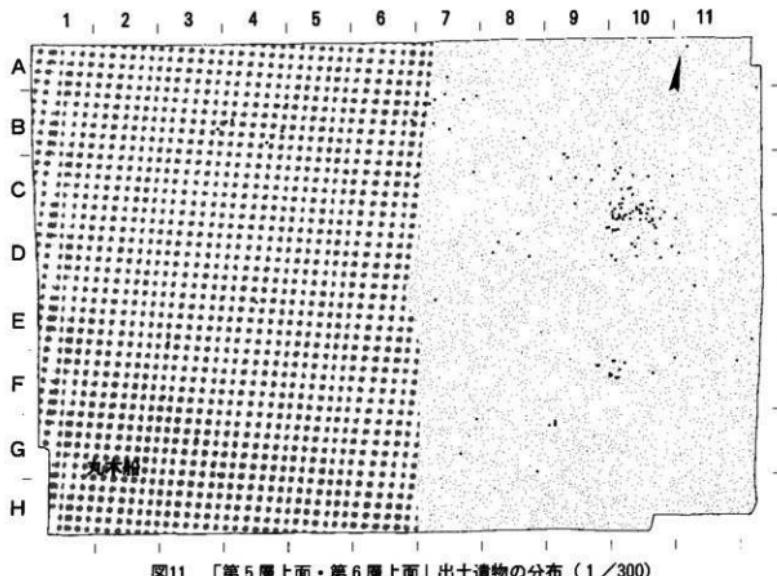


図11 「第5層上面・第6層上面」出土遺物の分布 (1/300)

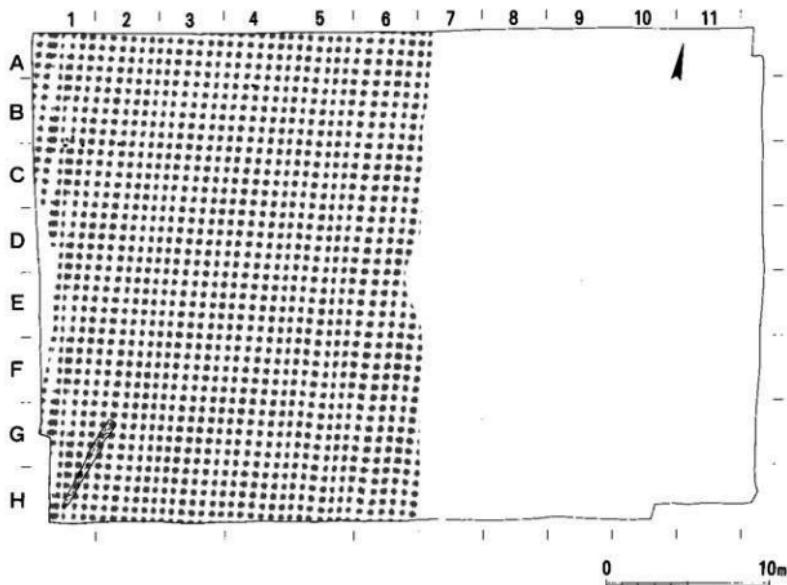


図12 「第5層」と出土遺物の分布 (1/300)

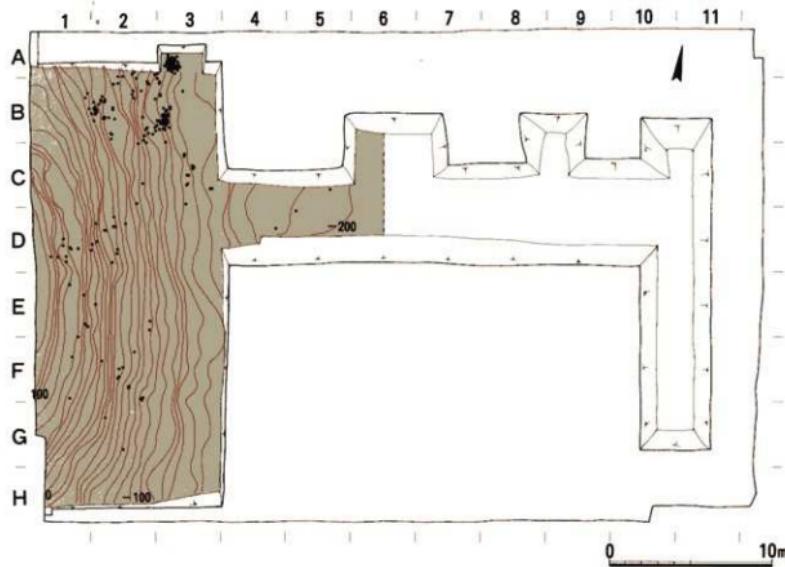


図13 第8層上面と出土遺物の分布（1／300）

第5章 遺物

1 土器、陶磁器

主な人工遺物のうち、縄文土器は、第8層上面、第5a層、第5層上面・第6層上面、第4層下位砂層から、縄文～古代、中近世土器、陶磁器類が第1層から出土している。

縄文土器は、1類から13類まで分類した。以下、出土層位ごとに説明していく。

(1) 第8層上面(アカホヤ火山灰層下位)出土の縄文土器

第8層上面出土の土器は、胎土に纖維を含む、いわゆる「纖維土器」である。器形は、丸底や尖底気味の底部を有する深鉢である。器表には、煤が顕著に付着しており、煮沸に使用されたことが想定される。

地文の種類から1A～E類に細分出来る。

1 A類(図14-1～図16-13)

内外面とも縄文。

1、2は、単節RLである。1は深鉢で、外面は原体を横方向に転がしているが、内面は縦方向に転がしている。輪積み成形で、器壁の厚さは0.8～0.9cmほどである。外面の一部と内面に煤が付着する。2は口径33cm前後の口縁部で、ゆるやかな波状を呈し、口唇部にも縄文施文がみられる。外面、内面とも煤が付着する。

1 B類(図16-14～図17-33)

外面が縄文、内面が条痕。

1 C類(図18-34～図19-49)

外面が縄文、内面が平滑なナデ調整やケズリ調整、あるいは条痕をナデ消すもの。

1 C₁類(図18-34～36)外面の縄文が無節のもの。

34は、口径約30cmの口縁部で、外面は無節Rの縄文、内面は口縁部付近が無節Rの縄文で脇部はケズリ調整である。口縁部外面に、ヘラ状工具による「×」状の文様を有する。口唇部にも縄文施文がある。器壁の厚さは1.2～1.3cmと厚手である。外面に煤が付着する。

1 C₂類(図18-37～図19-49)外面の縄文が単節のもの。

1 D類(図20-50～図22-73・図24-93)

内外面とも条痕。

1 E類(図22-74～図23-92)

外面が条痕、内面が平滑なナデ調整、あるいは条痕をナデ消すもの。

84は、口縁部外面に刺突文を有する。

底部(図24-93～95)

底部は3点出土している。93は尖底気味のもので、外面は不定方向の条痕調整、内面は条痕及びケズリ調整である。94、95は丸底である。94は、外面は無調整で、土器成形時における保持具の圧痕をとどめる。内面は粗いケズリ調整である。95は、外面無調整、内面は粗いケズリ調整である。



図14 第8層上面出土土器（1A類、1／3）

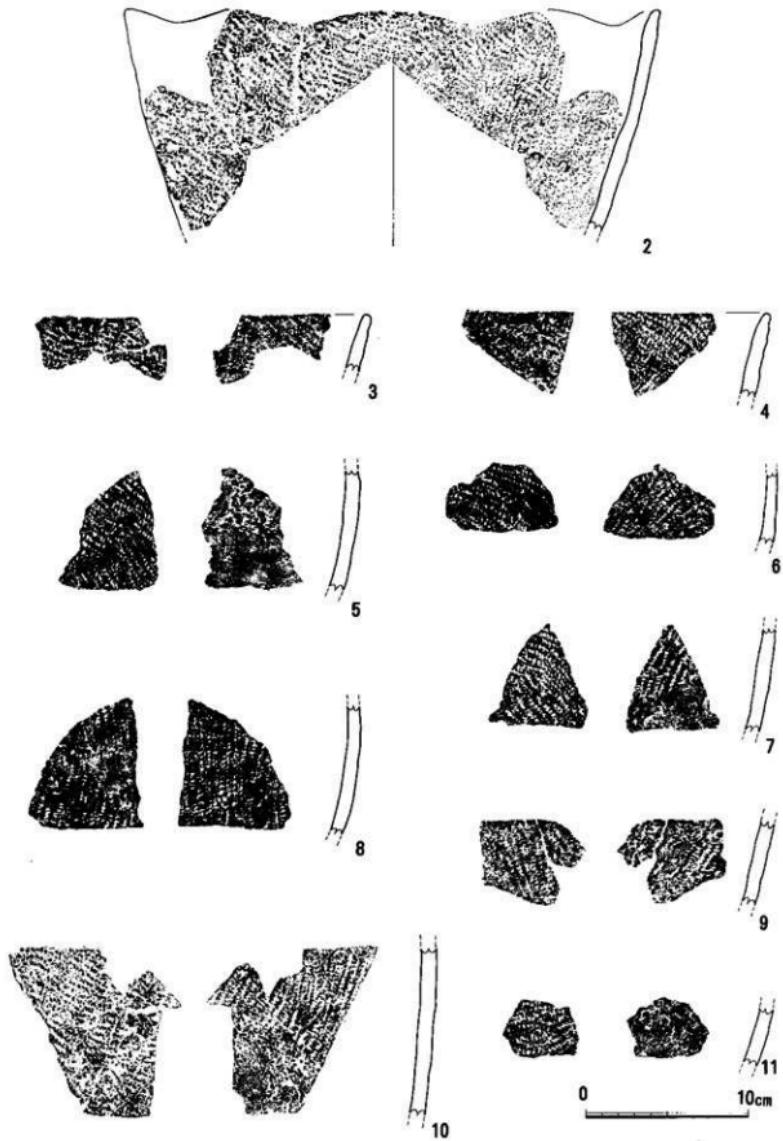


図15 第8層上面出土土器（1A類、1/3）

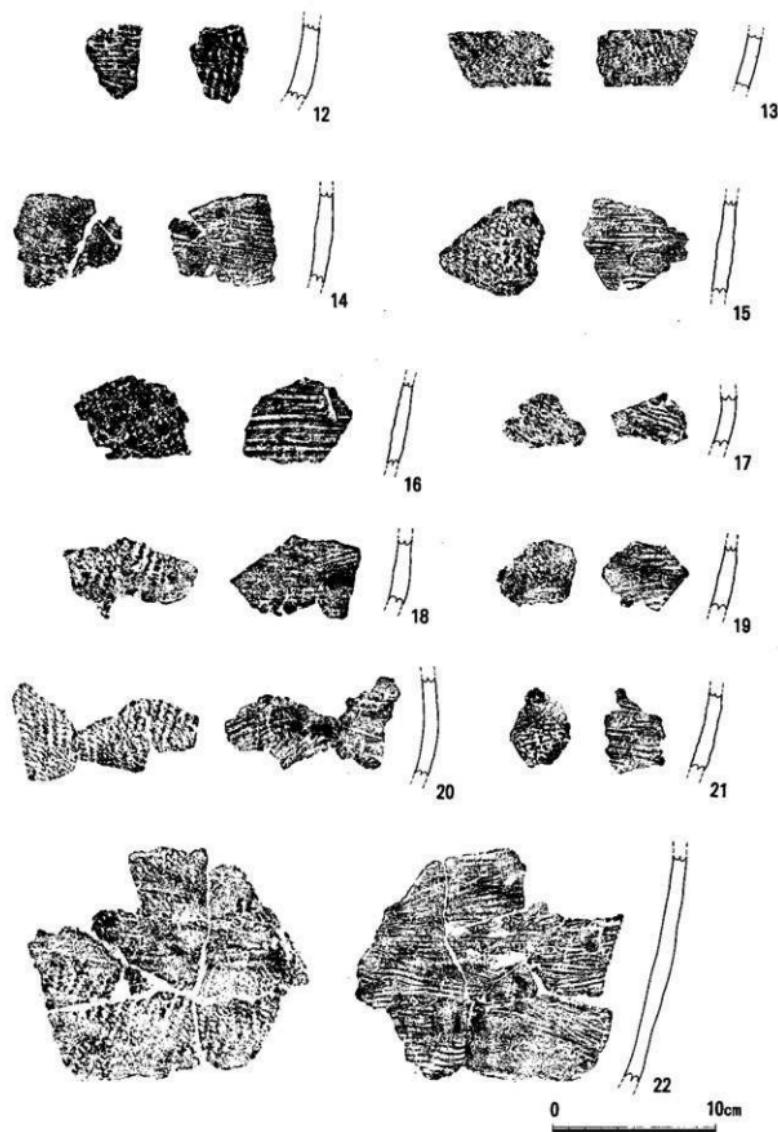
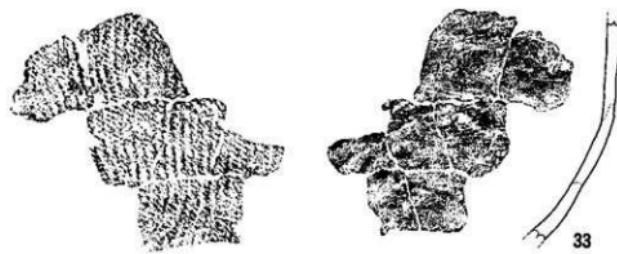
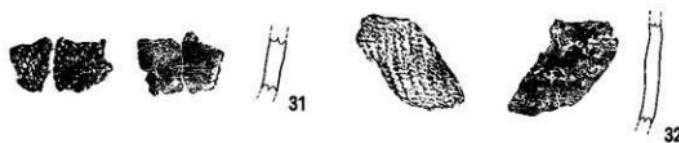
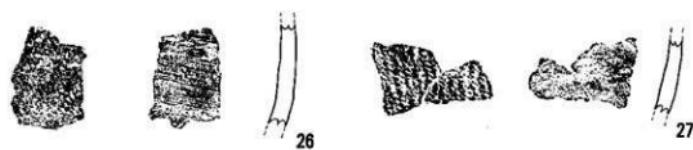
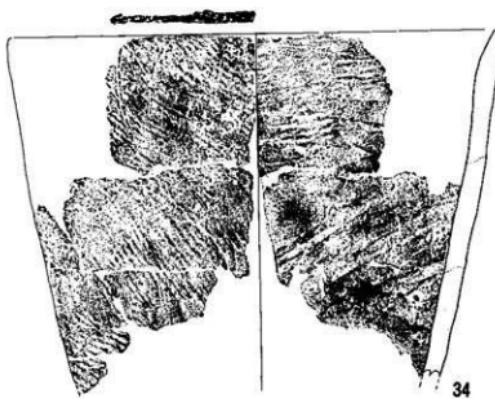


図16 第8層上面出土土器（1A・1B類、1/3）

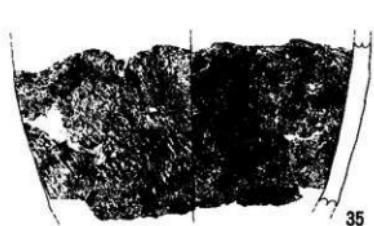


0 10cm

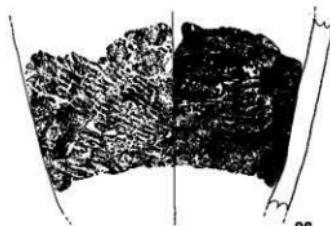
図17 第8層上面出土土器（1B類、1／3）



34



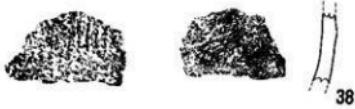
35



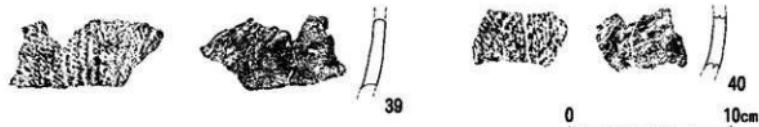
36



37



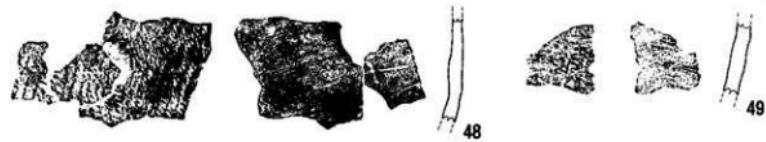
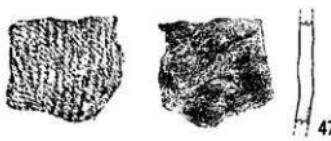
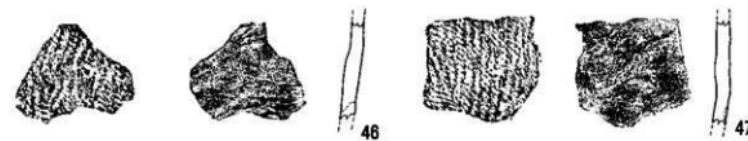
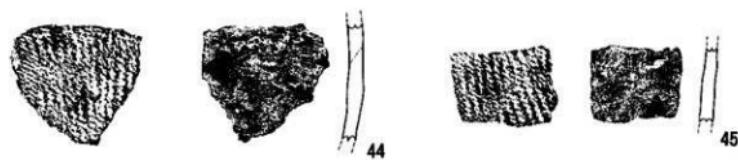
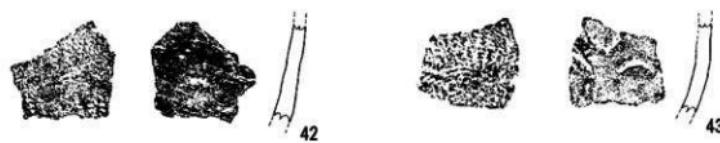
38



39

0 10cm

図18 第8層上面出土土器（1C類、1／3）



0 10cm

図19 第8層上面出土土器（1C類、1／3）

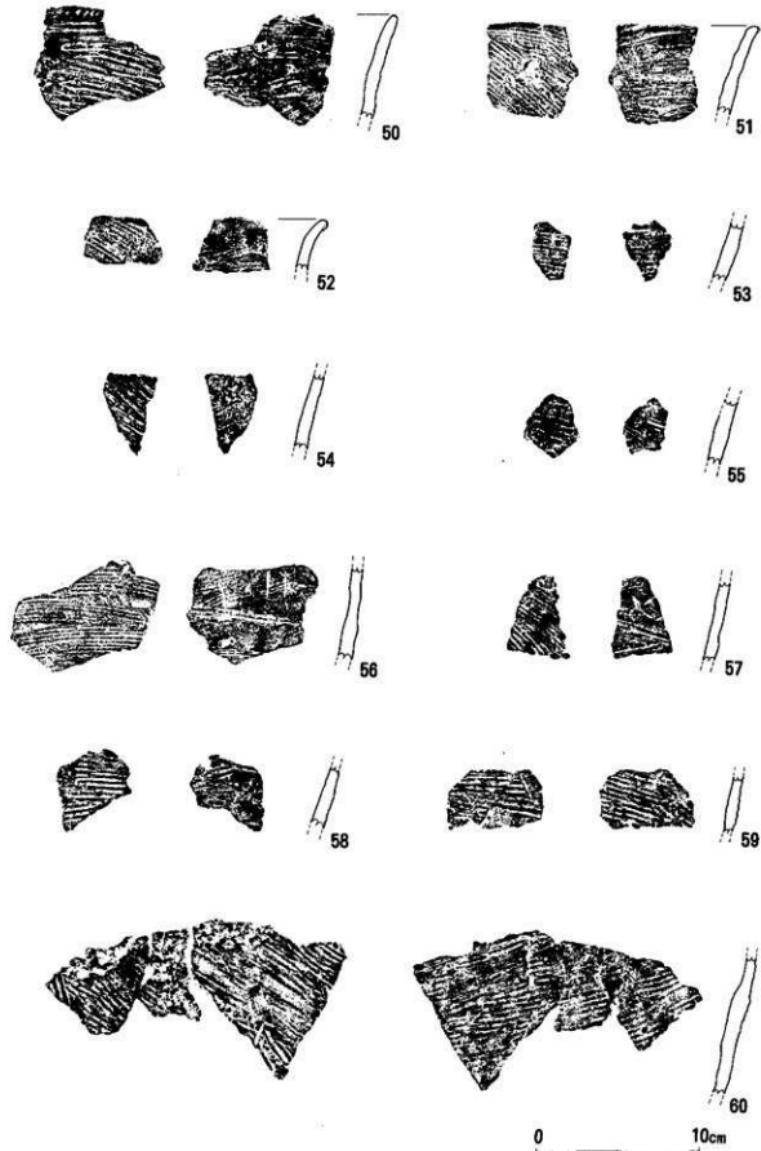


図20 第8層上面出土土器（1D類、1/3）

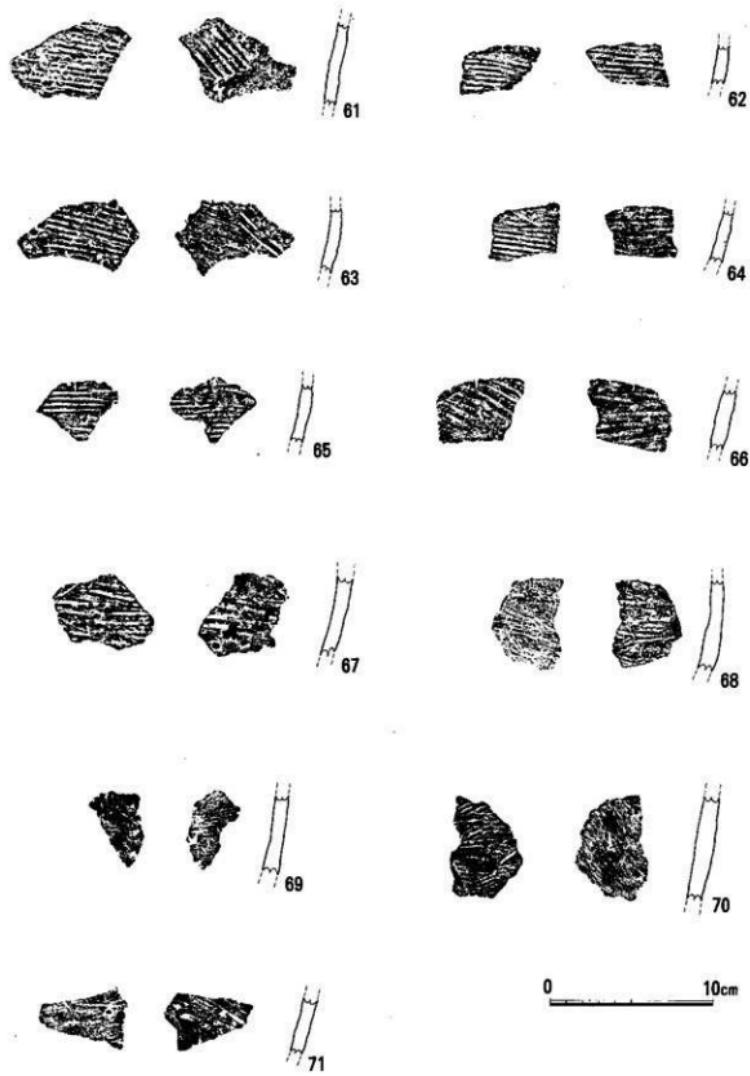


图21 第8層上面出土土器（1D類、1／3）

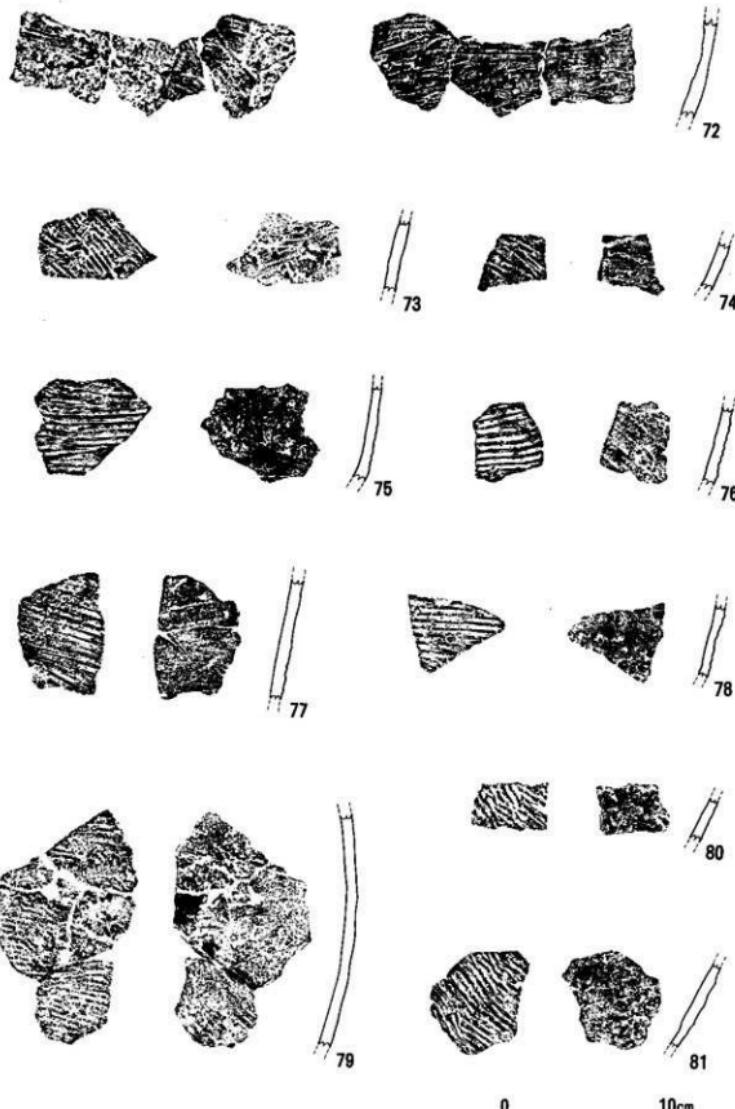


図22 第8層上面出土土器 (1D・1E類、1/3)



0 10cm

圖23 第8層上面出土土器 (1E類、1/3)

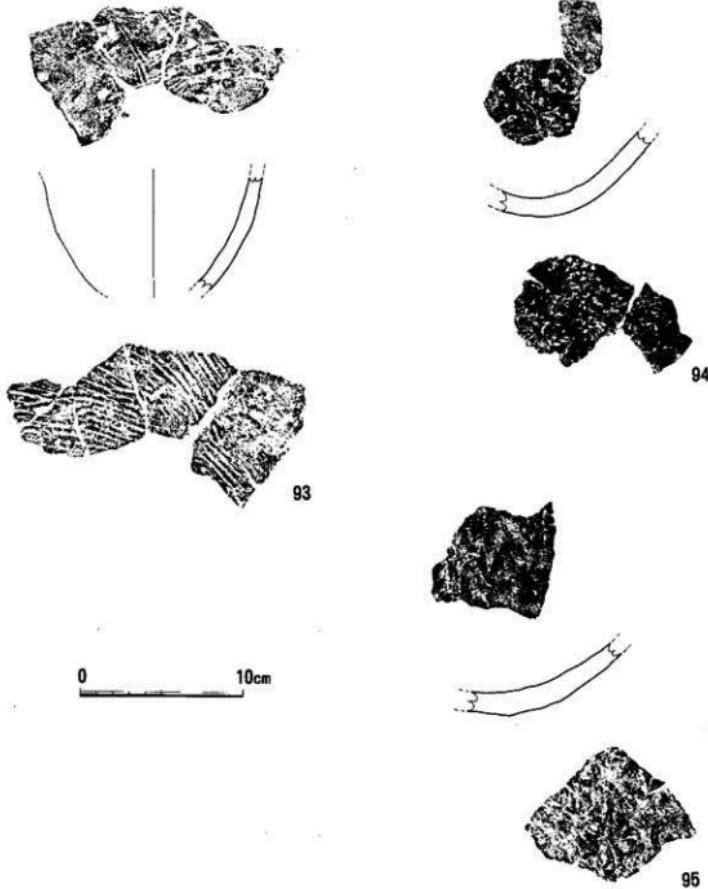


図24 第8層上面出土土器（底部、1／3）

(2) 第5層（アカホヤ火山灰層上位）出土の縄文土器

2類（図25-1～5）

1～5は、第5a層の丸木舟直下から比較的まとまった状態で出土したもので、同一固体のものと考えられる。外面は約3mm幅、内面は約6mm幅の貝殻条痕調整で、1は口縁部、2は胸部、3は胸部の屈曲部、4～5は底部に相当する。器形は鉢になると考えられる。1～5は「轟B式」あるいは「羽鳥下層式」に併行する土器と考えており、縄文前期初頭～前半に位置付けられる。

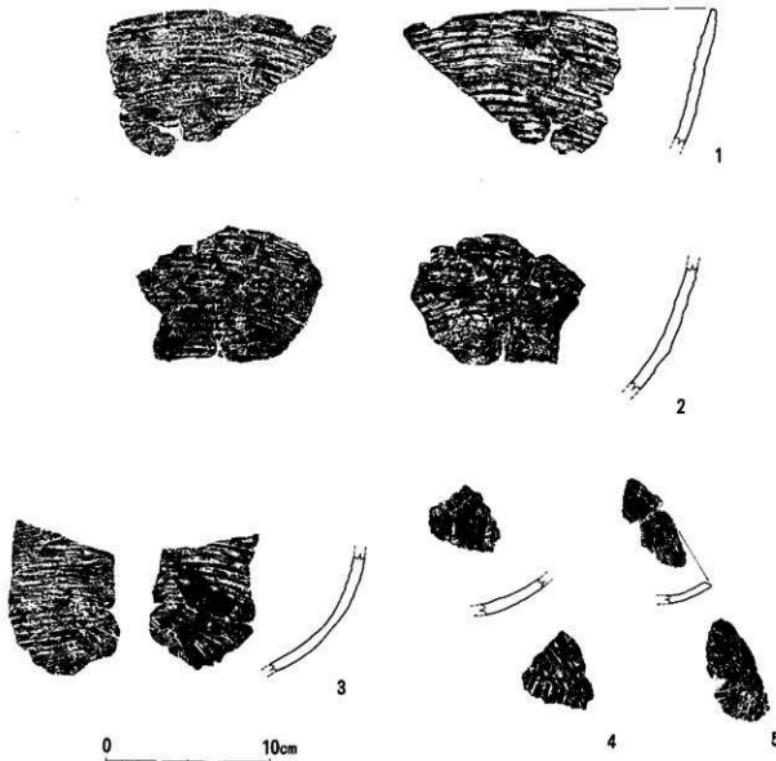


図25 第5層出土土器（2類、1／3）

(3) 第5層上面、第6層上面（アカホヤ火山灰層上位）出土の縄文土器

第6層上面の遺物は、3類土器がC～D・10グリッドを中心として出土している。3類は、土器片が、比較的大型であることや、同一固体の破片がまとまって出土していることなどから、付近から流された二次堆積でなく、当時の生活面上に直接残されたものであると考えている。また、第5層は調査区西半分のみ堆積しており、西半分第5層上面と東半分第6層上面は同一生活面であったと想定している。

3類（図26-1～図31-44）

内外面とも貝殻条痕地で、外面に隆帯を貼付した隆帯文土器である。胎土は概して緻密で、白色砂粒、ウンモを含む。隆帯文土器は、「轟B式」系統の土器で縄文前期初頭に比定される。

1は、胴部の屈曲する浅鉢である。口縁部から胴部の屈曲部にかけて横方向で3条の刻み目隆帯が貼りつき、その間をつなぐように、口唇部から縦方向で多条の微隆帯がつく。さらに、横方向1条目隆帯から3条目隆帯にかけての胴部に微隆帯による円弧状の文様が存在する。また、2ヶ所に補修孔と考えられる外面から穿った焼成後の孔を有する。縦方向の隆帯が多条に貼りつくものは山陰地域では類例に乏しい。

2は、直線的な口縁部や胴部に横方向で3条の刻み目隆帯が貼りつき、口唇部から胴部にかけて縦方向の微隆帯がつく。口唇部には突起が存在する。

3～39は、胴部あるいは口縁部でいずれも横方向の刻み目隆帯がつく。11は、口縁部で突起を有する。40は、比較的厚手であり、4条の横方向の刻み目隆帯をつなぐように縦方向の刻み目の無い隆帯がつく。

41～44は丸底の底部である。

4類（図32-45～50）

内外面とも貝殻条痕地で、外面に逆C字状の爪形文を有するもの。瀬戸内地域「羽島下層Ⅲ式」、近畿地域「北白川下層I式」に併行すると考えられる。

45、48～50の連続爪形文は、貝殻腹縁を千鳥状に刺突して施文する。46、47は竹管状の工具によって、同様に施文する。

5類（図32-51・52）

器厚が約3mmと薄手で、内外面とも平滑なナデ調整のもの。胎土は堅密で、白色砂粒、石英を含む。10B類（図32-53～55）

第4層下位砂層出土土器と同一のもので、外面に、太い撲りの原体による無節縄文を有する。「船元I式」に比定される。

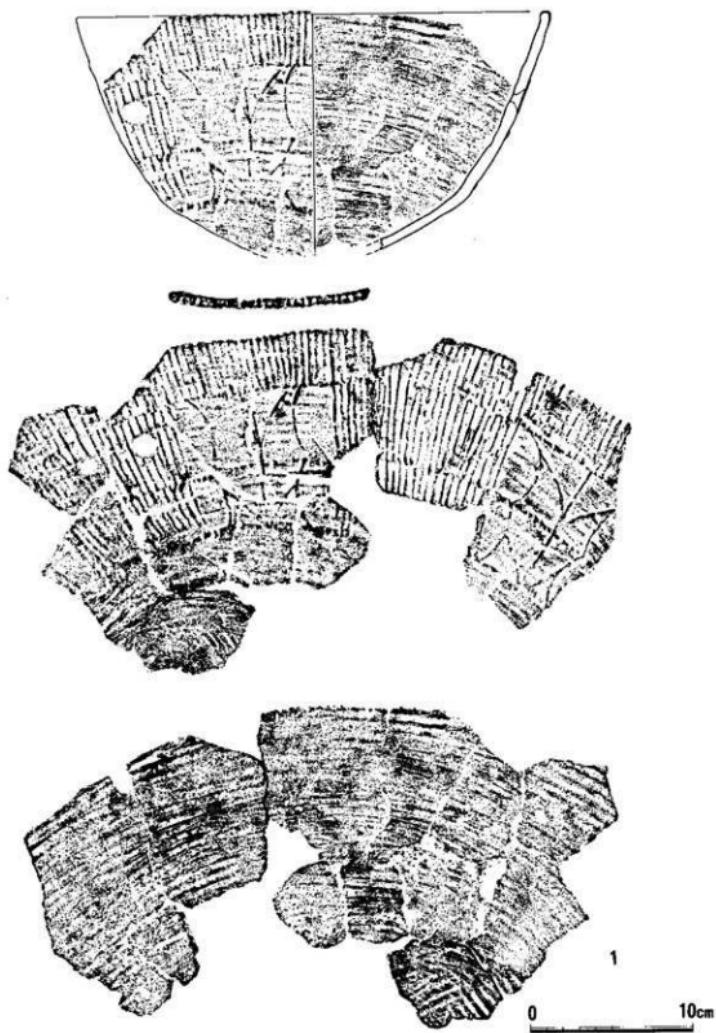


図26 第5層上面・第6層上面出土土器（3類、1／3）

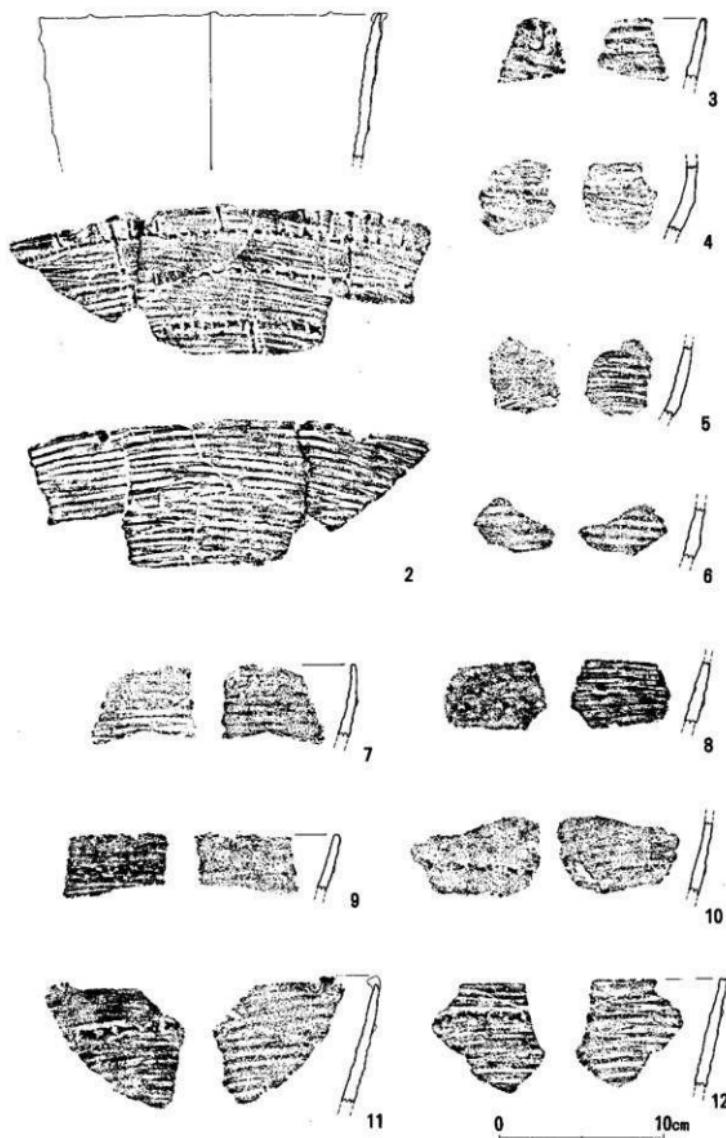


図27 第5層上面・第6層上面出土土器（3類、1／3）

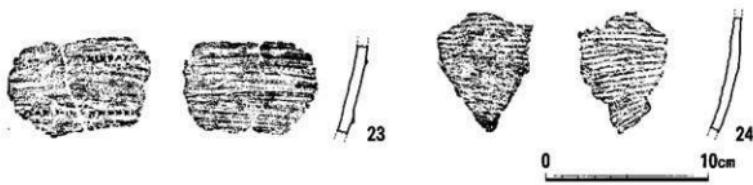
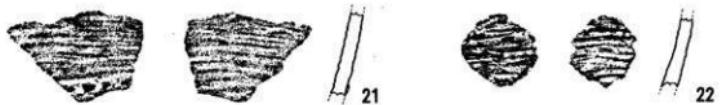
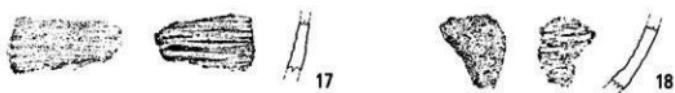


図28 第5層上面・第6層上面出土土器（3類、1／3）

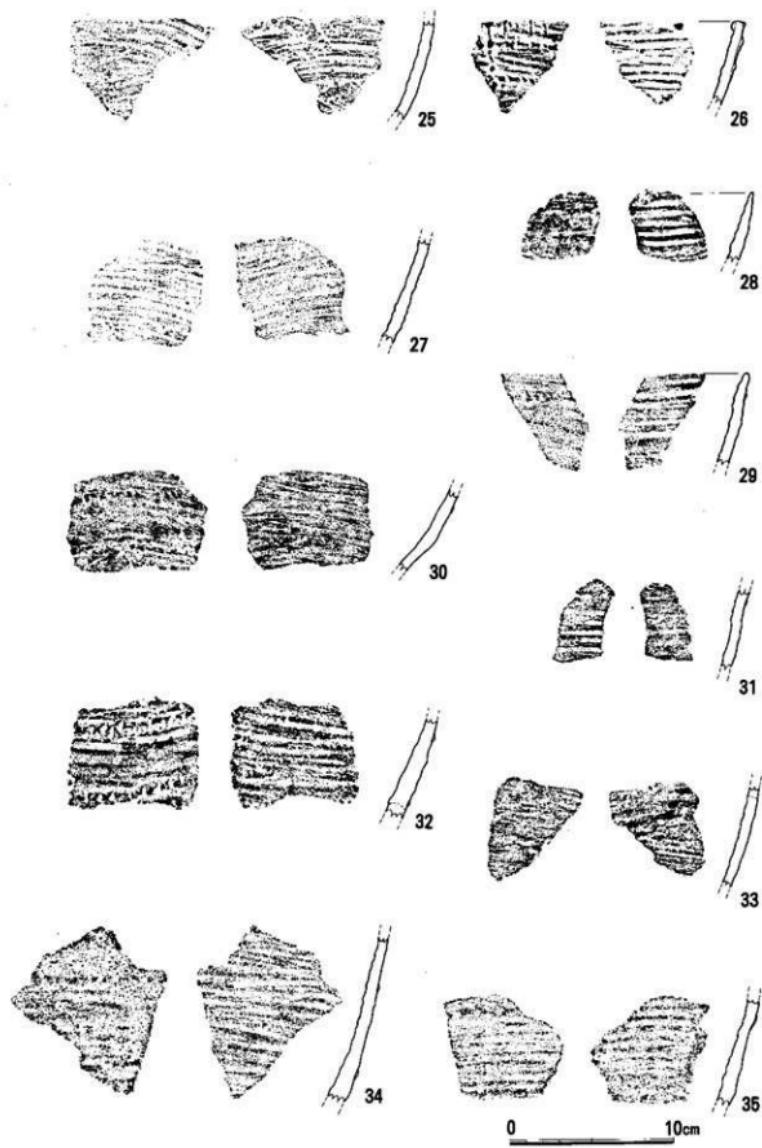


図29 第5層上面・第6層上面出土土器（3類、1／3）

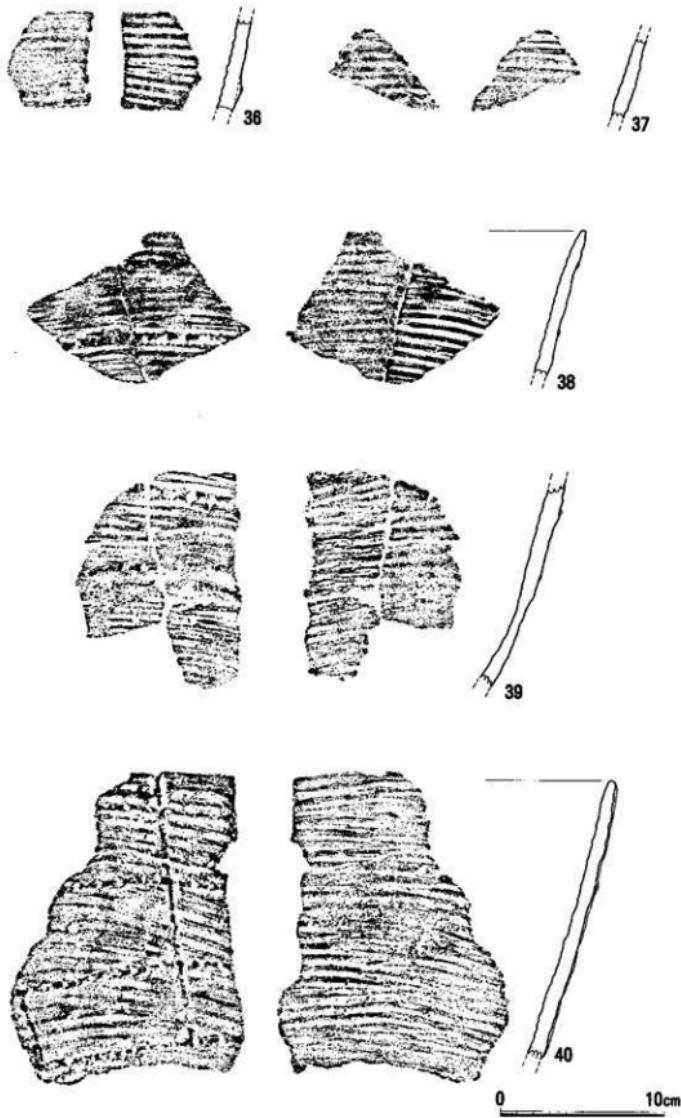


図30 第5層上面・第6層上面出土土器（3類、1／3）



図31 第5層上面・第6層上面出土土器（3類、1／3）

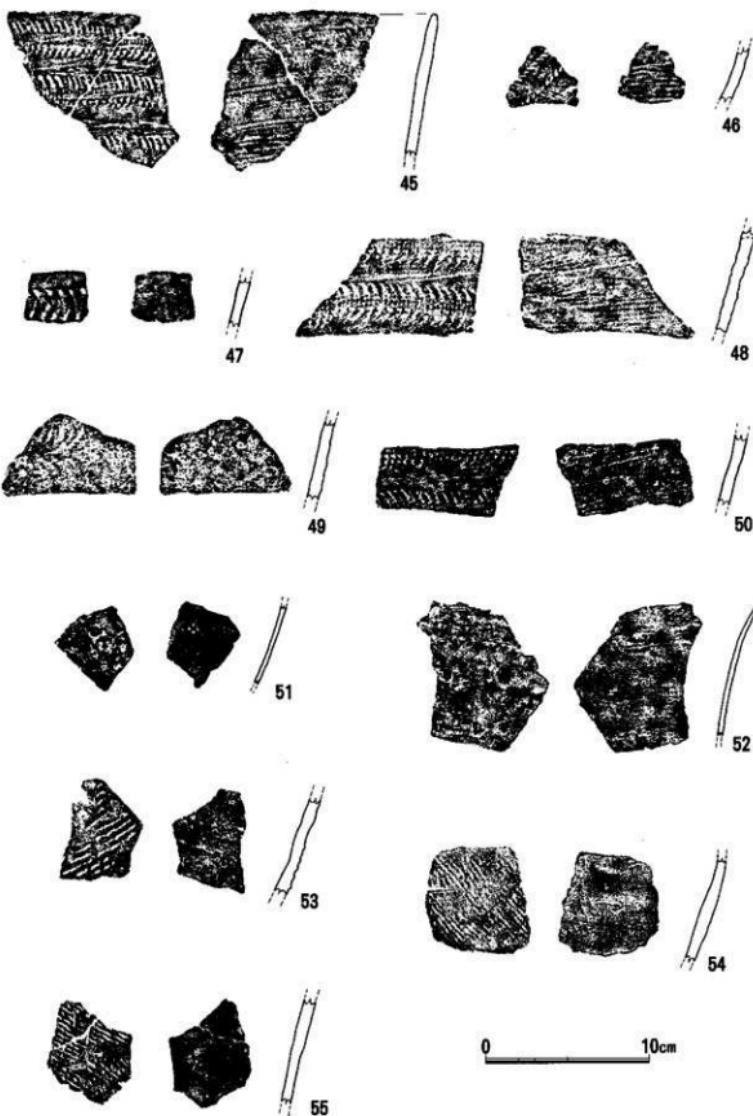


図32 第5層上面・第6層上面出土土器 (4・5・10B類、1／3)

(4) 第4層下位砂層出土の縄文土器

第4層下位砂層からは、前期前半から中期初頭までの土器が混在して出土している。

3類(図33-1~2)

内外面とも貝殻条痕地で、外面に逆C字状の爪形文を有するもの。瀬戸内地域「羽島下層Ⅲ式」、近畿地域「北白川下層I式」に併行すると考えられる。連続爪形文は、貝殻腹縁を千鳥状に刺突して施文している。

6類(図33-7)

7は、縦方向の平行した沈線文を有する。前期後半「曾畠式」系統の中でも、沈線文の規制が緩んで終末段階の土器に比定される。胎土が、伴出した他の土器と類似することから、九州からの搬入品ではなく、在地製のものと推定している。

7類(図33-3)

3は、無文地の口縁部で、口唇部には約7mm間隔の刺突による刻み目を有する。前期後半「彦崎Z I式」に比定される。

8類(図33-4~6)

5、6は、比較的薄手で、細く、節の整った縄文地上に縦方向の細い突帯が貼りつく。前期末「里木I式」に比定される。4は、胸部が内側に屈曲する。細く、節の整った縄文を有する特徴から、前期末に含めた。

9類(図34-8~16)

前期末「大歳山式」に比定されるもの。

9A類(図34-8~14)

縄文地上に、爪形文による刻み目の施された突帯が貼りつく。突帯上の爪形文は、「Σ」状を呈する。中期初頭「鷹島式」の要素を若干含むが、爪形文の特徴等から前期末「大歳山式」に属するものとした。

8は、推定口径39.4cmを測るキャリバー形の口縁部をもつ深鉢である。厚さは口縁部で6mm、胸部で3mmを測り、薄手である。口縁部と胸部の屈曲部内面は明瞭な段を有する。口縁部は内湾しながら比較的外方に開く波状縁で、口縁端部の両面が肥厚する。口唇部、口縁端部は爪形文の刻み目が施される。口縁部、胸部外面は、縄文地上に刻み目の施された突帯が貼りつき、内面は口縁端部付近にのみ縄文が施される。

9B類(図34-15~16)

15は、内外面が肥厚する口縁部で、平坦な口唇部に、5~8mm間隔で、沈線状の刻み目を有する。16は口縁部で、内面肥厚帶に2~5mm間隔で2列の刺突文が施される。平坦な口唇部には、2~4mm間隔で、刻み目状の刺突が施される。外面は、単節RLの縄文を有する。

10類(図35-17~図38-49)

外面縄文、内面ナデ調整の土器。口縁部は内湾し、内面が肥厚するものが多く、口唇部に刻み目が施される。中期初頭「船元I式」に比定される。

10A類(図35-17~図36-32)

外面に、節の整った、長大な圧痕による単節縄文を有する。胸部内面は、平滑なナデ調整が多く、一部、条痕調整を残すもの(図36-31)もある。器表は概して磨滅しており、胎土は、白色砂粒、ウ

ンモ等が混和する。

17は、内面が肥厚し、断面三角状になる口縁部である。内面肥厚帯に単節L Rの繩文を有し、口唇部に4~6mm間隔で刻み目が施される。18は、内面が、段をなして肥厚する口縁部で、平坦な口唇部を有する。内面肥厚帯に単節L Rの繩文を持つ。32は、底部の一部で、平底を呈する。

10B類（図37-33~図38-49）

外面に、太い燃りの原体による無節繩文を有する。器壁が比較的厚手で、胴部内面が平滑なナデ調整のもの（図37-33~40）と、器壁が比較的薄く、内面が条痕調整のもの（図37-41~図38-49）がある。器表は概して磨滅しており、胎土は、白色砂粒、ウンモ等が混和する。

33は、直線的な胴部に、内屈曲する口縁部が付き、尖り気味に丸くおさまる口唇部に至る。口唇部は、約7mm間隔で刻み目を有する。34は、平坦な口唇部に5~7mm間隔で刻み目を有する。36は、内湾して、内面が肥厚し、断面三角状になる口縁部で、口唇部に5~10mm間隔で刻み目を有する。44は、底部の一部で、平底を呈する。

11類（図39-50~59）

比較的緩い燃りの原体による繩文地上に、条痕文や燃糸文等の特異な文様が施される。内面は無文で、二次的な煤が付着している。器壁は、約3mmと薄く、胎上には、石英、白色砂粒等を含む。

50は、土器片中央部の肥厚帯と沈線を区画として、片方にのみ条痕による文様が施される。条痕は、5条を1単位（幅7mm）として、約5mmごとの間隔で施される。

52、53は、50の文様に加えて、約10mm間隔で、燃糸状の圧痕が施される。

12類（図40-60~69）

内外面に条痕調整を有するもので、横位に施されるもの、縦位、斜方向のもの等、多様である。前期から中期にかけての様々な時期のものを含んでいると考えられる。

68は、口縁部で、口唇部は尖り気味に丸くおさまる。補修孔の一部が認められる。

13類（図41-70~42-83）

内外面とも平滑なナデ調整のもの、及び条痕調整の後、ナデ消すもの。器表は概して磨滅し、胎上はウンモ、白色砂粒等を含む。

底部（図42-84~87）

84~87は、平底の底部である。87は、四角底。

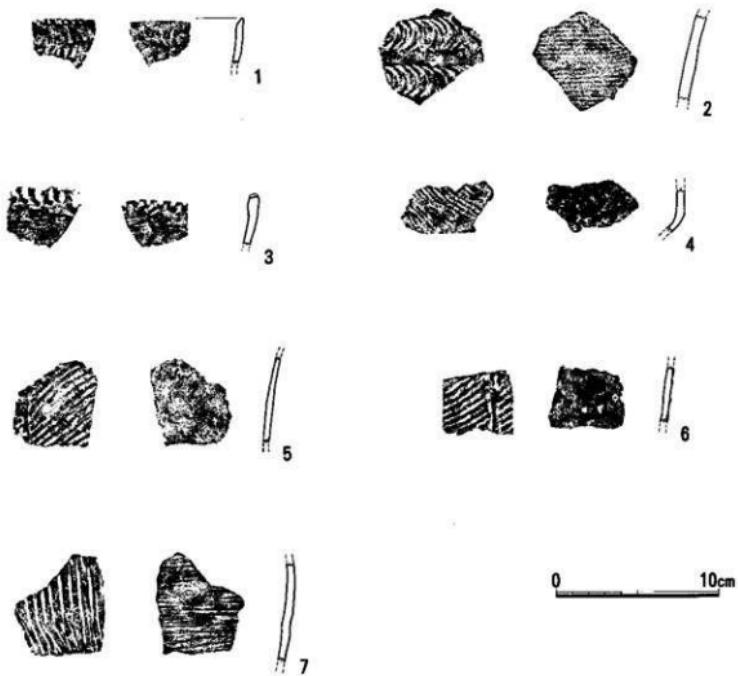


図33 第4層下位砂層出土土器（3・6・7・8類、1／3）

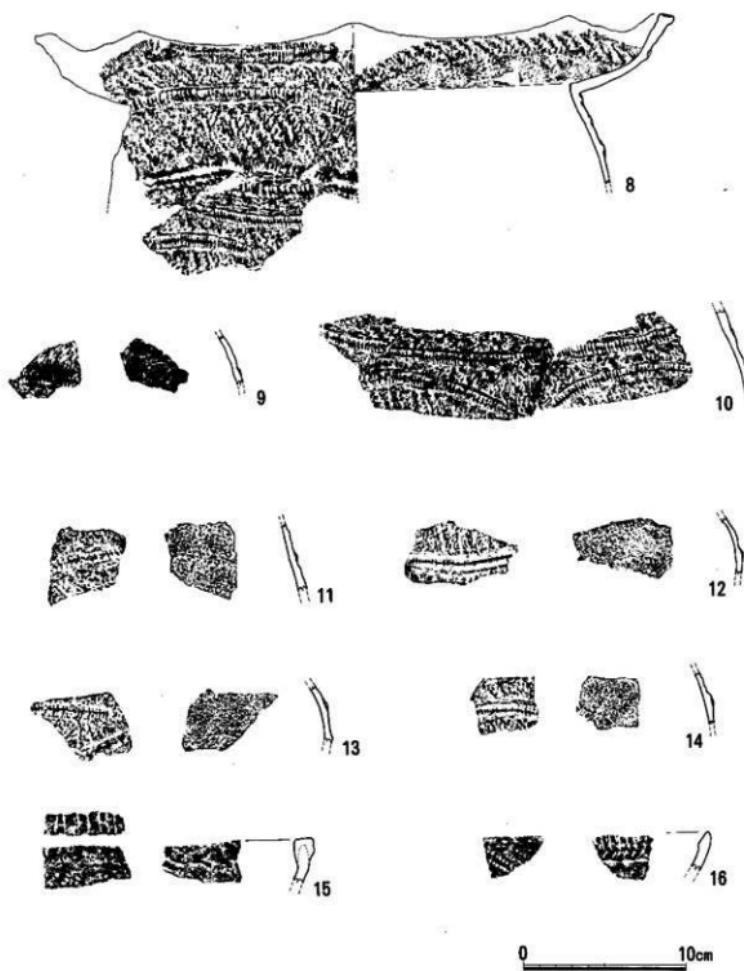


图34 第4层下位砂层出土土器（9件、1／3）

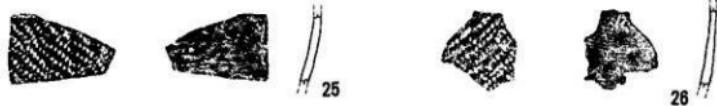


図35 第4層下位砂層出土土器 (10A類、1/3)

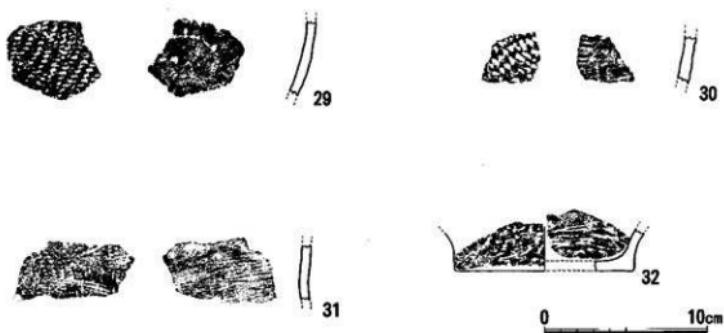


図36 第4層下位砂層出土土器（10A類、1／3）

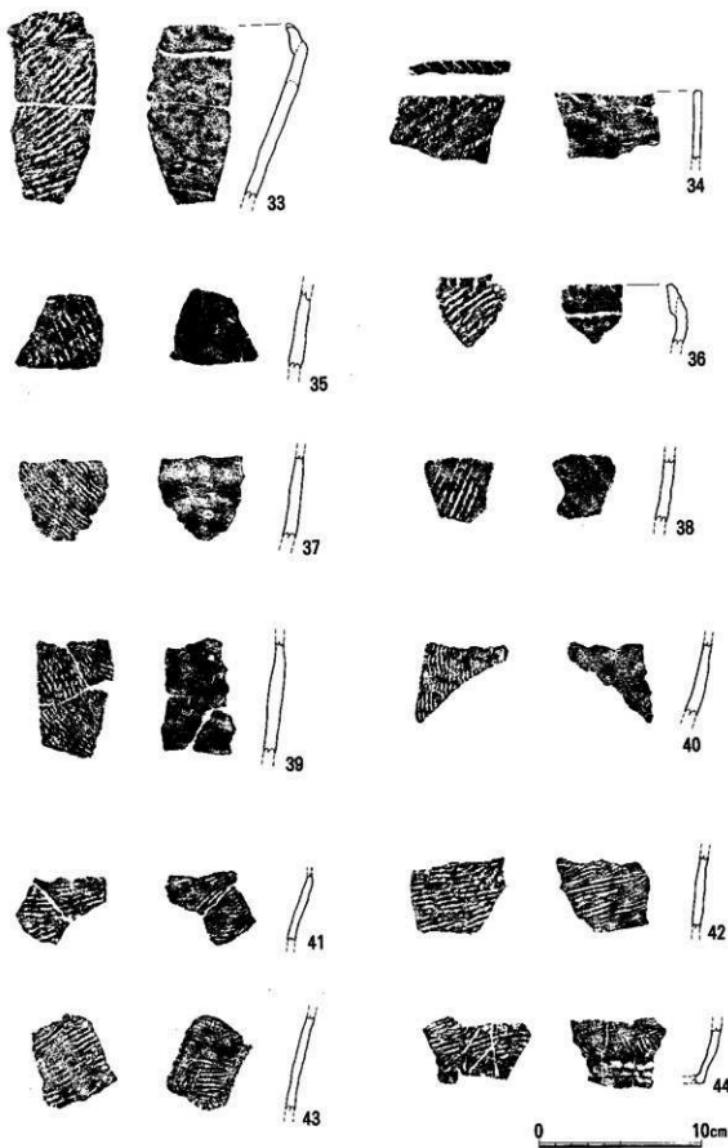


図37 第4層下位砂層出土土器（10B類、1／3）

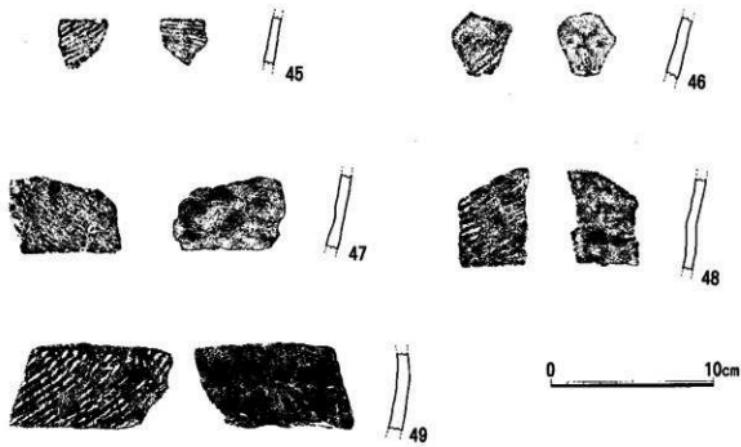


図38 第4層下位砂層出土土器（10B類、1／3）

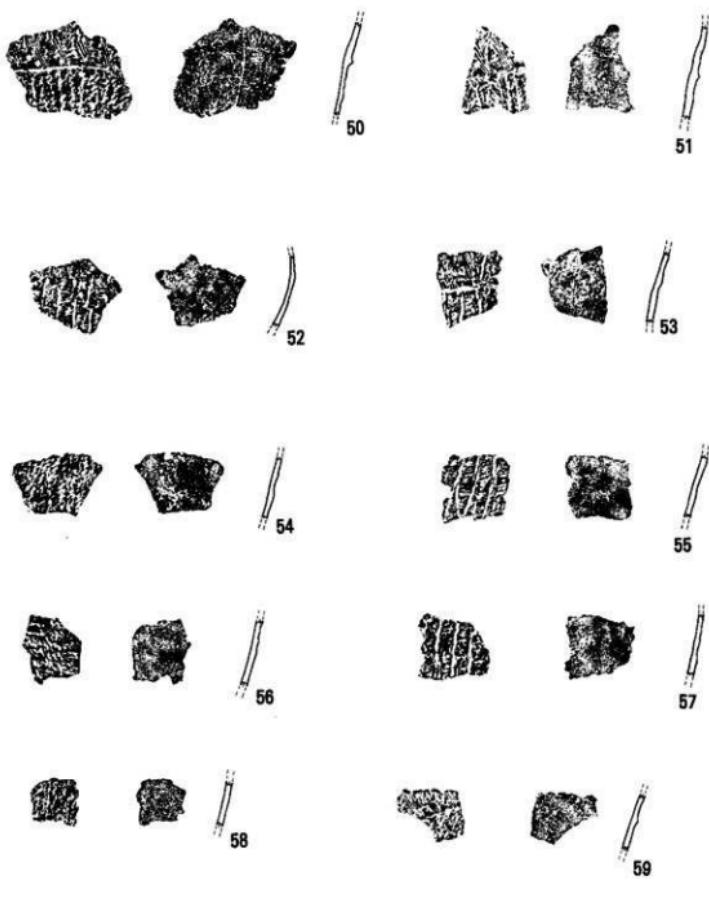


図39 第4層下位砂層出土土器 (11類、1/3)



0 10cm

図40 第4層下位砂層出土土器（12類、1／3）

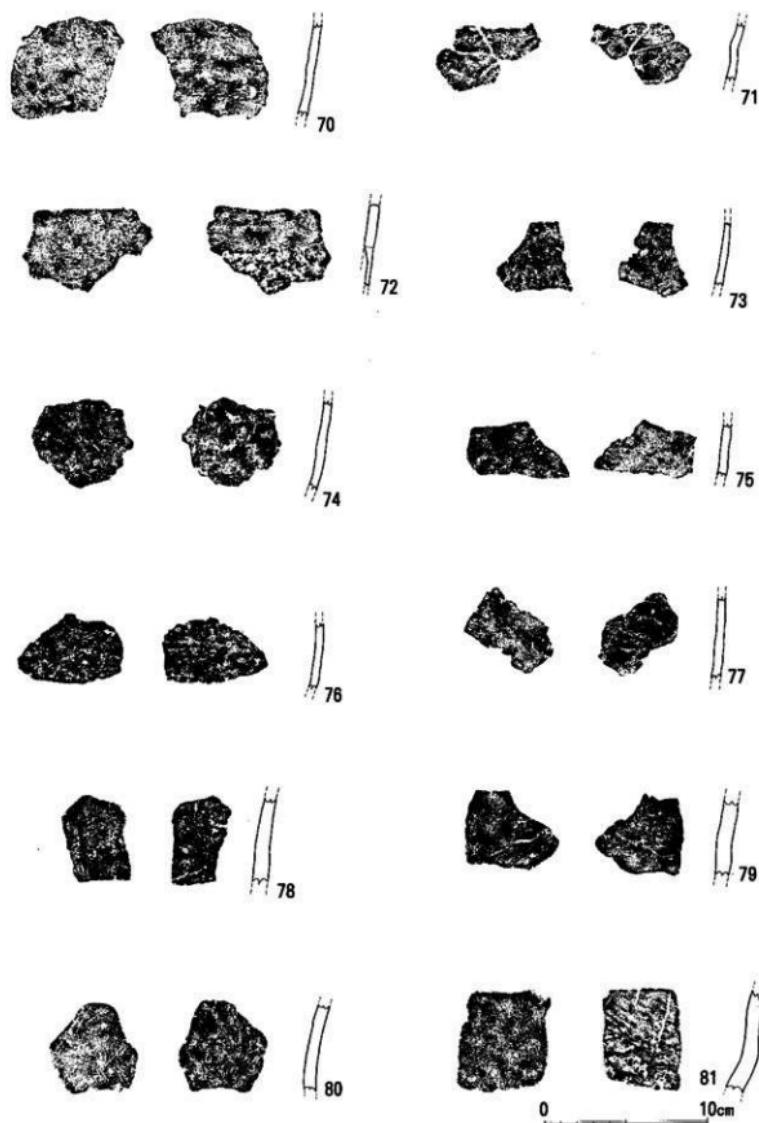


图41 第4层下位沙层出土土器 (13类、1/3)

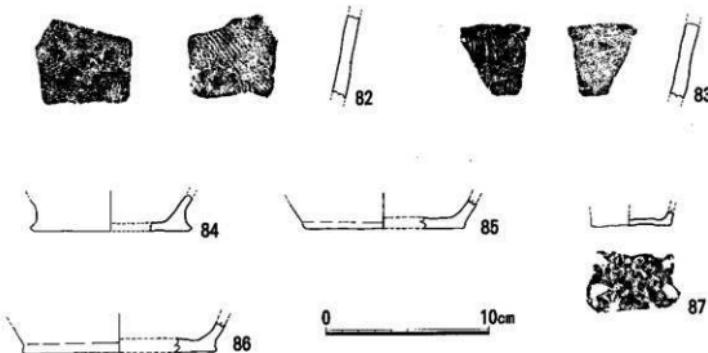


図42 第4層下位砂層出土器（13類・底部、1／3）

(5) 繩文土器の編年的位置

概述した縄文土器を、再度、整理すると、以下の通りである。

表3. 繩文土器の分類

分類	出土層位	器形、特徴	時期、型式名
1 A類	第8層上面	深鉢、丸底、内外面縄文	「織維土器」
1 B類	第8層上面	深鉢、丸底、外面縄文、内面条痕	「織維土器」
1 C類	第8層上面	深鉢、丸底、外面縄文、内面ナデ調整	「織維土器」
1 D類	第8層上面	深鉢、丸底、内外面条痕	「織維土器」
1 E類	第8層上面	深鉢、丸底、外面面条痕、内面ナデ調整	「織維土器」
アカホヤ火山灰（K-A h）			
2類	第5a層	鉢、丸底、内外面条痕地無文	前期初頭～前半
3類	第5層上面・第6層上面	鉢、丸底、条痕地隆帯文	「轟B式」
4類	第5層上面・第6層上面	条痕地、逆C字連続爪形文	「北白川下層I式」
5類	第4層下位砂層		
	第5層上面・第6層上面	薄手、ケズリ調整、無文	
6類	第4層下位砂層	沈線文	「曾畠式」系
7類	第4層下位砂層	無文地刺突文	「彦崎Z I式」
8類	第4層下位砂層	縄文地突帶	「里木I式（彦崎Z II式）」
9 A類	第4層下位砂層	キャリバー状口縁、縄文地突帶爪形文	「大歳山式」
9 B類	第4層下位砂層		「大歳山式」
10 A類	第4層下位砂層	外面単節縄文地爪形文	「船元I式」
10 B類	第5層上面・第6層上面	外面無節縄文地爪形文	「船元I式」
11類	第4層下位砂層	縄文地、撚糸文、条痕文	
12類	第4層下位砂層	内外面条痕	
13類	第4層下位砂層	内外面ナデ調整	

本調査では、早期末から中期初頭までの縄文土器が出土している。これらのうち、1～3類土器は、プライマリーな産状を示し、なおかつ、アカホヤ火山灰層を挟んで、その上下位から層位的に分離して出土するという成果をみた。

1 A～E類土器（第8層上面出土）は、縄文、条痕調整を有する「織維土器」である。こうした土器の類例としては、菱根遺跡¹¹、上長浜貝塚¹²、タテチョウ遺跡¹³、西川津遺跡¹⁴、クネガソネ遺跡¹⁵、横道遺跡¹⁶、目久美遺跡¹⁷等があり、日本海沿岸や中国山地に分布している。従来、本地域の「織維土器」は、島根県大社町菱根遺跡出土の資料をもって、「菱根式」と呼称されてきたが、断片的な資料が多く、不明な点が多かった。

本資料の形態は、丸底ないし尖底気味の底部に、直線的あるいは、やや内湾しながら開いて立ち上がる胴部がつき、平口縁や波状口縁を有する深鉢である。器表には、煤の付着が顕著で、煮沸に使用されたことが想定される。また、菱根遺跡、上長浜貝塚出土の資料は、平底が主体であるのに対し、本資料は、丸底を有しており、平底から丸底への移行という時期差を示す可能性がある。

2類土器（第5a層出土）は、内外面条痕調整を有し、文様のない、丸底の鉢形土器である。器形や条痕の様相が、3類土器（第5層上面・第6層上面出土）の「轟B式」に共通しており、下位の1E類土器（第8層上面出土）の「織維土器」と比較すると異質である。出土した第5a層は、層位関係から前期初頭に併行することを考慮すると、本資料は、「轟B式」の隆帯が貼付されない土器と想定出来るが、類例に乏しいため、今後の検討が必要である。

本地域における該期の条痕調整無文土器としては、「佐太講式」が著名で、従来、縄文早期末～前期初頭に位置付けられてきた。一方、近年、目久美遺跡の調査成果等から、「佐太講式」が、前期前半「羽島下層II式」、「北白川下層I式」におけるバリエーションで、前期初頭の土器群には含まれないとの異論が提示されている¹⁸。2類土器（第5a層出土）は、「佐太講式」の位置付けとも関連しており、今後の資料増加と近隣の調査成果を待って、再検討しなければならない。本土器は、現時点では、縄文前期初頭ないし前半併行期のものとして、位置付けておくとする。

3類土器（第5層上面・第6層上面出土）の「轟B式」は、条痕地に刻み目隆帯文を有する鉢形土器である。このうち、図26-1土器は、横方向の隆帯をつなぐ様に多条の縦方向微隆帯を貼り付けるもので、従来、山陰地域では類例の乏しかった資料である。九州地域では、大分県右京遺跡¹⁹等で、類似した資料がみられる。

近隣の西川津遺跡では、こうした隆帯文土器の他、条痕文、刺突文、押引文、沈線文、貝殻腹縫文等、多様な様相を示す土器群が出土している。これらの土器群は、「羽島下層II式」に先行する前期初頭の時期的位置を占めるものとして認識されつつも、型式学的研究から、短期間の時間幅を包括していることが予測されている²⁰。しかし、本遺跡出土、前期初頭の資料は、隆帯文土器のみであることから、該期の遺跡利用が比較的限定された一時的なものであったことが推定される。

3類土器は、アカホヤ火山灰層の上位から検出されており、これによって、「轟B式」が降灰後に位置付けられることが追認された。同様に、西川津遺跡でも「轟B式」土器包含層の下位から、アカホヤ火山灰に類似する化学組成をもつ層厚約1mmの火山ガラス層が検出されている²¹し、他地域では、島根貝塚でも検出されており、前期初頭の東海「上ノ山Z式」が伴出している²²。こうした事実は、九州地域において、「轟B式」がアカホヤ火山灰層上位から出土をみるとこと²³と整合的で、この土器が降灰後に広域的に盛行したとしてよいだろう。

4類土器（第5層上面・第6層上面、第4層下位砂層出土）は、逆C字状の連続爪形文で、「北白川下層I式」に比定される。島根県内では、西川津遺跡、宮尾遺跡³⁸等で類例がある。

5類土器（第5層上面・第6層上面）は、きわめて薄手の無文土器片である。少量の破片資料で、類例に乏しいため、型式名等は不明である。

6類土器（第4層下位砂層出土）は、縦方向沈線文土器で、在地製の「曾畠式」系に比定される。区画文を持たない平行短直線による文様であり、「曾畠式」最終段階に位置付けられる。本州における類例としては、山口県月崎遺跡³⁹、神田遺跡⁴⁰等が知られている。

7～10類土器（第4層下位砂層出土）は、前期後半から中期初頭にかけての土器群である⁴¹。

7類土器は、1点のみの資料だが、比較的薄手で、無文地であることから、前期後半「彦崎Z I式」に比定した。8類土器は、比較的薄手で、細く、節の整った縄文を有しており、前期末「里木I式」の特徴を持つ。9 A類土器は、縄文地に「Σ」状爪形文を有する突帯が貼り付くもので、前期末「大歳山式⁴²」の特徴を持つ。10類土器は、中期初頭「船元I式」に比定される。7～10類上器は、近隣では、目久美遺跡、陰田遺跡等で、良好な資料の出土をみている。

11類土器（第4層下位砂層出土）は、縄文地に撚糸文や条痕が施される特殊な文様を有した土器で、類例に乏しい。縄文の様相や、薄手である点等から、前期末頃のものと推定しているが、今後の検討課題である。

注

- (1) 酒詰仲男・石部正志「島根県斐根遺跡発掘報告」「出雲古文化調査団報告書」1959年
- (2) 出雲市教育委員会『上長浜貝塚』1996年
- (3) 島根県教育委員会ほか『朝酌川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書』I・II、1979・1987年
- (4) 島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書』I・III・V、1980・1987・1989年
- (5) 穴道正年『島根県の縄文式土器集成』I、1974年
- (6) 瑞穂町教育委員会『横道遺跡』1983年
- (7) 米子市教育委員会ほか『加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 目久美遺跡』1986年
- (8) 縄谷克彦「島浜貝塚出土縄文時代前期土器の研究（1）」「島浜貝塚 縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査2」1981年
- (9) 井上智博「西日本における縄文前期初頭の土器様相」「考古学研究」38-2、1991年
- (10) 萩町教育委員会『萩台地の遺跡』II、1977年
- (11) 宮本一夫「近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器相分」「京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度」1987年
- (12) 大西都夫・西田史郎・渡辺正巳「山陰地方中部の第四紀後期火山ガラス」「島根大学地質学研究報告」8、1989年
- (13) 福井県教育委員会『島浜貝塚-1980～1985年度調査のまとめ-』1987年
- (14) 新東晃一「火山灰からみた南九州縄文草・前期土器の様相」「鏡山猛先生古稀記念古文化論叢」1980年
- (15) 注(5)と同じ。
- (16) 潤見浩「月崎遺跡」「宇部の遺跡」宇部市教育委員会、1968年
- (17) 山口県教育委員会『神田遺跡第1～5次発掘調査概報』1971～1976年
- (18) 間壁忠彦・間壁慶子『里木貝塚』倉敷考古館研究集報7、1971年
- (19) 直良信夫『播磨国明石郡垂水村山田大歳山遺跡の研究』1926年
京都府埋蔵文化財調査研究センター『志高遺跡・京都府遺跡調査報告書』第12冊、1989年
注(19)と同じ。

(6) 第1層出土の土器、陶磁器ほか

第1層は、近代水田の耕土であり、縄文～近代までの多様な遺物が含まれている。なかでも、中・近世の陶磁器は、唐津、美濃、青磁、白磁を始め、国内外の各地で生産されたものが認められ、該期の遺跡近辺における流通の一端を示している。

中・近世～近代の上器、陶磁器（図43-1～図44-25）

1は、布志名の皿で、19世紀に比定される。2～3は、国産陶磁器の底部で、幕末期に比定される。4は、長崎、波佐見の染付皿で、18世紀に比定される。

5は、唐津系鉄釉の大甌で、指頭による刻み目をもつ横方向の突帯が存在する。17世紀に比定される。6、7、8は、唐津の皿で、底部内面に砂目を残す。17世紀に比定される。10は、唐津のすり鉢、底部で、16世紀に比定される。

11は、灰釉系美濃の皿で、推定口径10.7cmほどである。15世紀後半～16世紀頃に比定される。12は、灰釉系美濃の皿で、16世紀頃に比定される。

13は、土師器皿である。回転台による整形と考えられ、底部には糸切り痕を残す。口縁部は、内外面ともナデ調整である。中世か。

14は、白磁の皿で、16世紀に比定される。

15は、景德鎮の皿で、16世紀半ばに比定される。

16は、藍彩で、型押しによる整形である。16世紀に比定される。

17～19は、備前のすり鉢で、15世紀に比定される。

20は、龍泉窯系青磁の皿で、14～15世紀に比定される。

21は、景德鎮の皿である。いわゆる「クチハギ」と呼ばれ、口縁端部のみ施釉がなされない。12～13世紀に比定される。

22、24は、東播系須恵器のこね鉢で、13世紀半ばに比定される。

23、25は、亀山の甌で、外面に格子状のタタキメが存在する。

縄文～古代の土器ほか（図44-26～図47-62）

26は、土師器杯である。体部、口縁部が内湾し、上部で一旦内側にくびれた後、外方に屈曲し、口縁端部は丸くおさまる。

27は、土師器杯である。体部、口縁部は内湾し、上部で外方に屈曲する。口縁端部は丸くおさまる。

28は、土師器杯ある。内湾する体部、口縁部をなし、口縁端部はややとがり気味におさまる。体部外面に横位の沈線が存在する。

29は、無高台の須恵器杯である。回転糸切り痕を残す平底から、わずかに内湾気味の体部をなし、内湾する口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさまる。8世紀に比定される。

30は、無高台の須恵器杯である。回転糸切り痕を残す平底から、わずかに内湾気味の体部をなし、内湾する口縁部にいたる。口縁部は一旦内側にくびれた後、外方に屈曲し、ややとがり気味におさまる。8世紀に比定される。

31、32は須恵器杯の底部で、糸切り痕を残す。32は、比較的軟質である。

33～36は須恵器杯の底部で、高台が付く。高台は、33～34、36は底部内側に、35は底部外縁に貼り

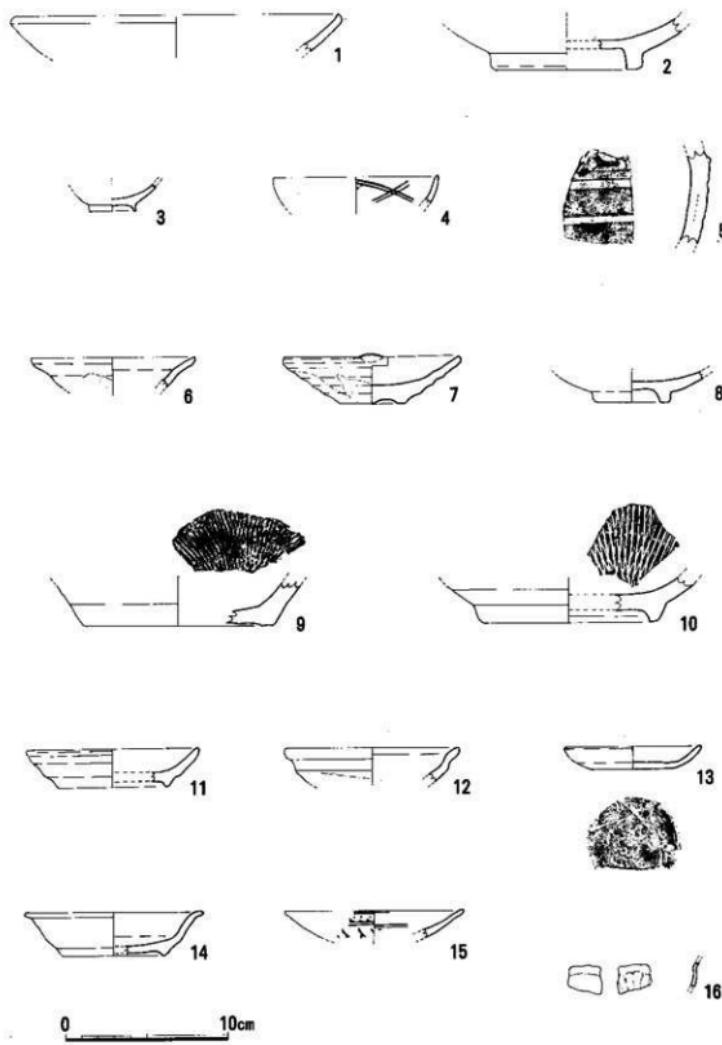


図43 第1層出土遺物 (1/3)

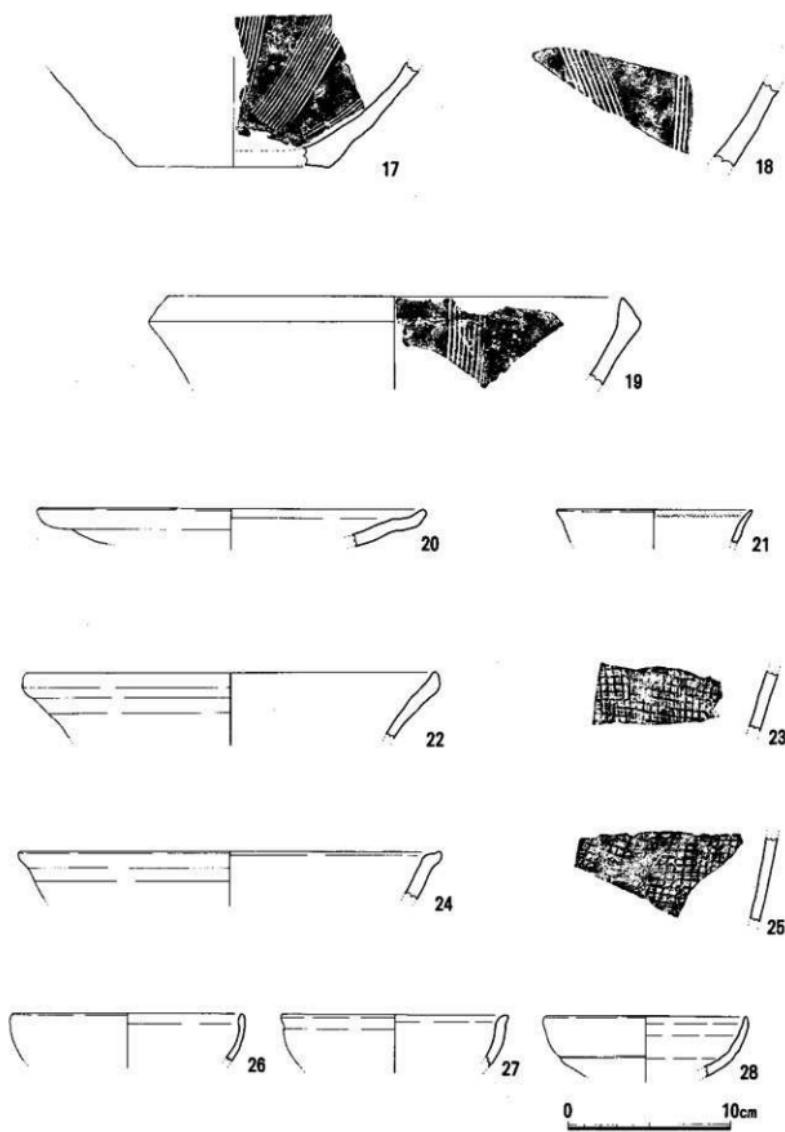


図44 第1層出土遺物 (1/3)

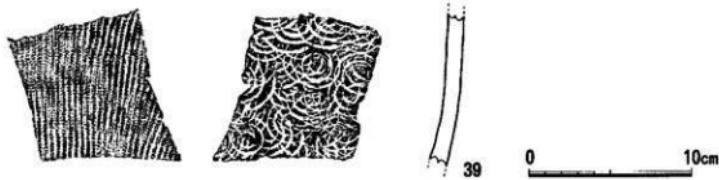
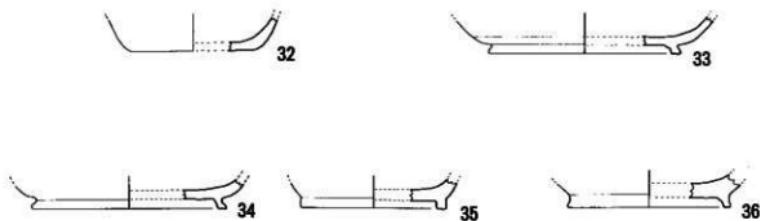
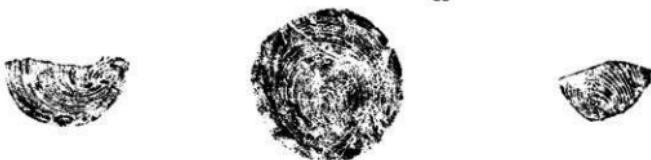
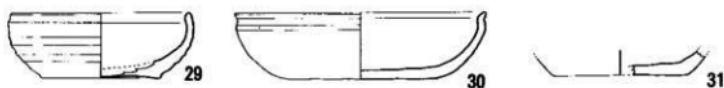


図45 第1層出土遺物 (1/3)

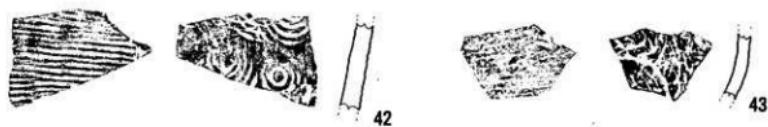


図46 第1層出土遺物 (1/3)

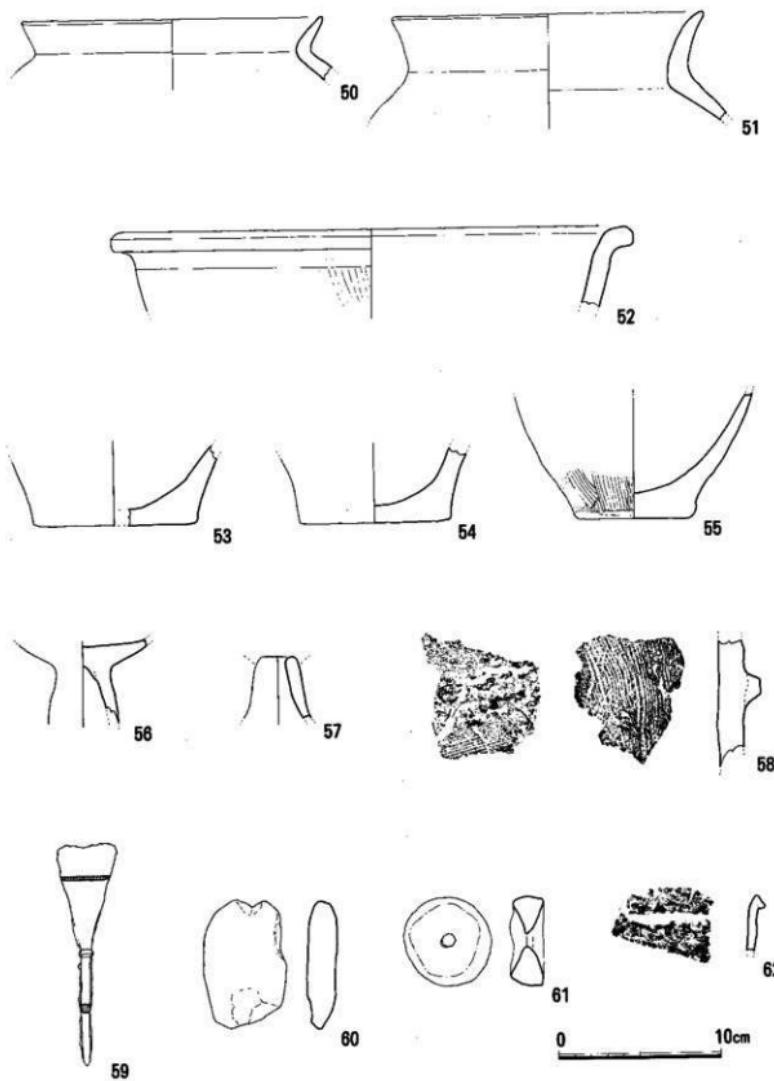


図47 第1層出土遺物 (1/3)

付く。

37は、土師器の底部。38は、土師器高坏の杯部と考えられる。39～43は、須恵器甕の体部で、外面は格子目状のタタキメ、内面は同心円状の当て具痕が残る。

44は、須恵器甕の肩部で、内外面とも横位のナデ調整である。

45～49は、須恵器杯身である。このうち、45～48は、たちあがりが短く内傾し、口縁端部は丸くおさまる。山本編年⁽¹⁾のⅢ期に比定される。49は、底部が丸みをおび、たちあがりは途中で欠損している。山本編年のⅠ期あるいはⅡ期に比定される。

50は、土師器甕で、口縁部は「く」の字状に屈曲し直線的で短い。51は、土師器甕で、口縁部は「く」の字状に屈曲し、やや外反する。

52は、弥生土器鉢の口縁部。53～55は、弥生土器の底部である。56、57は高坏である。

58は、円筒埴輪の破片で、タガが残り、外面は横ハケ、内面は縦ハケである。

59は、鉄鎌で、長さ13.4cmを測る。

60は、土錐と考えられ、形態は長軸8cm、短軸5cmの楕円形に刻み目をいれている。

61は、孔のある上製円盤で、用途は不明である。

62は、繩文土器と考えられる口縁部で、外面に肥厚帯をもつ。

注

(1) 山本清「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論文集』1960年

山本編年Ⅰ期は陶邑編年TK47以前、Ⅱ期はMT15を中心に、Ⅲ期新はTK43に対応する。Ⅳ期は概ね飛鳥Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期を含む。

表4、出土土器觀察表

図番号	出土グリッド	層位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色調	①胎土	②焼成	備考
14-1	B 3	第8層上面	縄文土器 (深鉢)	外: 縄文(単節RL) 内: 縄文(単節RL)	外: 暗灰褐色 内: 茶褐色	①0.5~1mmの砂粒・金雲母を含む ②良好		内外面焼付着
15-2	B 3	第8層上面	縄文土器 (深鉢) 口縁部	波状口縁 外: 縄文(単節RL) 内: 縄文(単節RL)	外: 暗灰褐色 内: 茶褐色	①0.5~1mmの砂粒・金雲母を含む ②良好		内外面焼付着
3	A 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(不明) 内: 縄文(単節RL)	外: 灰褐色 内: 暗茶色	①0.5~1mmの砂粒・石英を含む ②良好		内外面焼付着
-4	A 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(不明) 内: 縄文(中節RL)	外: 灰褐色 内: 暗茶色	①0.5~1mmの砂粒・金雲母を含む ②良好		内外面焼付着
-5	A 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(単節RL) 内: 縄文(不明)	外: 灰褐色 内: 暗褐色	①0.5~1mmの砂粒・石英を含む ②良好		内外面焼付着
-6	A 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(単節RL) 内: 縄文(単節RL)	外: 淡茶褐色 内: 暗茶褐色	①0.5~1mmの砂粒・石英を含む ②良好		内外面焼付着
-7	A 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(単節RL) 内: 縄文(単節RL)	外: 暗茶褐色 内: 暗褐色	①0.5~1mmの砂粒・石英を含む ②良好		内外面焼付着
-8	A 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(単節RL) 内: 縄文(単節RL)	外: 灰褐色 内: 暗褐色	①0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ②良好		内外面焼付着
-9	F 1	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(単節RL) 内: 縄文(中節RL)	外: 暗茶色 内: 黄茶褐色	①0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ②良好		内外面焼付着
-10	A 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(単節RL) 内: 縄文(単節RL)	外: 暗茶色 内: 焦茶色	①0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ②良好		内外面焼付着
-11	B 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(単節RL) 内: 縄文(不明)	外: 黄茶褐色 内: 黑灰色	①0.5~1mmの砂粒・金雲母を含む ②良好		内面焼付着
16-12	A 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(不明) 内: 縄文(無節)	外: 灰黄褐色 内: 灰黑色	①0.5mmの砂粒・石英・金雲母を含む ②良好		内外面焼付着
-13	A 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(単節RL) 内: 縄文(単節RL)	外: 暗茶色 内: 暗茶色	①0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ②良好		内外面焼付着
-14	B 2	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(-部指ナデ) 内: 朱痕(幅3mm)	外: 灰褐色 内: 暗灰色	①1~2mmの砂粒・石英・金雲母を含む ②良好		内外面焼付着
-15	A 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(単節RL) 内: 朱痕(幅3.5mm)	外: 灰黄色 内: 暗灰色	①0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ②良好		外面焼付着
-16	D 2	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(不明) 内: 朱痕(幅2.5~3mm)	外: 灰褐色 内: 暗褐色	①0.5mm程度の白色砂粒・石英・金雲母を含む ②良好		
-17	B 2	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(不明) 内: 朱痕(幅3.5mm)	外: 淡黃灰色 内: 黑灰色	①0.5~1.5mmの砂粒・石英を含む ②良好		内面焼付着
-18	A 2	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(-部ナデ消し) 内: 朱痕(幅3.5mm)	外: 黄褐色 内: 黄褐色	①1mm前後の砂粒・石英・金雲母を含む ②良好		内外面焼付着
-19	B 2	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(甲節LR) 内: 朱痕(幅5mm) (-部指ナデ)	外: 灰黄褐色 内: 灰黄褐色	①1mm前後の砂粒・石英・金雲母を含む ②良好		外面焼付着
-20	B 2 C 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(単節LR) 内: 朱痕(幅4mm)	外: 灰褐色 内: 暗褐色	①0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ②良好		
-21	B 2	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(単節) 内: 朱痕(幅3mm) (-部指頭正直)	外: 灰黄褐色 内: 暗茶褐色	①0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ②良好		内面焼付着
-22	A 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(単節LR) 内: 不定方向の朱痕(幅3.5mm)	外: 黄褐色 内: 黄褐色	①0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ②良好		内外面焼付着
17-23	F 2	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(無節) 内: 朱痕(幅2.5mm)	外: 茶褐色 内: 茶褐色	①0.5~1mmの砂粒・石英を含む ②良好		
24	C 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(無節) 内: 朱痕(幅3mm)	外: 灰褐色 内: 暗茶色	①0.5~2mmの砂粒・石英を含む ②良好		内面焼付着
-25	B 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(無節) 内: 深い朱痕	外: 灰褐色 内: 暗褐色	①0.5~1mmの砂粒・石英を含む ②良好		内面焼付着
-26	A 3	第8層上面	縄文土器 網部	外: 縄文(不明) 内: 深い朱痕(幅2mm)	外: 灰褐色 内: 暗褐色	①0.5~1mmの砂粒・石英を含む ②良好		内外面焼付着

図番号	出土グリッド	層位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色調	①輪十 ②焼成	備考
-27	A 3	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節LR) 内: 浅い条痕、指痕压痕	外: 暗灰色 内: 灰茶褐色	① 黒砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	接合面あり
-28	A 3	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(单節) 内: 条痕(幅3.5mm)	外: 黄褐色 内: 灰褐色	① 0.5~1.5mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内外面煤付着
29	C 2	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節LR) 内: 条痕(幅2.5mm)	外: 黄褐色 内: 灰褐色	① 0.5~1mmの砂粒・石英を含む ② 良好	内外面煤付着
30	B 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 縄文(不明) 内: 浅い条痕のちナデ(幅2~3mm)、 指痕压痕	外: 黄褐色 内: 灰褐色	① 0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内外面煤付着
31	B 3	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節) 内: 浅い条痕(幅3mm)	外: 黄褐色 内: 灰褐色	① 0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内外面煤付着
-32	A 3	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節LR) 内: 不明	外: 黄褐色 内: 灰茶褐色	① 0.5~1mmの砂粒・石英を含む ② 良好	内外面煤付着
-33	B 2	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節LR) 内: 浅い条痕、指痕压痕	外: 黄褐色 内: 灰褐色	① 0.5~1.5mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内外面煤付着、接合面あり
18 34	A 3	第8層 上面	縄文土器 口沿部	外: 縄文(無節R)、ヘラ状工具による「X」状の文様 内: ケズリ	外: 灰茶褐色 内: 山解部: 灰茶色、その他: 墓灰色	① 0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	外外面煤付着、接合面あり
35	A 3	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節L) 内: ケズリのち指ナデ	外: 灰褐色 内: 灰褐色	① 0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内外面煤付着
-36	B 3	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(無節R) 内: ケズリ	外: 淡黄褐色 内: 明灰褐色	① 0.5~2mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内外面煤付着
-37	B 3	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節LR) 内: 不明	外: 淡灰色 内: 灰白色	① 0.5mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	
-38	A 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節) 内: 不明	外: 灰褐色 内: 灰褐色	① 微砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内外面煤付着
39 P 3	B 3	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節LR) 内: ケズリのち指ナデ	外: 灰茶色 内: 灰茶色	① 0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	接合面あり
40 C 3	B 2	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(单節) 内: ケズリのち指ナデ	外: 淡灰茶色 内: 灰茶色	① 0.5~1mmの砂粒・石英を含む ② 良好	
19 41	A 3	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節LR) 内: ナデ	外: 灰褐色 内: 明灰褐色	① 0.5~7mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内外面煤付着
42	A 3	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節)、一部ナデ消し 内: ケズリのちナデ	外: 黄褐色 内: 黄褐色	① 0.5~2mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内外面煤付着
43	B 3	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節LR) 内: ナデ、指痕压痕	外: 黄灰色 内: 明灰茶色	① 0.5~2mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	
44	A 3	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節LR) 内: ケズリのちナデ	外: 黄褐色 内: 明灰褐色	① 0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内外面煤付着
45	B 3	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節LR) 内: ナデ、指痕压痕	外: 黄灰褐色 内: 黄灰褐色	① 0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	
46	P 2	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節LR) 内: ナデ	外: 黄褐色 内: 淡灰茶色	① 0.5mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	
47	A 3	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節LR) 内: ナデ	外: 灰黄色 内: 明灰褐色	① 0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内外面煤付着
48	A 3	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節LR) 内: ナデ	外: 灰黄色 内: 黄褐色	① 0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内外面煤付着
49	B 2	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 縄文(半節) 内: ナデ	外: 黄灰色 内: 淡灰茶色	① 0.5~1mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	
20 30	A 3	第8層 上曲	縄文土器 胴部	外: 条痕(幅3~3.5mm)、U唇部に縄文 内: 不定方向の条痕(幅2.5~3mm)、 指痕压痕	外: 淡黄褐色 内: 淡灰茶色	① 0.5mm程度の砂粒・石英を多量に含む ② 良好	内外面煤付着

図番号	山上グリッド	属位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色調	①胎土 ②焼成	備考
-51 A 3	第8層 上面	縄文土器 口縁部	外: 不定方向の条痕 (幅3mm) 内: 条痕 (幅2mm)、口縁部指ナデ痕	外: 暗灰褐色 内: 暗灰褐色	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		外面煤付着
-52 B 2	第8層 上面	縄文土器 口縁部	外: 条痕 (幅2mm) 内: 条痕 (幅1mm)、口縁部ナデ	外: 黄灰褐色 内: 黄灰褐色	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		内面煤付着
53 F 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅2mm) 内: 条痕 (幅2mm)	外: 黄褐色 内: 黄灰色	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好		
-54 B 7	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅3~4mm) 内: 不明	外: 灰褐色 内: 灰黑色	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好		内面煤付着
-55 B 3	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅3mm) 内: 条痕 (幅2.5mm) (一部風化のため不規則)	外: 暗灰褐色 内: 黑灰色	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好		外面煤付着
-56 B 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅3mm) 内: 不定方向の条痕 (幅1~2mm)	外: 灰黃褐色 内: 黄褐色	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		外面煤付着
-57 C 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅2mm) 内: 不定方向の条痕 (幅1mm)	外: 灰褐色 内: 淡灰褐色~淡系灰色	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		外面煤付着
-58 D 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅3mm) 内: 条痕 (幅3mm)	外: 淡黄褐色 内: 黄褐色	① 0.5~3mm程度の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		内面煤付着
-59 D 1	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅3mm) 内: 条痕 (幅3mm)	外: 黄褐色 内: 暗灰褐色	① 0.5~3mm程度の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		内面煤付着
-60 C 3	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅2mm) (一部風化) 内: 条痕 (幅2mm)	外: 灰褐色~黃褐色 内: 黄褐色	① 0.5~1mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		内面煤付着
21- 61 A 3	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅2.5mm) 内: 条痕 (幅2mm)	外: 黄褐色 内: 黑灰色	① 微砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		内外面煤付着
-62 D 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅1.5~2mm) 内: 条痕 (幅1.5~2mm)	外: 淡黃褐色 内: 灰黑色	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		
-63 B 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅2~2.5mm) 内: 条痕 (幅1.5~2mm)、指彫痕	外: 黄褐色 内: 灰黑色~黃褐色	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		内面煤付着
-64 D 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅2mm) 内: 条痕 (幅2mm)	外: 黄褐色 内: 晴茶色	① 0.5~3mm程度の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		
-65 B 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅2mm) 内: 条痕 (幅2mm)	外: 黄灰褐色 内: 黑灰色	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		内面煤付着
-66 E 1	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅1.5~3.5mm) 内: 条痕 (幅3mm)	外: 黄茶褐色 内: 淡茶褐色	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		
-67 B 3	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 不定方向の条痕 (幅3mm) 内: 条痕 (厚ぼく付し不明)	外: 淡灰色 内: 暗灰色	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好		内面煤付着
-68 A 3	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 不定方向の条痕 内: 不定方向の条痕 (幅2~3.5mm)、一部指ナデ痕	外: 淡黃褐色 内: 黑灰色	① 2mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好		内面煤付着
-69 B 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕のちナデ 内: 浅い条痕 (幅4mm)	外: 黄褐色 内: 晴茶褐色	① 0.5~3.5mmの砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		
-70 C 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅2~3mm) 内: 浅い条痕	外: 灰褐色 内: 黄褐色	① 3mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好		
-71 C 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅1mm) 内: 浅い条痕	外: 灰褐色 内: 灰黃褐色	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好		
22- 72 A 3	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅2mm) (一部風化) 内: 条痕 (幅2mm)	外: 灰 内: 灰褐色	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好		
-73 A 3	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅4mm) 内: 条痕 (幅4~4.5mm)	外: 黄茶褐色 内: 灰褐色	① 0.5mm前後の砂粒・石英を含む ② 良好		内面煤付着
-74 D 1	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅2.5~4mm) 内: ナデ	外: 淡黃茶色 内: 淡茶褐色	① 0.5mm前後の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		
-75 B 2	第8層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅3.5mm) 内: 条痕 (幅4mm) のちナデ	外: 淡黃茶色 内: 暗灰褐色	① 0.5mm前後の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好		内面煤付着

図番号	出土グリッド	層位	器種他 文様・形態・手法の特徴	色調	① 赤土 ② 焼成	備考
-76	B 2	第8層上面	縄文土器 外: 条痕 (幅1.5mm) 内: ナデ	外: 黄茶褐色 内: 茶褐色	① 0.5mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	
77	C 2	第8層上曲	縄文土器 外: 条痕 (幅4mm) 内: ナデ	外: 茶褐色～ 暗茶褐色 内: 不明	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母 を含む ② 良好	
-78	A 3	第8層上面	縄文土器 外: 条痕 (幅4.5mm) 内: 不明	外: 茶褐色 内: 暗灰色	① 0.5mm以下の砂粒・石英・金雲母 を含む ② 良好	内面煤付着
-79	B 2	第8層上面	縄文土器 外: 条痕 (幅4mm) 内: ナデ、一部朱痕 (幅4mm)	外: 明茶赤色 内: 喜茶褐色	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	内面煤付着
80	C 3	第8層上面	縄文土器 外: 条痕 (幅3mm) 内: 不明	外: 暗茶褐色 内: 不明	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	内面煤付着
81	B 2	第8層上曲	縄文土器 外: 不定方向の条痕 (幅3～3.5mm) 内: ナデ (煤が付く付着し不明)	外: 暗灰褐色 内: 黄灰褐色	① 0.5mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	外面煤付着
23-82	A 3	第8層上面	縄文土器 外: 部条痕 (黒化のため不明) 内: ナデ、一部朱痕 (幅1mm)	外: 暗灰色 内: 灰茶色	① 1mm以上の砂粒・石英を含む ② 良好	
-83	A 3	第8層上面	縄文土器 外: 条痕 (幅1mm) 内: ナデ、一部指頭印痕・条痕 (幅1mm)	外: 喜茶褐色 内: 黄茶褐色	① 1.5mm以下の砂粒・石英・金雲母 を含む ② 良好	
84	F 1	第8層上面	縄文土器 外: 条痕 (幅2mm) のち刺文文 内: ナデ	外: 黄茶色 内: 暗灰褐色	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	
-85	B 2	第8層上面	縄文土器 外: 条痕 (幅2.5mm) 内: 不明	外: 黄茶褐色 内: 不明	① 1.5mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	
-86	B 2	第8層上面	縄文土器 外: 条痕 (幅2mm) 内: ナデ、一部朱痕 (幅1mm)	外: 暗茶褐色 内: 暗灰褐色	① 1.5mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	
87	E 2	第8層上面	縄文土器 外: 条痕 (幅2-3mm) 内: ケズリのちナデ	外: 黄茶褐色 内: 暗茶褐色	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	
88	D 2	第8層上曲	縄文土器 外: 条痕 (幅2.5mm) 内: ナデ	外: 黄茶褐色 内: 暗灰褐色	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母 を含む ② 良好	
89	B 3	第8層上面	縄文土器 外: 条痕 (幅1mm) のちナデ消し 内: 不明	外: 暗灰褐色 内: 暗茶褐色	① 1.5mmの白色砂粒・石英・金雲母 を含む ② 良好	内面煤付着
-90	C 3	第8層上面	縄文土器 外: 条痕 (幅3mm) 内: ナデ、一部指頭印痕	外: 暗茶褐色 内: 暗茶褐色	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母 を含む ② 良好	内面煤付着
-91	B 3	第8層上面	縄文土器 外: 不定方向の条痕 (幅3～4mm) 内: ナデ (煤が付く付着し不明)	外: 暗灰褐色 内: 暗灰褐色	① 0.5mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	内面煤付着
-92	D 1	第8層上面	縄文土器 外: 条痕のナデ消し 内: ナデ	外: 黄茶色 内: 暗茶色	① 1.5mm以下の砂粒・石英・金雲母 を含む ② 良好	
24-93	A 3	第8層上面	縄文土器 外: 条痕 (幅4～5mm) 内: ケズリ、一部朱痕 (幅4～5mm)	外: 淡灰褐色 内: 淡灰黄色	① レキ・石英・黒雲母を含む ② 良好	
-94	A 3	第8層上面	縄文土器 外: 無調整 内: 粗いケズリ	外: 黄茶色～ 淡黄色 内: 暗茶褐色	① 2mm以下の砂粒・石英・金雲母 を含む ② 良好	外側保持具 の仕様
95	A 2	第8層上曲	縄文土器 外: 無調整 内: 粗いケズリ	外: 茶褐色 内: 暗茶褐色	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	

図番号	出土グリッド	層位	器種	文様・形態・手法の特徴	色調	①胎土 ②焼成	備考
25-1	H 1	第5層	縄文土器 口縁部	外: 条痕 (幅5mm) 内: 条痕 (幅4mm)	外: 暗灰褐色 内: 暗灰褐色	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内外面焼付着
2	H 1	第5層	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅4mm) 内: 条痕 (幅3mm)	外: 暗灰褐色 内: 暗灰褐色	① 4.5mmのレキ、2mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	内外面焼付着
-3	H 1	第5層	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅5~6mm) 内: 条痕 (幅3mm)	外: 暗灰褐色 内: 暗灰褐色	① 3mmのレキ、2mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	
-4	H 1	第5層	縄文土器 底部	外: 条痕 (幅4mm) 内: 条痕 (幅3mm)	外: 暗灰褐色 内: 暗灰褐色	① 2mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	内外面焼付着
5	H 1	第5層	縄文土器 底部	外: 条痕 (一部風化) 内: 条痕	外: 暗灰褐色 内: 暗灰褐色	① 2.5mm以下の砂粒・石英を含む	内外面焼付着

図番号	出土グリッド	層位	器種	文様・形態・手法の特徴	色調	①胎土 ②焼成	備考
26-1	D 10	第6層 上面	縄文土器 跡 (L径29.4cm)	外: 条痕地 (幅5mm) に横方向刻み目隣接、円弧状の微隆帯、内: 横方向の条痕 (幅5mm)	外: 灰白色 内: 灰白色~赤灰色	① 密度: 1~2mmの石英・白色砂粒を含む ② 良好	内外面焼付着 2箇所の補修目
27-2	D 10	第6層 上面	縄文土器 跡	外: 条痕地 (幅4~6mm) に横方向刻み目隣接、縦方向の微隆帯、内: 条痕地 (幅5mm)、口唇部に突起	外: 暗灰褐色~灰黃褐色 内: 灰白色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-3	C 10	第6層 上面	縄文土器 口縁部	外: 条痕地 (幅5~7mm) に縦方向微隆帯、内: 条痕 (幅7mm)	外: 暗灰褐色 内: 暗灰褐色	① 1~2mmの石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-4	C 10	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕地に横方向刻み目隣接、内: 条痕 (幅4mm)	外: 暗黄褐色 内: 暗灰色	① 2mm以下の石英・白色砂粒・黒雲母を含む ② 良好	
-5	D 10	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅6mm) 内: 条痕 (幅6mm)	外: 暗灰色 内: 暗黄褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-6	C 10	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅5~6mm) 内: 条痕 (幅7mm)	外: 暗褐色 内: 灰白色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-7	D 10	第6層 上面	縄文土器 口縁部	外: 条痕地 (幅5mm) に横方向刻み目隣接、内: 条痕 (幅5~6mm)	外: 灰白色~暗灰褐色 内: 灰白色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-8	D 10	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕地 (幅5~6mm) に横方向刻み目隣接、内: 条痕 (幅5mm)	外: 灰白色 内: 灰色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-9	D 10	第6層 上面	縄文土器 口縁部	外: 条痕地に1条の横方向刻み目隣接、内: 条痕 (幅5mm)	外: 灰黄色 内: 灰色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-10	C 10	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕地 (幅5mm) に横方向刻み目隣接、内: 条痕 (幅4mm)	外: 灰白色 内: 黑色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-11	C 10	第6層 上面	縄文土器 口縁部	外: 条痕地 (幅5mm) に横方向刻み目隣接、内: 条痕 (幅5~7mm)、口唇部に突起	外: 暗黄色 内: 灰色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-12	D 10	第6層 上面	縄文土器 口縁部	外: 条痕地 (幅4mm) に横方向刻み目隣接、内: 条痕 (幅4~5mm)	外: 暗黄色~灰白色 内: 灰白色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む、断面にも5mmのレキを含む ② 良好	
28-13	C 9	第6層 上面	縄文土器 口縁部	外: 条痕 内: 条痕 (幅4mm)	外: 灰色 内: 灰色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
14	F 10	第6層 上面	縄文土器 口縁部	外: 条痕地 (幅4~5mm)、口唇部附近に1条の横方向刻み目隣接、内: 条痕 (幅4~5mm)	外: 暗灰褐色 内: 黑色	① 1mm以下の石英・白色砂粒・黒雲母を含む ② 良好	
-15	C 10	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅3mm) 内: 条痕 (幅5mm)	外: 暗灰褐色 内: 灰白色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-16	D 9	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (幅4~5mm) 内: 条痕 (幅5~6mm)	外: 黄褐色 内: 黄褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-17	D 10	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: 条痕 (風化により不明瞭) 内: 条痕 (幅3~4mm)	外: 淡白色 内: 灰色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	

番号	出土グリッド	層位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色調	①地土 ②焼成	備考
-18	D10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 斑駁し不明 内: 条痕(幅4mm)	外: 灰黄色 内: 灰黃褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-19	D10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕地(幅5~6mm)に横方向刻み 内: 日月形	外: 灰白色~ 内: 灰黃褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-20	C10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕地(幅3mm)に隆起 内: 条痕(幅3~4mm)	外: 灰黃褐色 内: 灰黃褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒・黒雲母を含む ② 良好	
-21	C10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕地(幅5~6mm)に横方向刻み 内: 日月形	外: 灰白色~ 内: 淡黄色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-22	E11	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 不定方向の条痕(幅3mm) 内: 条痕(幅4mm)	外: 灰黃褐色 内: 灰黄色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-23	C10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕地(幅5mm)に横方向刻み日 内: 条痕(幅4~5mm)	外: 灰黄色 内: 黑色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-24	B7	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕(幅3mm) (一部黒化) 内: 条痕(幅4mm)	外: 黄褐色~ 内: 黑色	① 1mm以下の石英・白色砂粒・黒雲母を含む ② 良好	
29	D10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕(幅5mm) 内: 条痕(幅4~5mm)	外: 灰黃褐色 内: 黑褐色	① 4mm以下の石英・白色砂粒・黒雲母を含む ② 良好	内面煤付着
-26	D10	第6層 上部	織文土器 口縁部	外: 条痕地(幅4~5mm)に横方向刻み 内: 日月形、横方向隆起、口縁部に 多条の横方向隆起 内: 条痕(幅1~5mm)	外: 黑色 内: 浅黄色	① 1mm以下の石英・黄鐵鉄を含む ② 良好	
-27	D10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕(幅5mm) 内: 条痕(幅6mm)	外: 灰黃褐色 内: 明灰黄色	④ 4mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-28	D10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕地(幅5mm)に横方向隆起 内: 条痕(幅5mm)	外: 灰白色 内: 灰黃褐色~ 黄灰色	① 2mm以下の石英・白色砂粒・黒雲母を含む ② 良好	
-29	D10	第6層 上部	織文土器 口縁部	外: 条痕(幅5mm)に横方向刻み日 内: 条痕地(幅5mm)に横方向刻み日 内: 隆起	外: 灰黃褐色 内: 灰黃褐色	① 3mm以下の石英・白色砂粒・黒雲母を含む ② 良好	
-30	D9	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕地(幅4mm)に横方向刻み日 内: 不定方向の条痕(幅4mm)	外: 灰黃褐色 内: 黑褐色	① 4mm以下の石英・白色砂粒・黒雲母を含む ② 良好	
-31	D10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕地(幅4mm)に隆起 内: 条痕(幅5mm)	外: 灰白色 内: 淡灰色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-32	D10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕地(幅6~7mm)に横方向刻 内: 日月形	外: 浅黄色 内: 灰黃褐色	① 4mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
33	C10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕(幅4~5mm) 内: 条痕(幅6mm)	外: 灰白色 内: 黑色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ③ 良好	内面煤付着
34	C10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕地に横方向刻み日 内: 条痕(幅4~6mm)	外: 灰黃褐色 内: 黑色	① 3mm以下の石英・白色砂粒を含む ③ 良好	
35	C10	第6層 上部	織文土器 口縁部	外: 条痕地(幅6mm)に横方向刻み日 内: 条痕(幅5mm)	外: 灰黃褐色 内: 黃灰色	① 3mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
30~ 36	C10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕地(幅5~6mm)に横方向刻 内: 日月形	外: 黃灰色 内: 灰黄色	① 4mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	接合面あり
-37	C10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕(幅5mm)	外: 灰黃褐色 内: 灰白色	① 2mm以下の石英・白色砂粒・黒雲母を含む ② 良好	
-38	C10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕地(幅4~5mm)に横方向刻 内: 日月形	外: 黃灰色 内: 黑色	① 4mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
39	D10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕地(幅5mm)に横方向刻み日 内: 条痕(幅4~5mm)	外: 灰黃褐色 内: 灰黃褐色	① 3mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-40	D10	第6層 上部	織文土器 胴部	外: 条痕地(幅5mm)に横方向刻み日 内: 条痕(幅5~6mm)	外: 黃灰色~ 内: 灰黃褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒・黒雲母を含む ② 良好	内面煤付着

図番号	出土グリッド	層位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色調	①胎土 ②焼成	備考
31-41		第6層 上面	縄文土器 浅鉢 底部	外: 条痕（幅4mm） 内: 条痕（幅4mm）	外: 灰白色 内: 暗褐色 ～灰白色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-42	C 10	第6層 上面	縄文土器 底部	外: 不定方向の条痕（幅5mm） 内: 条痕（風化により不明瞭）	外: 黄灰色 内: 灰褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-43	C 1	第6層 上面	縄文土器 浅鉢 底部	外: 不定方向の条痕（幅4mm） 内: 条痕（幅6mm）	外: 灰白色 内: 暗褐色	① 略古 ② 良好	
-44	C 10	第6層 上面	縄文土器 底部	外: 条痕（風化により不明瞭） 内: 不定方向の条痕（幅5mm）	外: 淡黄色 内: 浅黄色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
32-45	C 5	第5層 上面	縄文土器 口縁部	外: 逆C字状の爪型文 内: 条痕（幅3mm）	外: 淡黃灰色 内: 黄茶色	① 1.5mm以下の白色砂粒・石英・黒雲母を含む ② 良好	
-46	G 9	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: 逆C字状の爪型文 内: 条痕（幅2~3mm）	外: 淡黃灰色 内: 淡黃灰色	① 1mm以下の白色砂粒・石英・黒雲母を含む ② 良好	
-47	G 9	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: 逆C字状の爪型文 内: 風化著しく不明	外: 淡灰黄色 内: 淡灰色	① 1mm以下の白色砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	
-48	C 9	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: テテのち逆C字状の爪型文 内: 条痕（幅2~3mm）	外: 暗灰褐色 内: 黄茶色	① 2mm以下の白色砂粒・石英・黒雲母を含む ② 良好	
-49	B 7	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: 逆C字状の爪型文 内: 風化著しく不明	外: 淡黃灰色 内: 淡黃灰色	① 1.5mm以下の白色砂粒・石英・黒雲母を含む ② 良好	
-50	B 4	第5層 上面	縄文土器 胴部	外: 逆C字状の爪型文 内: 条痕（幅2mm）	外: 黄灰褐色 内: 黄茶褐色	① 1.5mm以下の白色砂粒・石英・黒雲母を含む ② 良好	
-51	F 3	第5層 上面	縄文土器 胴部	外: ケズリ、ナデ 内: 条痕（幅2~3mm）	外: 黄灰褐色 内: 暗灰色	① 2mm以下の白色砂粒・石英を含む ② 良好	
-52	F 3	第5層 上面	縄文土器 胴部	外: ケズリ、ナデ押え 内: ケズリ、ナデ	外: 暗灰褐色 内: 黄褐色	① 2mm以下の白色砂粒・石英を含む ② 良好	
-53	C 10	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: 縄文（無節R） 内: ナデ	外: 茶褐色 内: 黄茶褐色	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	
-54	C 10	第6層 上面	縄文土器 胴部	外: 縄文（風化著しく不明） 内: ナデ	外: 黄灰色 内: 黄茶褐色	① 3mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	
55	A 2	第5層 上面	縄文土器 胴部	外: 縄文（無節R） 内: ナデ	外: 黄灰褐色 内: 暗灰褐色	① 2mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	

図番号	出土グリッド	地位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色調	① 胎土 ② 燻成	備考
33-1	C 1	第4層下砂層	縄文土器 口縁部	外: 逆C字状爪彫文 (幅4mm) 内: ナデ	外: 暗灰色 内: 黄褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
2	B 2	第4層下砂層	縄文土器 口縁部	外: 逆C字状爪彫文 (幅3mm)	外: 褐黃褐色 内: 暗灰色	① 2mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	
-3	C 1	第4層下砂層	縄文土器 口縁部	外: ナデ、U西部に刻み目 内: ナデ	外: 暗灰色 内: 暗黃褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-4	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文 (無節L)	外: 黒褐色 内: 黒褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-5	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文 (無節L) 地に突唇	外: 褐黃褐色 内: 暗灰色	① 3mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-6	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文 (無節L) 地に突唇 内: ナデ	外: 褐黃褐色 内: 暗黃褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-7	B 3	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縦方向凹彫 (幅3mm) 内: 橫方向条彫 (幅2~3mm)	外: 黒色 内: 黒色	① 1mm以下の石英を含む ② 良好	
34-8	C 1	第4層下砂層	縄文土器 U縁部、胸部	外: 縄文地に横方向突唇爪彫文、U縫 内: 爪彫文 内: U縁部は縄文 (単節RL) 他はナデ	外: 褐黃褐色 内: 暗黃褐色 内: 暗灰色	① 3mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
9	H 3	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文地に横方向突唇爪彫文 内: ナデ	外: 暗黃褐色 内: 暗灰色	① 1mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	
-10	C 1	第4層下砂層	縄文土器 U縁部、胸部	外: 縄文地に横方向突唇爪彫文 内: ナデ	外: 黄褐色 内: 暗黃褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-11	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文地に横方向突唇爪彫文 内: ナデ	外: 黑色 内: 暗灰色	① 1mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	外面媒付着
12	C 1	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文地に横方向突唇爪彫文 内: ナデ	外: 黑褐色 内: 黑色	① 1mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	内面媒付着
-13	B 2	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文地に横方向突唇爪彫文 内: ナデ	外: 黑褐色 内: 黑色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	内面媒付着
-14	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文地に横方向突唇爪彫文 内: ナデ	外: 暗灰色 内: 暗灰色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-15	C 1	第4層下砂層	縄文土器 口縁部	外: U縫部に刻み目、U縫部ナデ	外: 黑褐色 内: 黑褐色	① 1mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	
-16	A 3	第4層下砂層	縄文土器 口縁部	外: 縄文 (単節RL) 内: ナデ、肥厚部に2列の刺突文、U縫部に刻み目	外: 暗黃褐色 内: 暗灰色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
35-17	C 2	第4層下砂層	縄文土器 口縁部	外: 縄文 (風化により不明瞭)、U縫部に刻み目 内: ナデ	外: 暗黃褐色 内: 黑褐色	① 1mm以下の白色砂粒 ② 良好	内面媒付着
18	B 3	第4層下砂層	縄文土器 口縁部	外: 縄文 (単節LR) 内: U縫部縄文 (単節LR)、他ナデ	外: 暗灰色 内: 暗黃褐色	① 1mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	
-19	C 1	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文 (単節LR)	外: 黑褐色 内: 黑褐色	① 1mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	
-20	C 1	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文 (単節LR)	外: 暗黃褐色 内: 黑褐色	① 2mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	
21	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文 (単節LR)	外: 暗灰色 内: 暗黃褐色	① 2mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	
22	B 2	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文 (単節LR)	外: 暗黃褐色 内: 黑色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-23	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文 (単節LR)	外: 黄褐色 内: 黑色	① 2mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	
24	C~D 1	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文 (無節RL)	外: 暗灰黃色 内: 黄褐色	① 1mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	
25	C 1	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文 (単節RL)	外: 暗灰色 内: 暗黃褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
26	C 1	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文 (単節RL)	外: 暗灰色 内: 黑褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-27	B 3	第4層下砂層	縄文土器 胸部	外: 縄文 (単節RL)	外: 黑色 内: 暗黃褐色	① 1mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	

図番号	出土グリッド	層位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色調	①胎上 ②焼成	備考
-28	C 1	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(单節RL) 内: ナデ	外: 暗黄褐色 内: 暗黄褐色	① 2mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	
36- 29	B 3	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(单節RL) 内: ナデ	外: 暗黄褐色 内: 暗褐色	① 3mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-30	A 3	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(单節RL) 内: ナデ	外: 黒褐色 内: 黒褐色	① 常 ② 良好	
31	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(单節RL)、条痕 内: 条痕	外: 暗黄褐色 内: 暗灰黄褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
32	D 1	第4層下砂層	縄文土器 底部	外: 縄文(单節RL) 内: ナデ	外: 暗灰黄褐色 内: 暗灰黄褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒が外面に付着 ② 良好	
37- 33	C 1	第4層下砂層	縄文土器 口唇部	外: 縄文(無節し)、口唇部に刻み目 内: ナデ	外: 黒褐色 内: にぶい黄褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-34	C 2	第4層下砂層	縄文土器 口唇部	外: 縄文(無節し)、口唇部に刻み目 内: ナデ	外: 暗灰黄褐色 内: 黒色	① 2mm以下の石英・白色砂粒・黒雲母を含む ② 良好	
-35	C 1	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(無節L) 内: ナデ	外: 暗褐色 内: 黑色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-36	B 2	第4層下砂層	縄文土器 口唇部	外: 縄文(無節L)、口唇部に刻み目 内: ナデ	外: 黒色 内: 暗褐色	① 常 ② 良好	
-37	C 1	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(無節R) 内: ナデ	外: 暗褐色 内: 黑色	① 3mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
38	B 3	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(無節L) 内: ナデ	外: 暗黄褐色 内: 黑色	① 1mm以下の石英を含む ② 良好	
39	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(無節R) 内: ナデ	外: 暗黄褐色 内: 暗褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-40	C 1	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(無節R) 内: ナデ	外: 暗黄褐色 内: 黑褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-41	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(無節L) 内: 条痕(幅3mm)	外: 暗褐色 内: 暗褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-42	B 3	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(無節R) 内: 不定方向の条痕(幅2mm)	外: 暗褐色 内: 暗黄褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-43	C 1	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(無節L) 内: 条痕(幅2~3mm)	外: 暗黄褐色 内: 暗黄褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-44	B 2	第4層下砂層	縄文土器 底部	外: 縄文(無節R) 内: 条痕(幅2mm)	外: 暗褐色 内: 暗灰黄褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
38- 45	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(無節L) 内: 条痕(幅2mm)	外: 暗黄色 内: 暗黄色	① 1mm以下の石英を含む ② 良好	
-46	C 1	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(無節L) 内: 条痕	外: 黒褐色 内: 黑色	① 3mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-47	C 1	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(風化により不明瞭) 内: 条痕	外: にぶい黄褐色 内: 黑色	① 3mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-48	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(無節L) 内: 条痕	外: にぶい黄褐色 内: 黄灰色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-49	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文(無節L) 内: 条痕	外: 黒褐色 内: 暗褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
39- 50	C 2	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文地に燃糸文・条痕(幅1mm) 内: ナデ	外: 塗灰色 内: 黑色	① 2mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	内面煤付着
51	B 2	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文地に燃糸文・条痕(幅1mm)、 内: 1条の横方向微隆起 内: ナデ	外: 塗灰色 内: 黑褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	内面煤付着
-52	C 1	第4層下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文地に燃糸文 内: ナデ	外: 塗灰色 内: 黑褐色	① 4mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	内面煤付着

図番号	出土グリッド	層位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色調	① 粘土 ② 焼成	備考
-53	B 3	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文地に燃糸文・条痕文(幅1mm) 内: ナデ	外: 褐灰色 内: 黒色	① 2mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	内面媒付着
-54	C 1	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文地に燃糸文 内: ナデ	外: 増灰色 内: 黒色	① 3mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	内面媒付着
55	B 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文地に燃糸文 内: ナデ	外: 褐灰色 内: 黒色	① 1mm以下の白色砂粒を含む ② 良好	内面媒付着
-56	C 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文地に燃糸文 内: ナデ	外: 褐灰色 内: 増灰色	① 1mm以下の砂粒・石英・金雲母を含む ② 良好	内面媒付着
-57	B 3	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文地に燃糸文 内: ナデ	外: 増黄褐色 内: 黒色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	内面媒付着
-58	C 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文地に燃糸文 内: ナデ	外: 増灰色 内: 増灰色	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	内面媒付着
59	B 3	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文地に燃糸文及び条痕(幅1mm) 内: ナデ	外: 増褐色 内: 増灰色	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	内面媒付着
40- 60	B 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 縄文地(幅1~2mm)(一部風化) 内: ナデ	外: 増褐色 内: 増黄褐色	① 密 ② 良好	
-61	C 1	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 条痕(幅5mm) 内: 条痕(風化により不明瞭)	外: 増黄色 内: 增黄色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-62	B 3	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 条痕(幅3~5mm) 内: 風化により不明瞭	外: 増灰黄色 内: 増灰黄色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-63	B 3	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 条痕(幅3mm)(一部風化) 内: 風化により不明瞭	外: 増灰色 内: 増黄色	① 密 ② 良好	
-64	B 3	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 条痕(幅3mm)(一部風化) 内: 風化により不明瞭	外: 増褐色 内: 増褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
65	B 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 不定方向の条痕(幅1~2mm) 内: 不定方向の条痕(幅2~4mm)	外: 黒色 内: 増褐色	① 4mm以下の石英を含む ② 良好	
-66	C 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 不定方向の条痕(幅2mm) 内: 不定方向の条痕(幅3mm)	外: 黒色 内: 黒色	① 1mm以下の石英を含む ② 良好	
-67	C 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 不定方向の条痕(幅2mm) 内: 不定方向の条痕(幅4mm)	外: 黒色 内: 黑褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-68	C 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 条痕(幅2mm) 内: 条痕(幅3mm)	外: 増黄褐色 内: 増褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-69	C 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: 不定方向の条痕(幅2mm) 内: 不定方向の条痕(幅3mm)	外: 黒色 内: 黑褐色	① 2mm以下の石英を含む ② 良好	
41- 70	B 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: ナデ 内: ナデ	外: 増灰黄色 内: 増褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
71	B 3	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: ナデ 内: ナデ	外: 増黄褐色 内: 増褐色	① 2mm以下の石英を含む ② 良好	
-72	A 4	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: ナデ 内: ナデ	外: 増黄褐色 内: 増灰黄色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-73	C 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: ナデ 内: ナデ	外: 増褐色 内: 増褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-74	B 4	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: ナデ 内: ナデ	外: 増黄褐色 内: 黑褐色	① 4mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
75	C 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: ナデ 内: ナデ	外: 増黄褐色 内: 増灰色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
76	B 4	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: ナデ 内: ナデ	外: 増灰黄色 内: 増灰色	① 3mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-77	B 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: ナデ 内: ナデ	外: 増黄褐色 内: 増褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-78	C 1	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外: ナデ 内: ナデ	外: 増灰色 内: 増黄褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	

図番号	山上グリッド	層位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色調	①粘土 ②焼成	備考
-79	B 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外：ナデ 内：ナデ	外：黒褐色 内：灰黄褐色	① 1mm以下の石英を含む ② 良好	
80	C 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外：ナデ 内：ナデ	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	① 1mm以下の石英を含む ② 良好	
-81	C 2	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外：ナデ 内：条痕（2.5mm）、ナデ（一部風化）	外：灰黄褐色 内：褐色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
42- 82	A 4	第4層 下砂層	縄文土器 胴部	外：ナデ 内：条痕（2.5mm）、ナデ（一部風化）	外：灰黄色 内：暗灰黄色	① 1mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-83	C 1	第4層 下砂層	縄文土器 口縁部	外：条痕のちナデ消し（風化により不明瞭） 内：ナデ	外：灰青褐色 内：灰黄褐色	① 1mm以下の石英を含む ② 良好	
-84	C 2	第4層 下砂層	縄文土器 底部	外：ナデ 内：ナデ	外：灰黄色 内：灰黄褐色	① 3mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-85	B 3	第4層 下砂層	縄文土器 底部	外：ナデ 内：ナデ	外：暗灰青色 内：暗灰黄色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-86	C 1	第4層 下砂層	縄文土器 底部	外：ナデ 内：ナデ	外：灰黄褐色 内：灰黄褐色	① 2mm以下の石英・白色砂粒を含む ② 良好	
-87	C 1	第4層 下砂層	縄文土器 底部	外：ナデのち広い刻み目 内：ナデ	外：暗茶褐色 内：暗茶褐色	① 1mm以下の砂粒・石英を含む ② 良好	内外面塗付 若

器番号	出土グリッド	層位	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	色調	①粘土 ②焼成	備考
43-1	F 3	第1層	陶器(皿)	口径20.0cm 残存1/10	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:明白黄色 内:明白黄色	①微砂粒を含む ②良好	外面施釉
-2	F 11 ~12	第1層	陶器(皿)	底径8.8cm 残存1/10	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:明茶色 内:明白黄色	①0.5~1mm程度の白色砂粒を少量含む	内面施釉
-3	F 11 ~12	第1層	陶器(皿)	底径2.6cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:白褐色 内:白褐色	①青 ②良好	内外面施釉
4	F 11 ~12	第1層	陶器(皿)	口径10.2cm 残存1/8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:淡白褐色 内:明白黄色	①密 ②良好	内外面施釉
5	F 5	第1層	陶器(皿)	不明	外:ヨコナデのち2条か なる捺文 内:ヨコナデ	外:茶褐色 内:茶褐色	①微砂粒を含む ②良好	外面施釉
-6	F 11 ~12	第1層	陶器(皿)	口径10.2cm 残存1/12	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:淡黄褐色 内:明灰色	①密 ②良好	内外面施釉
-7	E 8	第1層	陶器(皿)	底径4.0cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:粉色 内:黄褐色	①密、微砂粒を含む ②良好	外面口縁部 に輪付着 内面施釉
-8	B 8	調査区北東	陶器(皿)	底径4.8cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:淡赤褐色 内:黄褐色	①密 ②良好	外面一部 付着 内面施釉
-9	D 8	第1層	陶器(押捺)	底径11.6cm 残存1/3	外:回転ナデ 内:スリ日	外:黄褐色 内:黄褐色	①1.5~2.0mmの砂粒を含む ②良好	
10	調査区西	第1層	陶器(押捺)	底径10.8cm 残存1/3	外:回転ナデ 内:スリ日	外:淡紫色 内:淡紫色	①1mm前後の白色砂粒 ②良好	内面一部 付着
-11	D 10	第1層	陶器(皿)	底径6.8cm 残存1/3	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:淡黄色 内:浅黄色	①1.5~2.0mmの砂粒を少數含む ②良好	内外面施釉
-12	F 11 ~12	第1層	陶器(皿)	口径10.8cm 残存1/5	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:紫褐色 内:紫色	①白色微砂粒を含む ②良好	外面口縁部 施工跡 内面施釉
-13	D 11 ~12	第1層	土師器(皿)	底径5.2cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:明褐色 内:明白褐色	①密、金雲母を含む ②良好	内面煤付着
14	調査区南西	遺構検出中	白磁(皿)	底径6.4cm 残存1/6	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:灰白色 内:灰白色	①密 ②良好	内外面施釉
-15	D 3	第1層	青花(皿)	口径11.0cm 残存1/20	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:淡白青色 内:深白青色	①密 ②良好	内外面施釉
-16	F 4	第1層	陶器	不明	外:ナデのち型押し 内:ナデ	外:深水色 内:深水色	①密 ②良好	内外面施釉
44-17	D 6	第1層	陶器(押捺)	底径11.8cm 残存1/6	外:回転ナデ 内:11条からなるスリ日	外:淡褐色 内:淡褐色	①0.5~2mm前後の砂粒を含む ②良好	
18	E 7	第1層	陶器(押捺)	不明	外:回転ナデ 内:8条からなるスリ日	外:灰白色 内:淡紫色	①1~5mmの白色砂粒を含む ②良好	
-19	E 7	第1層	陶器(押捺)	口径13.9cm 残存1/8	外:回転ナデ 内:8条からなるスリ日	外:灰褐色 内:淡灰紫色	①0.5~5mmの白色砂粒を含む ②良好	
-20	F 6	第1層	青磁(皿)	口径24.0cm 残存1/12	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:紫褐色 内:紫色	①密 ②良好	内外面施釉
21	F 3	第1層	須恵器(押捺)	口径12.0cm 残存1/10	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:白褐色 内:白褐色	①0.5mm程度の砂粒を多く含む、金雲母を含む ②良好	口縁部以外 施釉
-22	A 3	第1層	土師器(杯)	口径25.0cm 残存1/20	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:灰色 内:灰色	①0.5mm程度の砂粒を多く含む、金雲母を含む ②良好	
-23	G 6	第1層	陶器(甕)	不明	外:格子状のタキヨ 内:ナデのちハケ口	外:明白黄色 内:明白黄色	①密 ②良好	
-24	SD 2	第1層	須恵器(押捺)	口径26.0cm 残存1/16	外:回転ナデ 内:右~左方にケズリ のちヨコナデ、口唇部に1条の沈線	外:灰白色 内:灰色	①0.5~1.5mmの白色砂粒を含む ②良好	
-25	A 7	第1層	陶器(甕)	不明	外:格子状のタキヨ 内:ハケ口	外:白黄色 内:白黄色	①密 ②良好	外面煤付着
-26	F 2	第1層	土師器(杯)	口径14.0cm 残存1/8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	外:淡白黃褐色 内:淡白黃褐色	①密、微砂粒を含む ②良好	
-27	D 4	第1層	土師器(杯)	口径13.8cm 残存1/10	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	外:淡褐色 内:灰白色	①密、白色微砂粒を含む ②良好	
-28	E 12	第1層	土師器(杯)	口径13.8cm 残存1/10	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	外:淡白青色 内:淡白青色	①0.5~1.5mmの砂粒を含む ②良好	

図番号	出土グリッド	層位	器種他	法量(cm)	文様・形態・手法の特徴	色調	①胎土 ②焼成	備考
45 29	A 10	第1層	須恵器(杯)	底径7.4cm 残存1/2	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:紫灰色 内:紫灰色	①0.5~2mm程度の砂粒を含む ②良好	
-30	F 11	第1層	須恵器(杯)	底径10.4cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:灰色 内:灰褐色	①0.5~1mmの砂粒を含む ②良好	
31	E 3	第1層	須恵器(杯)	底径6.0cm 残存1/5	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:灰色 内:灰色	①密、0.5~1.5mmの砂粒を少量含む ②良好	
-32	D 7	第1層	須恵器(杯)	底径6.0cm 残存1/4	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:淡灰色 内:淡灰色	①密 ②良好	
33	D 5	第1層	須恵器(杯)	底径12.0cm 残存1/12	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:灰色 内:灰色	①密、白色微砂粒を含む ②良好	
-34	H 6	第1層	須恵器(杯)	底径12.0cm 残存1/7	外:回転ナデ、高台 内:回転ナデ	外:灰色 内:灰色	①密、微砂粒を少暈含む ②良好	
-35	A 3	第1層	須恵器(杯)	底径9.0cm 残存1/4	外:回転ナデ、高台 内:回転ナデ	外:灰色 内:淡灰色	①0.5~2mmの砂粒及び石英を含む ②良好	
-36	D 5	第1層	須恵器(杯)	底径10.0cm 残存1/10	外:回転ナデ、高台 内:回転ナデ	外:白灰色 内:白灰色	①密、微砂粒を含む ②良好	
37	D 7	第1層	土師器(杯)	底径8.0cm 残存1/3	外:ナデ(風化著しく不明) 内:ナデ(風化著しく不明)	外:淡黄茶色 内:淡黄茶色	①0.5~1mm前後の砂粒及び石英を含む ②普通	
38	E 4	第1層	土師器(高杯)	底径5.0cm 残存1/3	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	外:淡白褐色 内:明黄色	①0.5~2mm前後の砂粒を含む ②良好	
-39	H 2	第1層	須恵器(盤)	不明	外:格子目状のタキ目 内:同心円状の当て具組	外:明灰色 内:灰色	①0.5mmの砂粒を含む ②良好	
46- 40	B 4	第1層	須恵器(盤)	不明	外:格子目状のタキ目 内:同心円状の当て具組	外:明灰色 内:明灰色	①0.5~1mmの砂粒少量を含む ②良好	
-41	E 2	第1層	須恵器(盤)	不明	外:タキ目 内:同心円状の当て具組	外:灰白色 内:灰白色	①0.5~1mmの砂粒を含む ②良好	
-42	F 2	第1層	須恵器(盤)	不明	外:タキ目 内:同心円状の当て具組	外:灰色 内:灰色	①0.5~1mmの砂粒を含む ②良好	
-43	E 4	第1層	須恵器(盤)	不明	外:タキ目 内:同心円状の当て具組	外:灰色 内:灰色	①白色微砂粒を含む ②良好	
44	H 2	第1層	須恵器(盤)	不明	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	外:灰色 内:灰色	①1~2mmの砂粒及び石英を含む ②良好	
-45	A 8	第1層	須恵器(蓋杯)	底径15.0cm 残存1/9	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:灰色 内:灰色	①0.5~1.5mmの砂粒を含む ②良好	
-46	F 12	第1層	須恵器(蓋杯)	口径17.0cm 残存1/6	外:体部は回転ナデ 底部は回転ナデ	外:灰色 内:灰色	①0.5mmの砂粒少量を含む ②良好	
-47	B 6	南北セクション内(第1層)	須恵器(蓋杯)	口径16.4cm 残存1/8	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:灰白色 内:灰白色	①0.5mmの砂粒を含む ②良好	外面「トナン」付着
-48	A 7	第1層	須恵器(蓋杯)	口径14.8cm 残存1/9	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:淡灰色 内:淡灰色	①0.5mmの砂粒を含む ②良好	
49	E 7	第1層	須恵器(蓋杯)	口径15.2cm 残存1/2	外:体部は回転ナデ 底部は回転ナデ	外:灰白色 内:明白色	①0.5mmの砂粒少量を含む ②良好	
47- 50	D 2	第1層	土師器(盤)	口径18.6cm 残存1/8	外:ヨコナデ(風化著しい) 内:ヨコナデ(風化著しい)	外:黄白色 内:黄白色	①1mm前後の砂粒を大量に含む、 石英を含む ②良好	
-51	D 8	第1層	土師器(盤)	口径19.0cm 残存1/6	外:ヨコナデ(風化著しい) 内:ヨコナデ(風化著しい)	外:黄白色 内:黄白色	①1mm前後の砂粒を含む ②良好	
-52	D 4	第1層	弥生土器(盤)	口径31.2cm 残存1/12	外:ヨコナデ(一部風化著しく不明) 内:風化著しく不明	外:明黄色 内:黄白色	①0.5~1mmの砂粒を含む ②良好	
53	F 3	第1層	弥生土器(盤)	底径10.0cm 残存1/2	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	外:明黄色 内:明白色	①1~2mmの砂粒及び石英を含む ②不良	
-54	C 3	第1層	弥生土器(盤)	底径9.2cm	外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	外:黄白色 内:淡黄灰褐色	①1~3mmの砂粒大量に含む、 石英、金雲母を含む ②不良	
-55	F 3	第1層	弥生土器(盤)	底径5.5cm	外:底部ハケ目(風化著しく不明) 内:風化著しく不明	外:黄白色 内:黄茶褐色	①0.5~2mmの砂粒及び石英を含む ②不良	

図番号	出土グリッド	層位	器種他	法尺(cm)	文様・形態・手法の特徴	色調	①粘土 ②焼成	備考
-56	E 3	第1層	赤生土器 (高杯)		外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	外:淡黃褐色 内:淡黃褐色	① 1mm前後の砂粒を含む ② 良好	
-57	F 2	第1層	赤生土器 (高杯)		外:風化著しく不明 内:風化著しく不明	外:黃白褐色 内:黃白褐色	① 密 ② 良好	
-58	B 2	第1層	円筒埴輪	不明	外:ハケ目 内:ハケ目	外:灰黃茶色 内:橙褐色	① 0.5~5mm程度の白色砂粒を含む ② 良好	
-59	E 2	第1層	鐵鎌	長さ13.4cm				
-60	A 1	第1層	土鉢	長軸8.0cm 短軸5.0cm	楕円形に刻み目	淡黃灰褐色	① ② 普通	
61	F 3	第1層	上製円盤			黄褐色	① 0.5~1mmの砂粒を含む ② 良好	
-62	D 11	第1層	繩文土器	不明	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	外:淡系褐色 内:淡黃褐色	① 0.5~1mmの砂粒及び石英を含む ② 良好	外面煤付着

2 石 器

第8層上面出土の石器（図48-1～図49-12）

凹石（図48-1）

1は、凹石で、長さ10.9cm、幅7.4cm、厚さ3.1cmを測り、多孔性の円礫を半割した形状を呈す。表裏には1.0～2.5mmのくぼみが4ヶ所認められる。凝灰質砂岩製。

磨石（図48-2）

2は、磨石で、長さ9.8cm、幅8.8cm、厚さ4.7cmを測る。1と2は、同一箇所からまとめて検出されており、セットで使用されていた可能性が高い。ヒン岩製。

石鏸（図49-3）

3は、凹基無茎式石鏸で、長さ2.5cm、幅1.4cm、厚さ4.3mmを測る。サヌカイト製。

スクレーパー（図49-4～6）

4は、黒色の黒曜石によるスクレーパー。背面の周縁部に連続した調整剥離を施し、刃部としている。長さ5.3cm、幅4.0cm、厚さ1.1cmを測る。5は、黒色の黒曜石によるスクレーパー。側縁部下半に連続した調整剥離を施す。長さ7.8cm、幅2.4cm、厚さ1.5cmを測る。6は、三角形を呈する剥片で、側縁に連続した調整剥離を有する。スクレーパーか。長さ3.5cm、幅2.7cm、厚さ1.1cmを測る。

剥片（図49-7～10）

7～10とも黒曜石製。7は、寸詰まりの剥片で、背面周縁部に微細な使用痕が、連続して認められる。10は、並行する縞のはいった灰色の黒曜石製。

石核（図49-11～12）

11～12とも黒曜石製。

第5層出土の石器（図50-1～4）

剥片（図50-1～3）

1は、第5a層出土。チャート製の剥片で、腹面周縁部に、調整剥離を有する。2は、第5c層出土。黒曜石製の剥片。3は、第5a層出土。黒曜石製の剥片で、背面に自然面をとどめる。

石核（図50-4）

4は、並行する縞のはいった灰色の黒曜石製。左面中央に自然面を残し、周縁と右面から剥片が剥離されている。

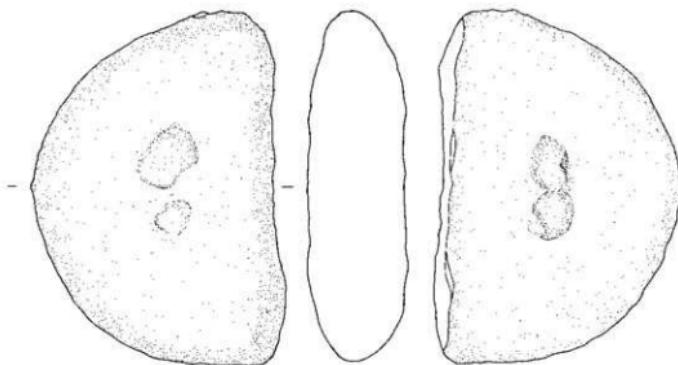
第5層上面出土の石器（図51-1～11）

スクレーパー（図51-1）

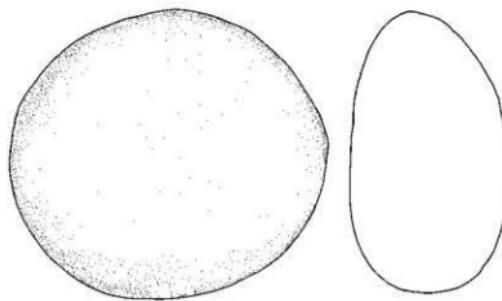
1は、スクレーパーで、黒色の黒曜石製による縦長剥片を素材としている。背面左側縁に連続した調整剥離を施し、鋸歯状の刃縁を作っている。長さ4.2cm、幅2.0cm、厚さ0.7cmを測る。

剥片（図51-2～10）

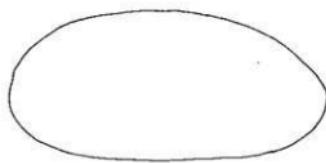
2～9は黒曜石製。5は、並行する縞のはいった灰色の黒曜石製。6は、打面と背面の末端に自然面をとどめる。7は、腹面の左側縁下半に、微細な使用痕が連続して認められる。8は、背面、腹面の下部に自然面をとどめる剥片の破片。9は、並行する縞のはいった灰色の黒曜石製。10は、安山岩



1



2



0 5cm

圖48 第8層上面出土石器 (2/3)

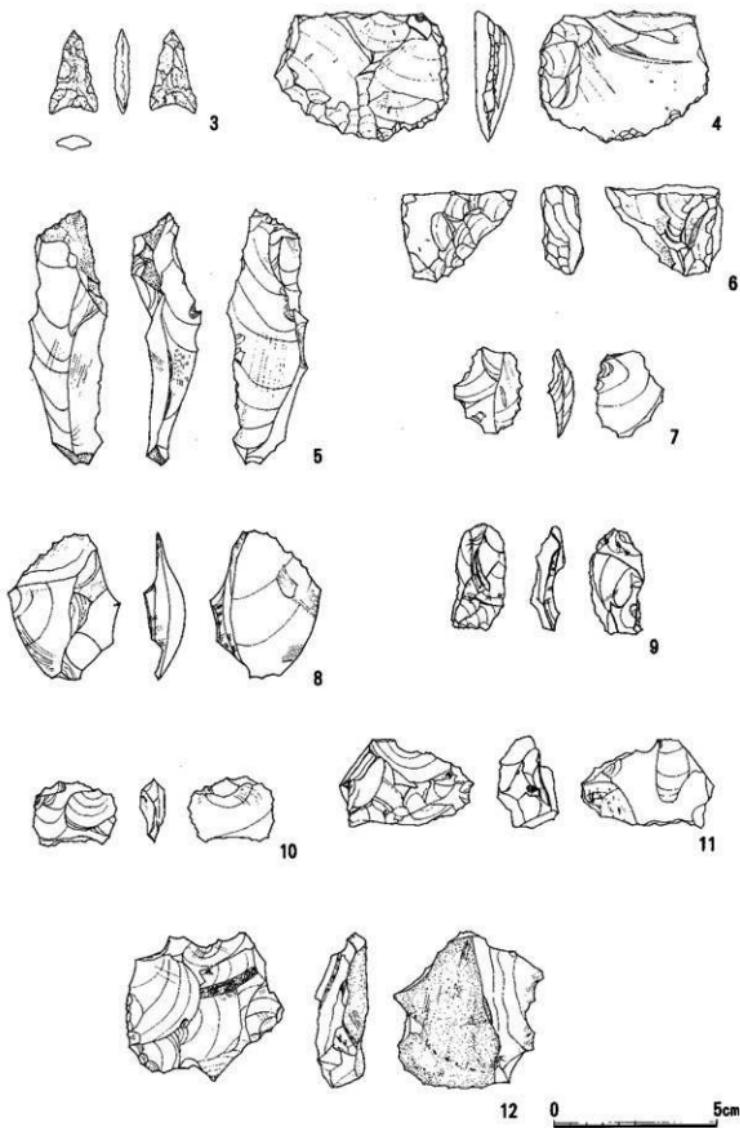


图49 第8层上面出土石器（2／3）

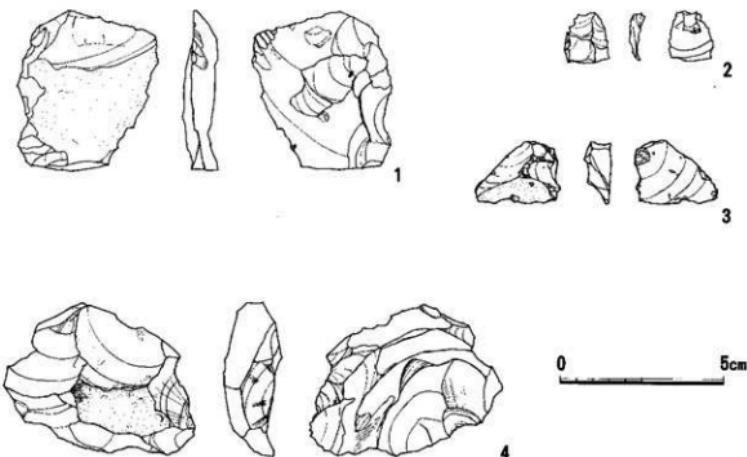


図50 第5層出土石器（2／3）

製の剥片。

石核（図51-11）

11は、黒曜石製の石核。

第6層上面出土の石器（図52-1～14）

石匙（図52-1）

1は、横型石匙で、長さ3.6cm、幅7.3cm、厚さ6.3mmを測る。サヌカイト製で、表裏とも自然面をとどめている。刃部の調整は片面だけに施され、調整面に磨耗が認められる。

磨製石斧（図52-2）

2は、円刃両凸刃の磨製石斧で、長さ8.0cm、最大幅5.9cm、厚さ22.4cmを測る。刃面がえぐれ、刃縁が1mmほど欠損しており、製作時に欠け落ちたものと考えられる。頁岩製。

石錐（図52-3）

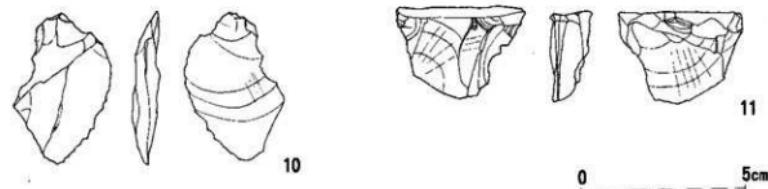
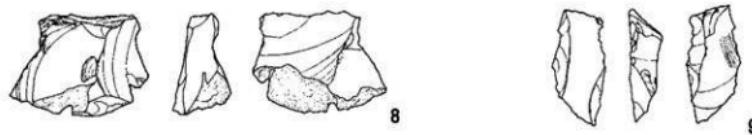
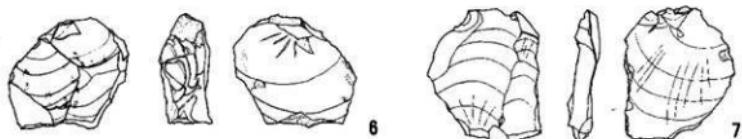
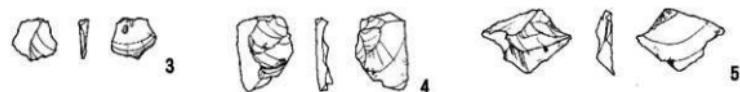
3は自然石の長軸両端を打ち欠いた石錐で、長さ7.1cm、幅5.5cm、厚さ1.6cmを測る。凝灰質シルト岩。

スクレーパー（図53-6）

6は、並行する縞のはいった灰色の黒曜石製。背面には自然面をとどめる。背面上端に、連続した調整剥離を施し、刃部を作っている。長さ6.5cm、幅4.1cm、厚さ1.3cmを測る。

剥片（図52-4～5、図53-7～12）

4、7～12は黒曜石製。5は、チャート製。4は、剥片で、背面の左側縁に刃こぼれ状の連続した



0 5cm

図51 第5層上面出土石器（2／3）

使用痕が認められる。7は、剥片で、背面と打面に自然面をとどめる。側縁に使用痕が認められる。8は、背面に自然面をとどめる。9は、剥片の破片。10は、剥片で、腹面右側縁に調整剥離が認められる。スクレーパーの可能性をもつ。11は、剥片で、背面に自然面をとどめる。腹面右側縁に微細な使用痕が連続して認められる。12は、背面右側縁及び左側縁下半に、微細な使用痕が認められる。

石核（図53-13~14）

13は、石核の破片で、並行する縞のはいった灰色の黒曜石製。左面下端から剥片を剥離している。14は、黒曜石製の石核の破片。左面において、打面を変えながら剥片剥離を行っている。

第4層下位砂層出土の石器（図54-1～図55-23）

石鎌（図54-1）

1は、凹基無茎式石鎌で、脚部が丸く、えぐりが比較的深い。長さ2.45cm、幅1.9cm、厚さ4.7mmを測り、石材は黒曜石である。

楔形石器（図54-2）

2は、楔形石器である。長さ3.0cm、幅1.6cm、厚さ1.0cmを測る。

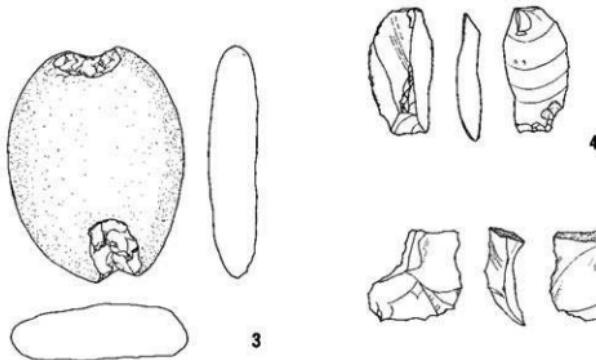
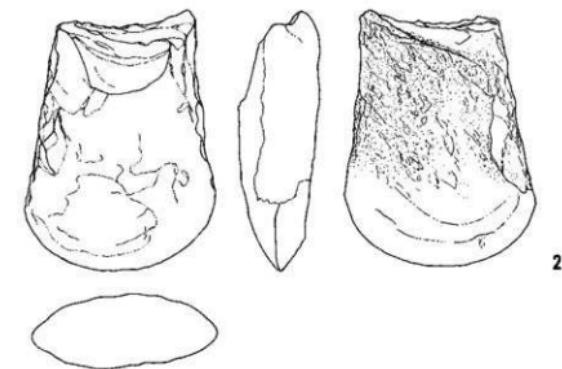
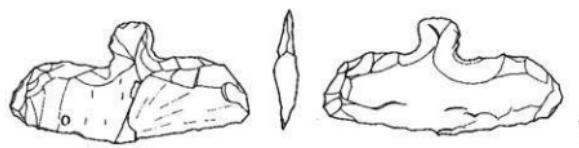
剥片（図54-3～図55-20）

3～20とも黒曜石製。3は、並行する縞のはいった灰色の黒曜石製。4は、背面の一部に自然面をとどめ、腹面の上端に、連続した調整剥離を有する。5は、背面の右下半に自然面をとどめる。6は、側縁が平行する剥片。7は、三角形を呈する剥片。8は、比較的大型の剥片である。11は、灰色の黒曜石製で、背面に自然面をとどめる。14は、並行する縞のはいった灰色の黒曜石製。背面の左側縁に微細な使用痕が認められる。20は、背面に自然面をとどめる。

石核（図55-21～23）

21～23とも黒曜石製。22は、卵大の原礫から剥片を剥離している。23は、右面の上下両端から剥片を剥離している。

石器の観察にあたり、竹広文明氏から有益な教示を頂いた。



0 5cm

圖52 第6層上面出土石器（2／3）

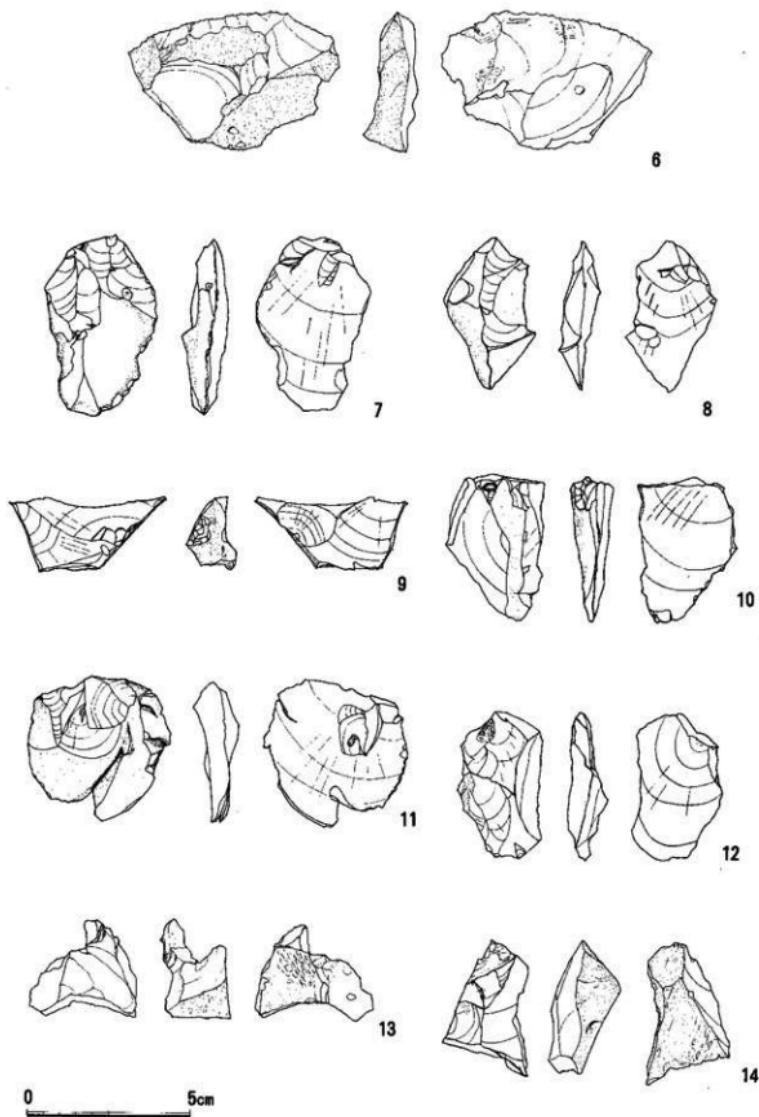


図53 第6層上面出土石器（2／3）

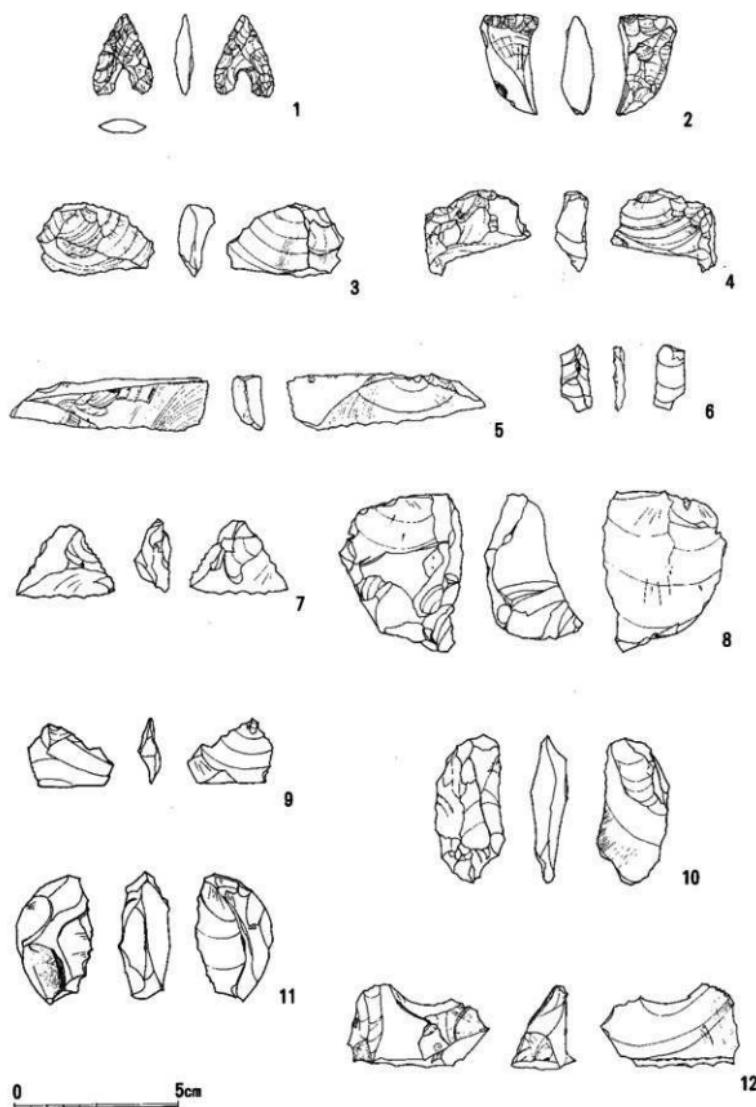


图54 第4层下位砂层出土石器 (2/3)



13



14



15



16



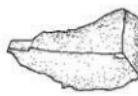
17



18



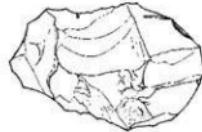
19



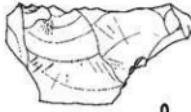
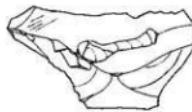
20



21



22



23

0 5cm

図55 第4層下位砂層出土石器（2／3）

3 木製品

(1) 丸木舟 (図56)

丸木舟は、調査区南西のG 1～2、H 1グリッド、第5a層の上面付近に埋没した状態で検出された。出土位置は、第5層が北西から南東へ傾斜する裾部に相当する。第5層上面の等高線と平行するよう、舟首が南西に、舟尾が北東に、舟底外面が上方に向いた状態で検出されている。検出時の舟底上面の標高は、舟首が-9.5cm、舟尾が+6cmである。

大きさは、現存長604cm、最大幅57cm、最大の厚さは推定約4cmほどである。形状は、舟首と考えられる一方の端部が尖頭状、横断面は舷側部がわずかにカーブするものの、ほぼ水平な板状になる。年輪の観察から、使用時当初は、横断面の湾曲が、現状より深かったが、上層の堆積層による水年の土圧によって、サーフボード状の水平な形状に変化したと想定している。舟底内面の3箇所には、焦痕をとどめている。材質は、板目のスギである。

直下から、縄文前期初頭～前半に比定される条痕地無文の鉢形土器が伴出しており、丸木舟も該期に埋没したものと考えられる。

(2) その他の木製品

各層位から、木材を検出している。このうち、人工的な切断痕や切削痕のあるものを抽出して図化した。用途、機能は、大半が不明である。

第7層 (図57-1～3)

1は、長さ33.6cm、最大幅6.2cm、最大の厚さ3.2cmの木片。側面は軸方向に打ち割られ、下方に焦痕をとどめる。心材部分は、抜き取られている。上端部は切断、下端部は削られ、尖り気味の形状を呈する。2は、長さ8.1cm、最大幅2.7cm、最大の厚さ1.3cmの木片。表面は平滑で、焦痕をとどめる。3は、長さ25.2cmの芯持ち円材。硬質で、焦痕をとどめる。

第7層上面 (図58-1～2)

1は、下端部が、尖り気味に丸くおさまる棒材。原材の周縁部を軸方向に木取りしている。上端部は折損する。表面は平滑で、軸方向にいくつかの平坦面が作られ、曖昧な稜線が生じている。2は、上端部の平面が丸みを帯び、断面が割り竹状の弧を描く木片。表面は平滑で、虫喰いの痕跡が顕著。

第6層下位粘土層 (図59-1～2)

1は、破損した角材の一部。一部に、焦痕をとどめる。2は、最大径2.0cmの棒材。原材の周縁部を軸方向に木取りしている。下端部は、ヘラ状に削られ、焦痕をとどめる。上端部は、折損する。

第5層 (図60-1～3)

1は、長さ25.3cm、最大幅4.3cmの角材。両端部が、斜方向に切断され、火熱を受けた痕跡をとどめる。2は、長さ27.4cm、最大径1.9cmの棒材。下端部は、ヘラ状に削られ、焦痕をとどめる。3は、最大の厚さ3.0cmの板材。年輪に対して不整な木取りの板目板材。

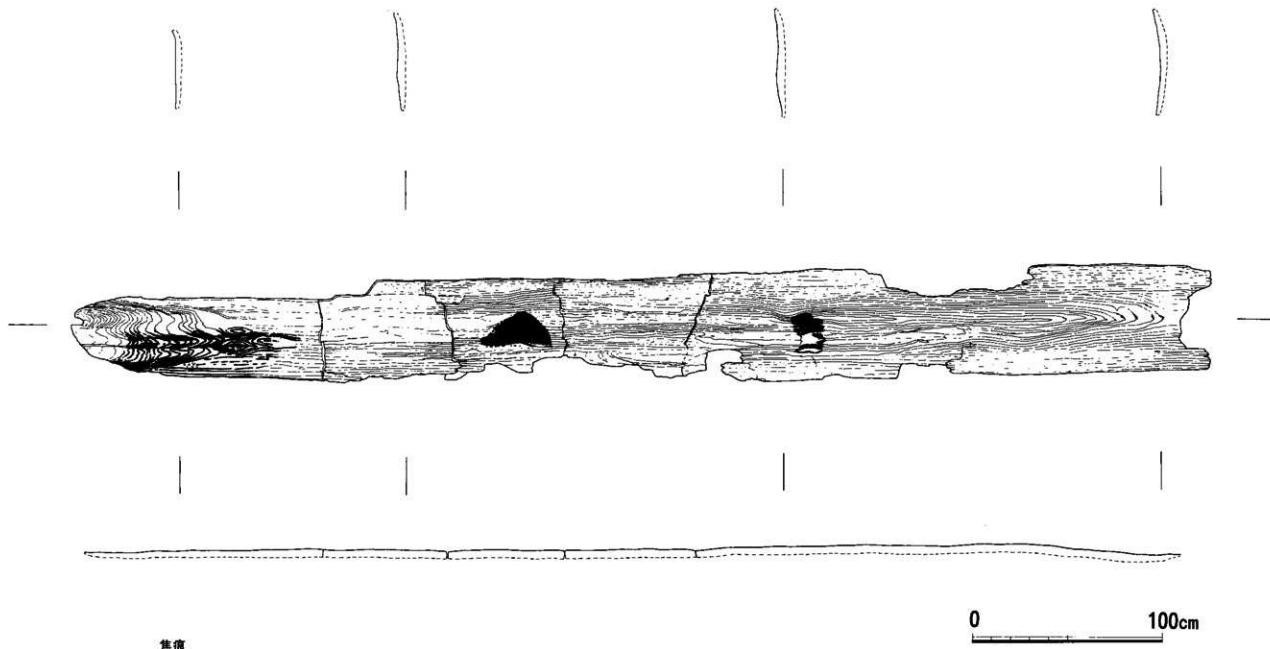


図56 丸木舟 (1/20)

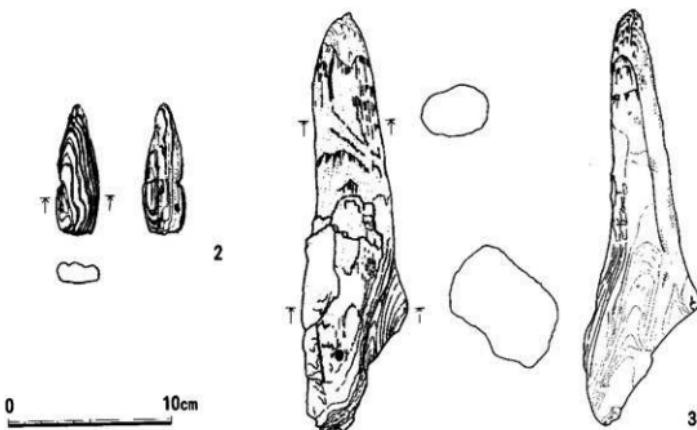
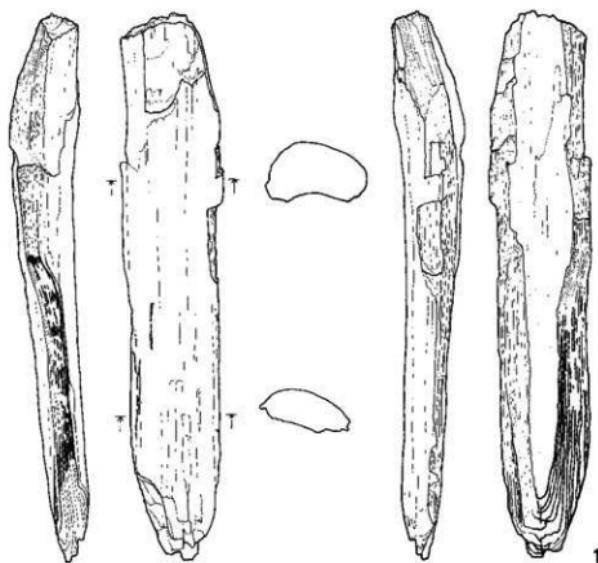


図57 第7層出土木製品 (1/3)

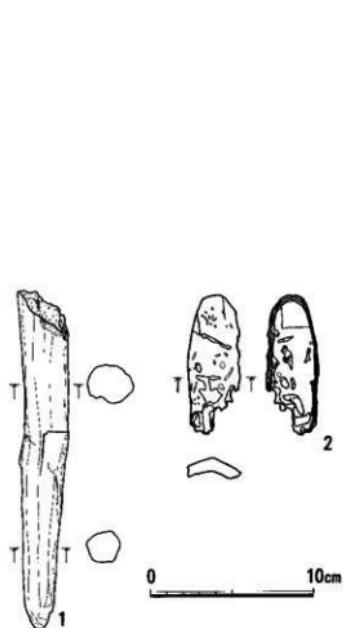


図58 第7層上面出土木製品（1／3）

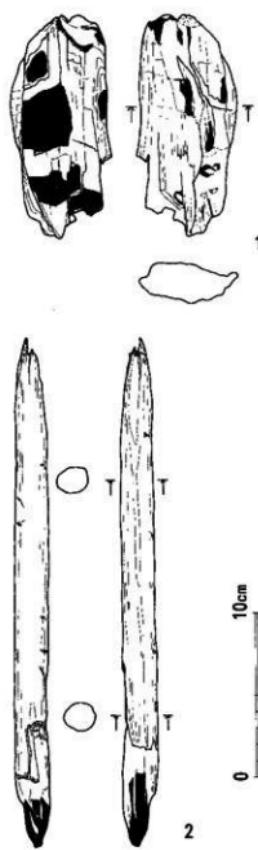


図59 第6層下位粘土層出土木製品（1／3）

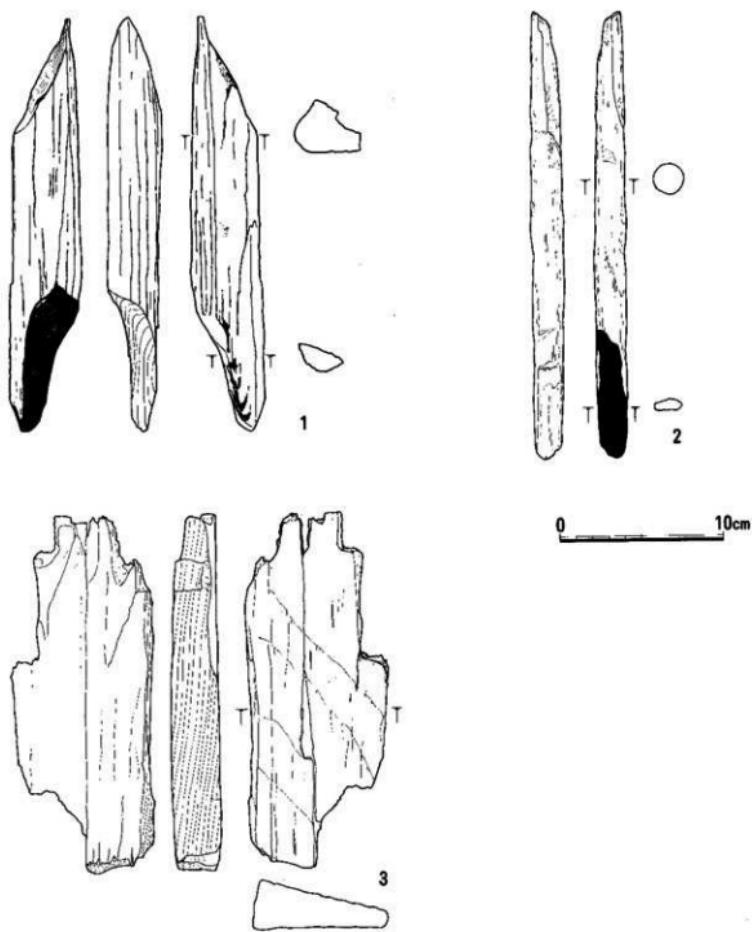


図60 第5層出土木製品 (1/3)

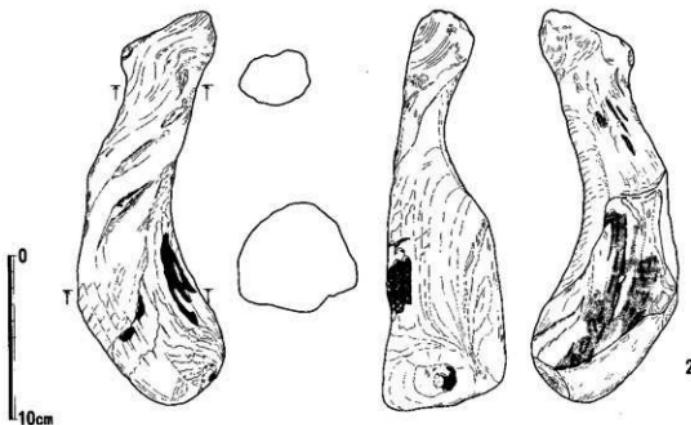
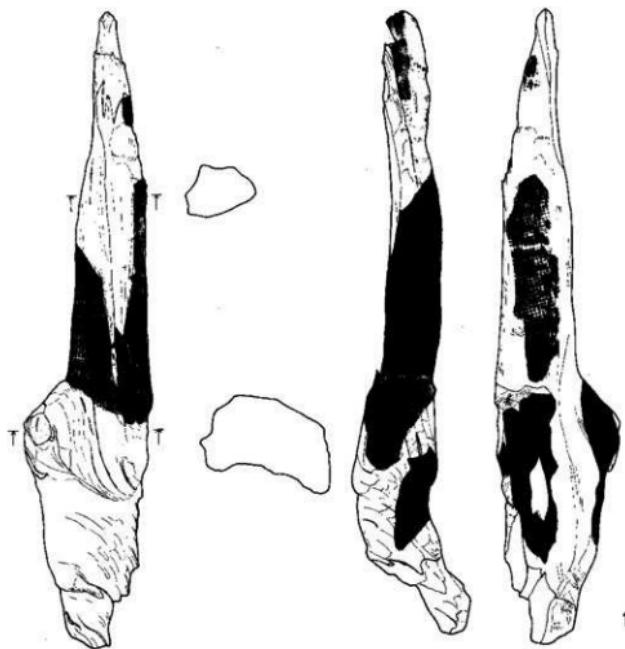


図61 第5層上面出土木製品 (1/3)

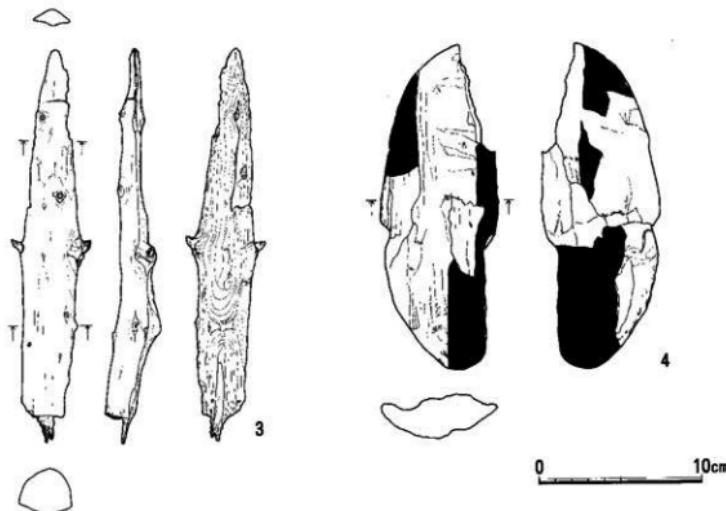


図62 第5層上面出土木製品（1／3）

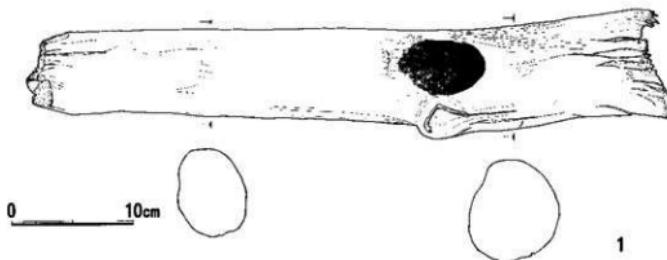


図63 第6層上面出土木製品（1／4）

第5層上面（図61-1～図62-4）

第5層上面、第4層下面で検出したもの。第4層に含まれる可能性をもつ。

1は、長さ39.2cmの、先端が尖った木材。硬質で、全体に焦痕をとどめる。2は、長さ約24cmの棍棒状の木材。硬質で、全体に焦痕をとどめる。3は、木目にそって打ち割られた木材で、先端部が尖る。打ち割られた面に工具が停止した痕跡が認められる。木製品加工製作の過程で、生じた廃材の可能性もある。4は、平面梢円形を半分にした形状の木材。全体に焦痕をもつ。

第6層上面（図63-1）

1は、「轟B式」系上器がまとまって出土した地区付近から出土している。長さ53.1cm、最大径8.9cmの芯持ち円材で、両端部が、おそらく磨製石斧によって切断された痕跡を示す。表面の一部に梢円状の焦痕をとどめる。

第4層下位砂層（図64-1～2）

1は、長さ約59cm、最大径約3.4cmの湾曲した棒材。一方の先端部は切削して、もう一方は焦がしながら、尖らせてある。派出する枝は切断してある。2は、長さ28cm、最大幅3.7cm、最大の厚さ2.8cmの角材。両端部は折損している。

第4層（図65-1～図66-9）

海成層（第4層）から出土したもので、大半は、水域を漂っていたものが、漂着し、埋没したと推定される。

1は、長さ26.6cm、最大幅15.3cm、厚さ2.3cmの梢円形を呈した板材。全体が、内部まで炭化している。2～6、8は、丸みを帯びた穀頭形や偏平な形状の大小の木片。このうち、2、5は焦痕をとどめる。平滑な表面や丸みを帯びた形状は、波蝕による磨滅によって形成されたものも含まれると推定される。7は、長さ8.7cm、最大幅4.0cm、厚さ2.6cmの直方体形の角材。焦痕をとどめる。側面等の各面が、平滑に切断ないし打ち割られている。9は、平面梢円形の木片で、下端部は切断してある。

出土木製品の樹種名は、表5に示している。

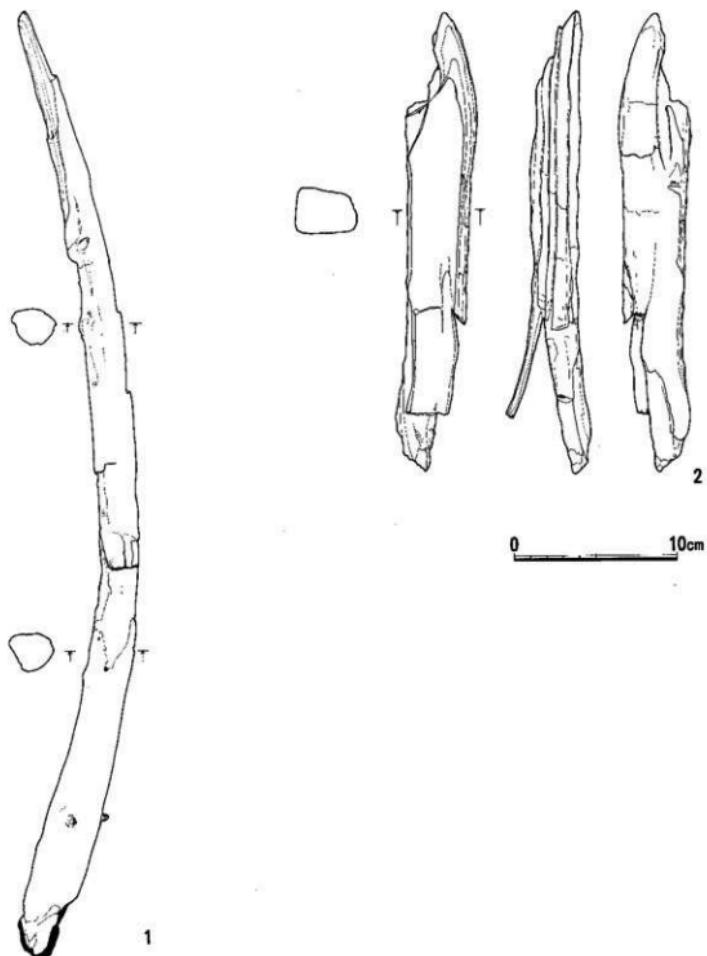


図64 第4層下位砂層出土木製品（1／3）

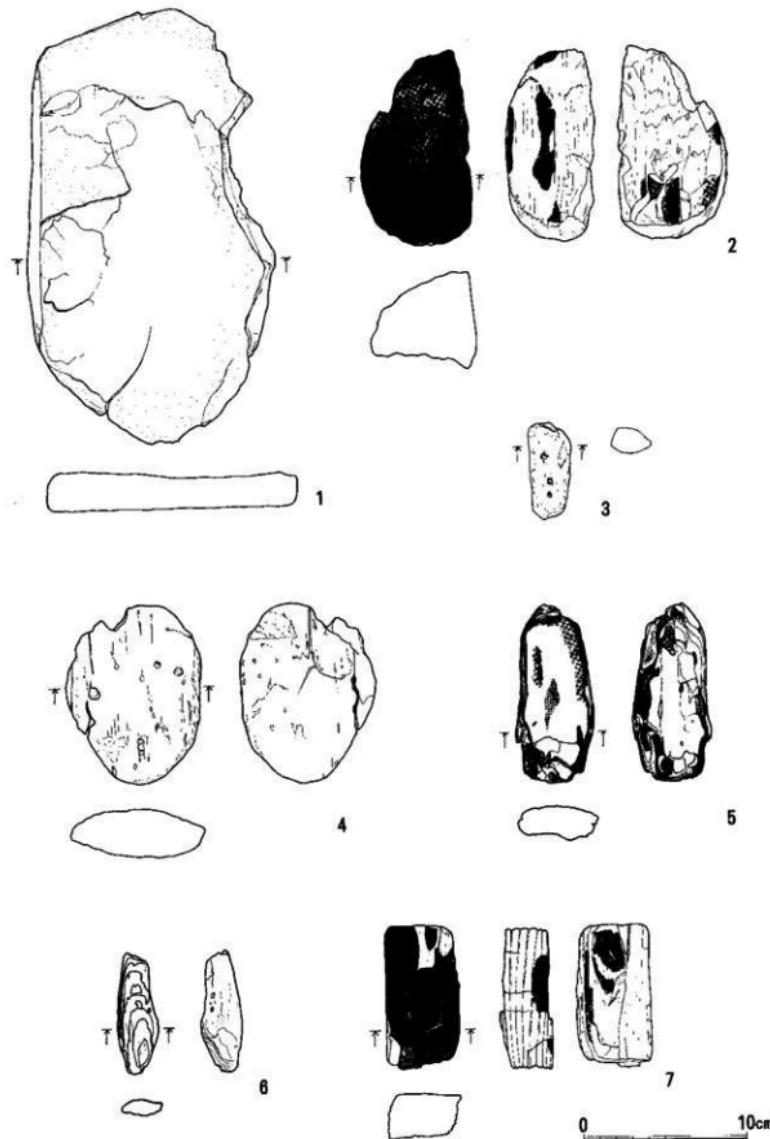
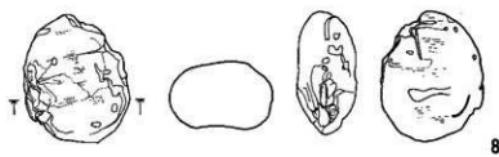
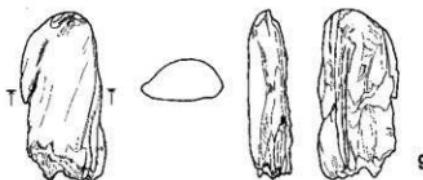


図65 第4層出土木製品 (1/3)



8



9

0 10cm

図66 第4層出土木製品（1／3）

表5、木製品樹種一覧表

図No	Grid	層 準	製品名	時 期	樹 種 名
57-1	A3	第7層	加工材	縄文前期初頭	マツ属(複雜管束亞属)
57-2	E 1 0	第7 b層	加工材	縄文前期初頭	アカマツ
57-3	A3	第7層	円材	縄文前期初頭	マツ属(複雜管束亞属)
58-1	A 2	第7層上面(第6層)	棒材	縄文前期初頭	スギ
58-2	B 2	第7層上面(第6層)	加工材	縄文前期初頭	クロマツ
59-1	C 5	第6層下位粘土層	角材	縄文前期初頭	モミ属
59-2	C 4	第6層下位粘土層	棒材	縄文前期初頭	スギ
56	G~II・1~2	第5 a層	丸木舟	縄文前期初頭~前半	スギ
60-1	C 3	第5層	角材	縄文前期初頭~前半	モミ属
60-2	B 2	第5 c層	棒材	縄文前期初頭~前半	スギ属
60-3	B 4	第5 a層	板材	縄文前期初頭~前半	モミ属
61-1	B 4	第5層上面	加工材	縄文前期初頭~中期初頭	
61-2	B 4	第5層上面	加工材	縄文前期初頭~中期初頭	マツ属(複雜管束亞属)
62-3	B 4	第5層上面	加工材	縄文前期初頭~中期初頭	モミ属
62-4	B 4	第5層上面	加工材	縄文前期初頭~中期初頭	モミ属
63-1	D 1 0	第6層上面	円材	縄文前期初頭~中期初頭	モミ属
64-1	B 4	第4層下位砂層	棒材	縄文中期初頭	モミ属
64-2	B 4	第4層下位砂層	角材	縄文中期初頭	モミ属
65-1	E 2	第4層	板材	縄文中期初頭~	
65-2	G 7	第4層	加工材	縄文中期初頭~	モミ属
65-3	F 7	第4層	加工材	縄文中期初頭~	エノキ属
65-4	G 8	第4層	加工材	縄文中期初頭~	オニグルミ属
65-5	H 8	第4層	加工材	縄文中期初頭~	マツ属(複雜管束亞属)
65-6	H 8	第4層	加工材	縄文中期初頭~	マツ属(複雜管束亞属)
65-7	H 1 1	第4層	角材	縄文中期初頭~	モミ属
66-8	H 8	第4層	加工材	縄文中期初頭~	アサガ属
66-9	H 8	第4層	加工材	縄文中期初頭~	マツ属(複雜管束亞属)

* は能城修一氏、それ以外は川崎地質による同定。

(3) 橋縄手地区出土木製品の樹種同定結果(概報)

川崎地質株式会社(担当者: 渡辺正巳)

はじめに

島根大学構内遺跡は、松江市西川津町の島根大学構内に分布する。

今回の報告は、同遺跡の1次調査(橋縄手地区)にさいして出土した木質遺物のうち17点について、島根大学埋蔵文化財調査研究センターが川崎地質株式会社に委託して実施した樹種鑑定結果の概報である。

樹種鑑定方法

図67のフローチャートに従い、永久プレパラートを作製した。作製した永久プレパラートは、川崎地質株式会社関西支社微化石分析所にて保管されている。

樹種鑑定に当たっては、光学顕微鏡下で40~600倍の倍率で観察した。樹種鑑定にあたって、島根大学総合理工学部古野研究室所蔵の現生標本および資料を利用させていただいている。また古野教授には、終始ご助言をいただいている。

記載の用語などは島地ほか(1985)に従う。

樹種の鑑定と記載

以下に各試料毎の鑑定結果と特徴の記載を示す。また、表6に鑑定結果の一覧表を示す。

①モミ属 *Abies* sp.

試料番号: 4-2(W96013104)、4-7(W96013007)、5-1(W96013101)、5-3(W96013103)、

5上-3(W96020605)、5上-4(W96020604)、6上-1(W96013003)

図版番号: 39 (1-1~3)

記載:

構成細胞は仮道管、放射柔細胞からなる。また傷害樹脂道の認められる試料もある。全体に早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅は狭い傾向にある。分野壁孔は不明瞭なものが多いが、スギ型ないしヒノキ型で2~4個存在する。放射柔細胞に典型的なじゅず状末端壁をもつ。

②マツ属(複維管束亜属) *Pinus* (sub. *Diploxylon*) sp.

試料番号: 4-5(W96013106)、4-6(W96022802)、4-9(W96020602)、5上-2(W96020603)、

7-1(W96013001)、7-3(W96013002)

図版番号: 39 (1-4~6)

記載:

構成細胞は仮道管、放射仮道管、放射柔細胞、垂直樹脂道および水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞からなる。全体に早材から晩材への移行は急で、晩材の幅は様々である。放射仮道管には鋸歯状肥厚が認められる。放射組織は単列であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を示す。エピセリウム細胞は薄壁である。垂直樹脂道は早、晩材部とともに分布している。分野壁孔は窓状である。

[処理手順]

[処理内容]

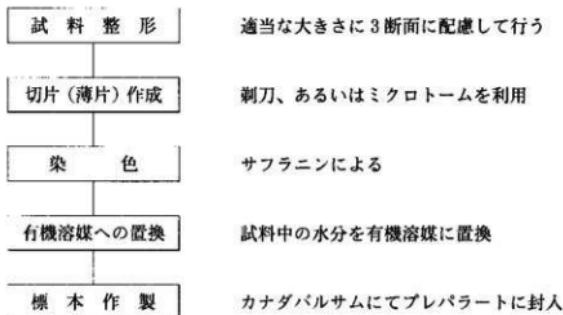


図67 樹種鑑定用プレパラート作製フローチャート

表6、樹種鑑定結果一覧表

試料番号	図版番号	樹種名	
		和名	学名
4-2	図65-2	モミ属	<i>Abies</i> sp.
4-3	図65-3	エノキ属	<i>Celtis</i> sp.
4-4	図65-4	オニグルミ属	<i>Juglans</i> sp.
4-5	図65-5	マツ属(複維管束亜属)	<i>Pinus</i> (sub. <i>Diploxylon</i>) sp.
4-6	図65-6	マツ属(複維管束亜属)	<i>Pinus</i> (sub. <i>Diploxylon</i>) sp.
4-7	図65-7	モミ属	<i>Abies</i> sp.
4-8	図66-8	アサダ	<i>Ostrya japonica</i> Sargent
4-9	図66-9	マツ属(複維管束亜属)	<i>Pinus</i> (sub. <i>Diploxylon</i>) sp.
5-1	図60-1	モミ属	<i>Abies</i> sp.
5-2	図60-2	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
5-3	図60-3	モミ属	<i>Abies</i> sp.
5上-2	図61-2	マツ属(複維管束亜属)	<i>Pinus</i> (sub. <i>Diploxylon</i>) sp.
5上-3	図62-3	モミ属	<i>Abies</i> sp.
5上-4	図62-4	モミ属	<i>Abies</i> sp.
6上-1	図63-1	モミ属	<i>Abies</i> sp.
7-1	図57-1	マツ属(複維管束亜属)	<i>Pinus</i> (sub. <i>Diploxylon</i>) sp.
7-3	図57-3	マツ属(複維管束亜属)	<i>Pinus</i> (sub. <i>Diploxylon</i>) sp.

③スギ *Cryptomeria japonica* D.Don

試料番号：5-2(W96013102)

図版番号：40（2-1～3）

記載：

構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行は急で、晩材の幅はやや狭い。樹脂細胞は晩材部に分布している。また、分野壁孔はスギ型で通常2個存在する。

④オニグルミ属 *Juglans* sp.

試料番号：4-4(W96013105)

図版番号：40（2-4～6）

記載：

やや大きい道管が単独ないし2～3個放射方向に複合し、散在状に分布する散孔材である。年輪の外側では道管の大きさが急減している。道管せん孔は単せん孔で、チロースが発達している。短接線柔組織が発達して網状柔組織を形成している。また、ターミナル柔組織も認められる。放射組織は1～4細胞幅で、1～2細胞幅のものが多く、高さは非常に低く、ほとんど平伏細胞からなる同性型である。

⑤アサダ *Ostrya japonica* Sargent

試料番号：4-8(W96020601)

図版番号：41（3-1～3）

記載：

小さい道管が単独ないし放射方向に2～5個かそれ以上複合し、散在状に分布する散孔材である。

道管せん孔は単せん孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が認められ、チロースが発達している。放射組織は1～3細胞幅で、3細胞幅のものが多く、高さは低い。また、ほとんど平伏細胞からなる同性型である。短接線状柔組織が特に晩材部に発達している。

⑥エノキ属 *Celtis* sp.

試料番号：4-3(W96022801)

図版番号：41（3-4～6）

記載：

年輪幅が非常に狭く、中庸の道管が1～2列（ほとんど単列）に配列する環孔材である。孔圈外では集団管孔を形成しているが、年輪幅が狭いため、配列様式は不明である。道管せん孔は単せん孔で、孔圈外の小道管にはらせん肥厚が認められる。また道管内にはチロースが非常によく発達している。孔圈道管および集団管孔を囲む周囲柔組織が存在している。放射組織は1～6細胞幅で、高さはきわめて低い。また不顯著であるが、紡錘形を示す多列放射組織に方形のさや細胞が認められる。

引用文献

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造。276p. 文永堂、東京。

4 自然遺物

自然遺物としては、種実、自然木が出土している。その他、水洗選別法による微細遺物採集を試みたが、獸骨等、明記される遺物の出土はみなかった。

(1)種実

各層から、オニグルミが出土している。内訳は以下の通り。

第3層 3

第4層 2

第5a層 1

第6層下位粘土層 1

(2)自然木と樹種同定結果

各層から、自然木が出土している。これらのうち、第5層と第7層出土のものは、現地性の可能性が大きいが、第4層や第6層下位粘土層等、海成層中出土の材は、流木であるものが多いと想定される。フナクイムシの生痕をもつものも認められ、海水域を漂っていた後、調査区内に漂着したと考えられる。

樹種同定結果は、表7の一覧表に示す。樹種同定は、能城修一氏（森林総合研究所木材利用部）による。

表7、自然木樹種一覧表

SHIM-NO.	樹種名	Grid	層準	採集日	時期	備考
SHIM-27	コナラ属クヌギ節	A~B.2	第3層上面	940720	縄文中期～奈良時代	
SHIM-28	コナラ属アカガシ虫間	F 2	第3層上面	940712	縄文中期～奈良時代	
SHIM-29	カヤ	B 2	第3層上面	940719	縄文中期～奈良時代	
SHIM-30	モミ属	A 6	第3層	940721	縄文中期～奈良時代	
SHIM-31	モミ属	B 3	第3層	940726	縄文中期～奈良時代	
SHIM-32	トネリコ属	B 4~C 3	第3層	940829	縄文中期～奈良時代	
SHIM-33	カヤ・モミ属	B 8~9	第3層	940831	縄文中期～奈良時代	
SHIM-34	モミ属	D 2	第3層	940831	縄文中期～奈良時代	
SHIM-35	ヤナギ属	D 5~6	第3層	940831	縄文中期～奈良時代	
SHIM-36	サクラ属	D 6	第3層	940719	縄文中期～奈良時代	
SHIM-37	ヤマグワ	D 6	第3層	940831	縄文中期～奈良時代	
SHIM-38	カヤ	D 6	第3層	940719	縄文中期～奈良時代	
SHIM-39	カヤ	D 6	第3層	940831	縄文中期～奈良時代	
SHIM-40	ハリギリ	D 6	第3層	940719	縄文中期～奈良時代	
SHIM-41	カヤ	D 6	第3層	940719	縄文中期～奈良時代	
SHIM-42	スダジイ	E 1	第3層	940714	縄文中期～奈良時代	
SHIM-43	モミ属	E 1	第3層	940714	縄文中期～奈良時代	
SHIM-44	ヤマグワ	E 5	第3層	940719	縄文中期～奈良時代	
SHIM-45	コナラ属アカガシ亜属	F 1	第3層	940715	縄文中期～奈良時代	
SHIM-46	モミ属	B 4	第4層	940830	縄文中期初頭～	ナクイムシ
SHIM-47	モミ属	E 1	第4層(第8層上面)	940722	縄文中期初頭～	
SHIM-48	クロマツ	E 4	第4層	940824	縄文中期初頭～	
SHIM-49	スダジイ	E 8	第4層	940823	縄文中期初頭～	
SHIM-50	シャシャンボ	E 8	第4層	940808	縄文中期初頭～	
SHIM-51	シャシャンボ	E 8	第4層	940808	縄文中期初頭～	
SHIM-52	モミ属	E 8	第4層	940808	縄文中期初頭～	
SHIM-53	モミ属	F 2	第4層	940808	縄文中期初頭～	
SHIM-54	モミ属	F 4	第4層	940826	縄文中期初頭～	
SHIM-55	モミ属	F 4	第4層(第5層上面)	940809	縄文中期初頭～	ナクイムシ
SHIM-56	モミ属	F 8	第4層	940805	縄文中期初頭～	
SHIM-57	モミ属	G 1	第4層	940810	縄文中期初頭～	
SHIM-58	モミ属	G 5	第4層	940824	縄文中期初頭～	
SHIM-59	同定不能	G 10	第4層	940829	縄文中期初頭～	
SHIM-60	同定不能	G 11	第4層	940829	縄文中期初頭～	
SHIM-61	モミ属	H 3	第4層(第5層上面)	940808	縄文中期初頭～	ナクイムシ
SHIM-62	モミ属	H 8	第4層	940805	縄文中期初頭～	
SHIM-63	エゴノキ属	H 8	第4層	940805	縄文中期初頭～	
SHIM-64	クロマツ	H 10	第4層	940829	縄文中期初頭～	
SHIM-65	モミ属	H 10	第4層	940805	縄文中期初頭～	
SHIM-66	モミ属	B 3	第5層上面	940829	縄文前期初頭～中期初頭	
SHIM-67	モミ属	B 3	第5層上面	940829	縄文前期初頭～中期初頭	
SHIM-68	エゴノキ属	B 4	第5層上面	940728	縄文前期初頭～中期初頭	
SHIM-69	コナラ属コナラ節	C 1~2	第5層上面	940830	縄文前期初頭～中期初頭	
SHIM-70	モミ属	D 1	第5層上面	940830	縄文前期初頭～中期初頭	
SHIM-71	コナラ属コナラ節	D 2	第5層上面	940830	縄文前期初頭～中期初頭	
SHIM-72	モミ属	F 2	第5層上面	940808	縄文前期初頭～中期初頭	

SHIM- 73	コナラ属クヌギ節	B 1~2	第 5 c 層	940909	縄文前期初頭～前半	
SHIM- 74	セミ属	D 1	第 5 a 層	940830	縄文前期初頭～前半	
SHIM- 75	マツ属復総管束亞属	C 1 0	第 6 層上面	941007	縄文前期初頭～中期初頭	炭化
SHIM- 76	クロマツ	C 3	第 6 層下位粘土層	941107	縄文前期初頭	フナクイムシ
SHIM- 77	モミ属	C 5	第 6 層下位粘土層	940927	縄文前期初頭	
SHIM- 78	サカキ	C 7	第 6 層下位粘土層	940927	縄文前期初頭	
SHIM- 79	サクラ属	C 8	第 6 層下位粘土層	940927	縄文前期初頭	
SHIM- 80	コナラ属コナラ節	A 2	第 7 層上面(第 6 層)	940901	縄文前期初頭	
SHIM- 81	コナラ属クヌギ節	B 2	第 7 b 層(K-Ah上位)	940916	縄文前期初頭	
SHIM- 82	コナラ属クヌギ節	B 2	第 7 b 層(K-Ah上位)	940916	縄文前期初頭	
SHIM- 83	コナラ属コナラ節	C 2	第 7 b 層(K-Ah上位)	940916	縄文前期初頭	
SHIM- 84	コナラ属コナラ節	C 2	第 7 b 層(K-Ah上位)	940909	縄文前期初頭	
SHIM- 85	コナラ属コナラ節	C 2	第 7 b 層(K-Ah上位)	940916	縄文前期初頭	
SHIM- 86	コナラ属コナラ節	C 2	第 7 b 層(K-Ah上位)	940916	縄文前期初頭	
SHIM- 87	コナラ属コナラ節	C 3	第 7 b 層(K-Ah上位)	940916	縄文前期初頭	
SHIM- 88	コナラ属コナラ節	C 3	第 7 b 層(K-Ah上位)	940916	縄文前期初頭	
SHIM- 89	コナラ属コナラ節	D 2	第 7 b 層(K-Ah上位)	940916	縄文前期初頭	
SHIM- 90	コナラ属アカガシ亜属	F 1	第 8 层上面	941104	縄文早期末	立木
SHIM- 91	クロマツ	F 3	第 8 层上面	941104	縄文早期末	フナクイムシ?

第6章 島根大学構内遺跡（橋縄手地区）の古環境復元

1 橋縄手地区における花粉・珪藻分析（概報）

川崎地質株式会社（担当者：渡辺正巳）

はじめに

島根大学構内遺跡は、松江市西川津町の島根大学構内に分布する。

今回の報告は、島根大学埋蔵文化財調査研究センターが、遺跡周辺の古植生、堆積環境など、古環境の復元を行うために、川崎地質株式会社に委託して実施した分析報告書の概報である。

分析試料について

分析した試料はすべて島根大学埋蔵文化財調査研究センターにより提供されたものである。分析試料と採取層準の関係を表8に示す。また、発掘地内の模式柱状図および試料採取層準を図68の花粉ダイアグラム中の左側に示す。

分析方法および分析結果

（1）分析方法

花粉・珪藻処理は、渡辺（1995a・b）に従って実施した。顕微鏡観察は、光学顕微鏡を使用し、通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。また、花粉分析では、原則的に木本花粉化石総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本花粉化石も同定した。また珪藻分析では、原則的に珪藻化石総数が200個体以上になるまで同定を行った。しかし一部の試料については、花粉化石および珪藻化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数あるいは、珪藻化石総数で200を越えることができなかった。

表8、試料採取層準

試料No	地層名	試料No	地層名
2	第2層	6-2	第6層
3	第3層	7a	第7a層
5a1	第5a層	7c	第7c層
5a2	第5a層	7d	第7d層
5c	第5c層(c)	7e	第7e層
6-1	第6層	8	第8層

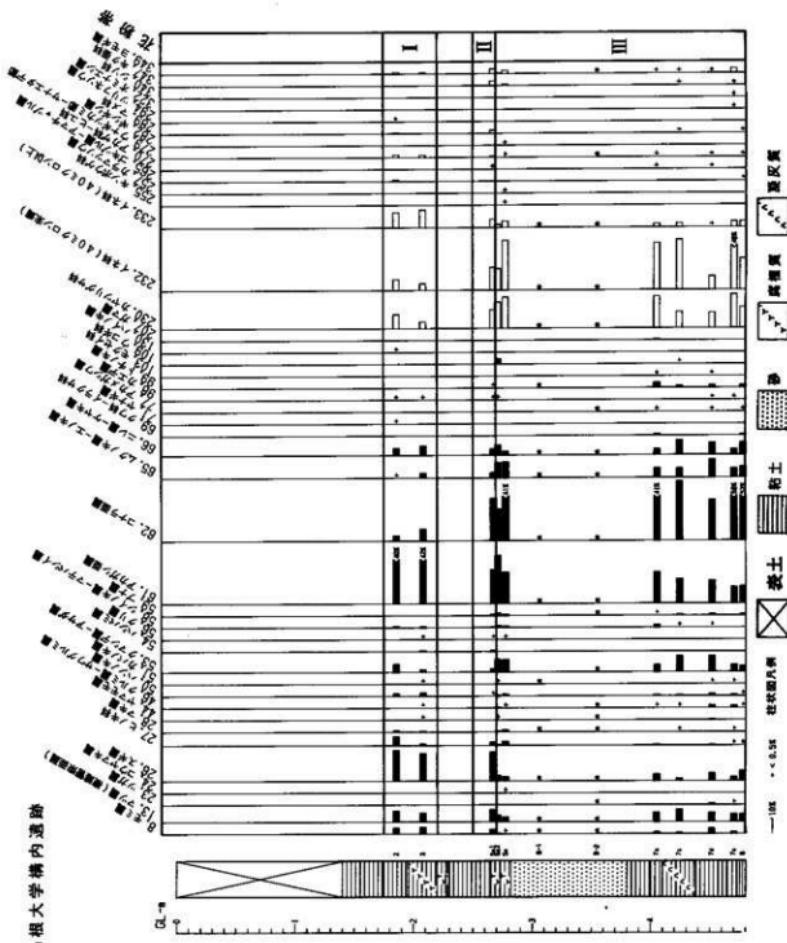


図68 花粉ダイアグラム

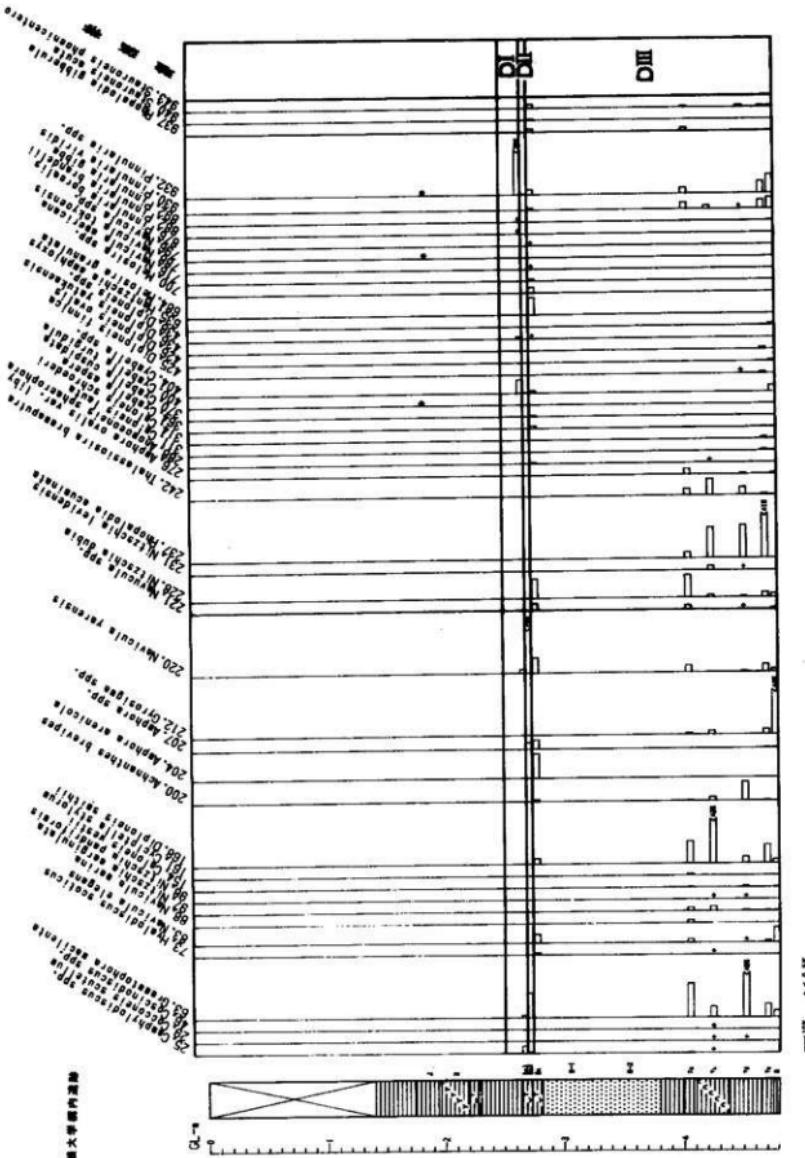


図69 珪藻ダイアグラム

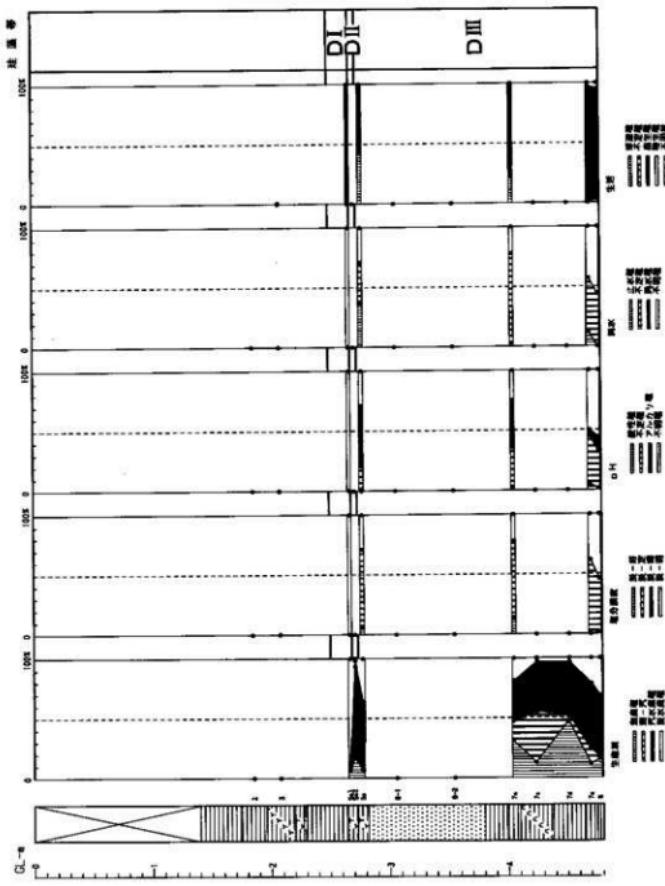


図70 硅藻総合ダイアグラム

(2) 分析結果

花粉分析結果を図68の花粉ダイアグラムに、珪藻分析結果を図69の珪藻ダイアグラム、および図70の珪藻総合ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基準にした百分率を、各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。珪藻ダイアグラムでは、同定総数を基準にした百分率を各々の種類について算出し、スペクトルで表した。珪藻総合ダイアグラムのうち左端の「生息域別グラフ」は、同定した全ての種類を対象に、それぞれの要因（生息域）毎に百分率で表したものである。その他の4つのグラフは、淡水種の珪藻についてそれぞれの要因毎に百分率で表したものである。

考察

(1) 花粉分帯

花粉組成の特徴から、以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。

1) III帯（試料No.8～5 a 2）

コナラ亜属が卓越し、アカガシ亜属を伴う。また、マツ属（複維管束亜属）、スギ属、クマシデ属－アサダ属、ムクノキ属－エノキ属、ニレ属－ケヤキ属も低率ではあるが出現する。また草本花粉が高率となる。

2) II帯（試料No.5 a 1）

上下の層準の中間的な花粉組成を示す。コナラ亜属、アカガシ亜属に加え、スギ属も高率になる。また、マツ属（複維管束亜属）、スギ属、クマシデ属－アサダ属、ムクノキ属－エノキ属、ニレ属－ケヤキ属は低率ではあるが出現する。一方草本花粉の割合は、III帯に比べ低くなる。

3) I帯（試料No.3, 2）

アカガシ亜属が卓越し、スギ属を伴う。また、モミ属、マツ属（複維管束亜属）、ヒノキ属、クマシデ属－アサダ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属も低率ではあるが出現する。草本花粉の割合は、II帯と同程度である。

(2) 硅藻分帯

珪藻組成の特徴から、以下のように珪藻帯を設定した。以下に各珪藻帯の特徴を示す。

1) D III帯（試料No.8～5 c）

海水質干潟指標種群の *Diploneis smithii* や *Nitzschia cocconeiformis*、内湾指標種群の *Grammatophora macilenta* などが特徴的に出現する。

2) D II帯（試料No.5 a 2）

海水種の *Navicula yarrensis* が高率で出現し、内湾指標種群の *Grammatophora macilenta* を伴う。

3) D I帯（試料No.5 a 1）

淡水種の *Pinnularia* 属や、*Cymbella* 属が高率になる。

(3) 環境変遷

花粉分析結果および、珪藻分析結果をもとに、各花粉帯毎に島根大学構内遺跡第1次発掘調査地点

(以下では島大遺跡と略)周辺の植生を推定した。

7層中にはK-Ah火山灰層が狭在され、縄文時代早期末～前期初頭に堆積したと考えられる。また出土考古遺物より、8層上面が縄文時代早期末、5層が縄文時代前期初頭～前半、4層下位砂層が縄文時代中期初頭、2層が奈良時代に堆積したと考えられている(島根大学埋蔵文化財調査研究センター、1994,1997)。これらの時代観をもとに各花粉帯の年代を推定した。

1) III、II帯期(縄文時代早期末～前期初頭あるいは前半)

「古穴道灣」沿岸の干潟が広がっていたと考えられる。水辺には、イネ科の草本が繁茂し、自然堤防上には、エノキ、ムクノキ、ケヤキを要素とする河畔林の存在が考えられる。一方II帯期に入ると、島大遺跡あるいは近辺の低地には、スギが生育したと考えられる。

島大遺跡周辺の陸域には、コナラや、クマシデを要素とする落葉樹林の存在が推定されるが、いわゆる「冷温帯落葉樹林」ではなく、暖温帯中の二次林であったと考えられる。

2) I 帯期(奈良時代頃)

3層は無遺物層で堆積時期が不明であり、I帯期の2試料で、数1000年の時代を表している可能性もある。したがって、花粉組成では連続的な試料No3、2に關しても全く別の花粉組成を持つ地層が欠如している可能性もある。しかし、ここでは連続した堆積物と考えて植生を復元する。

前時期で干潟であった場所は海水準の低下と、堆積により沼沢湿地となっていたと考えられる。しかし草本花粉の割合が低く、特にイネ科(40ミクロン以上)の出現率も10%未満である。このことから、I帯期の島大遺跡周辺で水田耕作が行われていた可能性は低い。

また、島大遺跡周辺では、低地にはスギ林が、丘陵にはアカガシ亜属を要素とする照葉樹林が分布していたと考えられる。

まとめ

今回の分析から以下のことが明らかになった。

- (1) 花粉分析結果から、I～III帯の地域花粉帯を設定した。
- (2) 珪藻分析結果から、D I～III帯の地域珪藻帯を設定した。
- (3) 花粉分帯、珪藻分帯とともに、縄文時代早期末から前期頃と奈良時代頃の遺跡周辺の堆積環境および古植生を推定した。

引用文献

- 島根大学埋蔵文化財調査研究センター(1994)島根大学構内遺跡(橋繩手地区)発掘調査概報I.P.44.,島根。
- 島根大学埋蔵文化財調査研究センター(1997)島根大学埋蔵文化財調査研究報告第1冊島根大学構内遺跡第1次調査(橋繩手地区1),島根
- 渡辺正巳(1995a)花粉分析法、考古資料分析法,84,85.ニュー・サイエンス社
- 渡辺正巳(1995b)珪藻分析法、考古資料分析法,86,87.ニュー・サイエンス社

2 地質学的検討からみた橋縄手地区の古環境

中村唯史・徳岡隆夫・三瓶良和・中山勝博（島根大学総合理工学部）

はじめに

1994年の橋縄手地区（図71）の発掘調査では、かつての汀線付近の堆積物中に縄文時代の遺物が含まれることが明らかになり、縄文海進期の海域の広がりや、その海岸付近での人類の活動の一端がうかがわれた（島根大学埋蔵文化財調査研究センター編、1994）。本稿では橋縄手地区の層序・層相の観察と堆積層のイオウ分析にもとづき、遺跡の古環境について述べる。

層序と層相

橋縄手地区1994年度調査区では、風化が著しく進行して粘土化した第三系基盤岩が西から東へ低くなる埋没地形面を構成し、これを覆って完新統が分布する。調査区北東端から5mの地点で行われたボーリングでは基盤が標高-4m以深に分布する。この埋没地形面は調査区の北側の丘陵に開けた谷に連続する埋没谷の一部とみられる。

次に完新統の層序を述べる。埋没地形面を構成する基盤の上部では上方へ向かって漸移的に色調が暗くなり、旧土壤と判断できる。完新統はこの旧土壤面を覆い、下位から平行葉理が発達する泥層（第7層）、中～細礫からなる礫層（第6層）、泥炭質泥層（第5層）、細礫～粗粒砂からなる砂礫層（第4層下位砂層）、褐色塊状の泥層（第4層）、泥炭層（第3層）の順で重なる。泥炭層は近世以降の水田耕作土に覆われる。

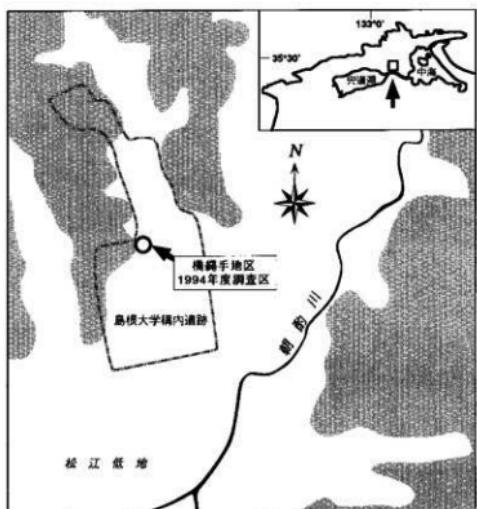


図71 島根大学構内遺跡の周辺地形と調査地点
白抜き部分は沖積低地、アミ掛部分は丘陵

次に各層の層相を述べる。旧土壤面に直接重なる泥層はアシやマコモとみられる水生植物の根や葉などの植物遺体を多く含む部位と泥がちの部位が厚さ1cm以下の平行葉理をなす。また、鬼界アカホヤ（K-Ah）火山灰層（町田・新井、1978）（以下、アカホヤ）が挟まれる。アカホヤは厚さ2cm以下の地層として認められ、-0.5～-0.7mで基盤にぶつかる形で途切れ、これより上では地層として認められない（図72）。礫層は玄武岩に起源する中～細礫からなり、平板状斜交層理が発達し、層理面はN15°～14°E、5°～18°Eを示す。一般に下底側に粗粒の碎屑物が集中し、所々に泥薄層が挟まれる。礫には弱いインプリケーション

ンが認められ、北から南への古流向を示すことから、調査区北側の谷からの河川水流によって形成されたポイントバー堆積物と判断できる（中村・中山、1995）。礫層に重なる褐色塊状の泥層はアシやマコモとみられる水生植物の根や葉などの植物遺体を多く含み、材も多数含まれる。地層の下部に含まれる材にはフナクイムシの生痕を持つものが多い。砂礫層は褐色塊状の泥層下部に挟まれる。泥層の一部に削り面を界して重なり、断面がレンズ型を示すことから小規模なチャネルを埋積するものと判断できる。図73に調査区内の模式柱状図と地層に含まれる上器から推定される堆積時期（島根大学埋蔵文化財調査研究センター編、1994）を示す。

遺物の出土状況

遺物の出土状況は遺物がその地点に定置・埋没したときの状況を示すものであり、それを観察することは遺物を含む地層の堆積時期の決定や跡跡の性格を把握する上で重要である。そこで、橋繩手地区の遺物の産状と、定置・埋没に至る過程について以下に述べる。

橋繩手地区では遺物は基盤岩上面の旧土壤および泥炭質泥層から縄文時代早期末、礫層の上面から縄文時代前期初頭から縄文時代中期初頭、褐色塊状の泥層下位の一部にレンズ状に挟まれる砂礫層から縄文時代前期前半から中期初頭の遺物が出土した。なお、水田耕作土からも出土しているがこれらは現地性でないことは明らかである。

基盤岩上面の旧土壤から泥炭質泥層に含まれる縄文時代早期末の遺物は土器はすべて破片であるが、接合可能なものが比較的多い範囲にある。この層準には遺物を運搬した水流を示す粗粒な堆積物は含まれない。遺物の量は調査区西部の埋没地形の斜面部分に多く、東側では少ない。これらのことから、遺物は人間による放棄や、斜面上から転落によって定置し、埋積されたと考えられる。



図72 橋繩手地区の堆積層

調査区中央部の東西セクションを北側から撮影。アカホヤ（矢印）を挟む泥層に平板状斜交層理が発達した礫層が重なる。礫層より上位は掘削されて失われている。

礫層上面の縄文時代前期初頭から縄文時代前期前半の土器は全て破片であるが、接合可能なものが多く、一部にまとまった形で出土している。これらの遺物は礫層直上の褐色塊状の泥層に含まれるもので、礫層中に含まれるものではない。礫層中にはごく少量のチップ（石器片）が含まれるのみである。このことから人間によって放棄され、その位置から二次的な移動は殆どないままに埋積されたも

のと考えられ、礫層上面は縄文時代前期初頭から縄文時代前期前半の地表面だったと考えられる。

砂礫層中の縄文時代前期前半から中期初頭の遺物は礫の形で含まれていることから、砂礫を供給した河川水流によって運搬され、埋積されたものと考えられる。礫層上面の縄文時代前期初頭から縄文時代前期前半の土器とほぼ同じ場所から縄文時代中期の遺物が出土しているが、これは砂礫層下面に連続する削り面に伴われるものと判断される。

アカホヤ火山灰層

アカホヤは6300年前に降灰した、完新世の代表的な広域火山灰である。島根大学構内遺跡周辺では朝酌川流域の西川津遺跡や原の前遺跡の発掘調査で確認されている（中村、1993；大西ほか、1989）。中村ほか（1996）は中海・宍道湖地域の完新統中に普遍的に挟まれることを明らかにし、アカホヤの分布等深線図を示した。

橋繩手地区ではアカホヤは厚さ2cm以下の地層として平行葉理を示す泥層に挟まれる。一部で薄くなるが、ほぼ連続した地層で、露頭では乳白色である。標高-0.5～0.7mに基盤岩にぶつかる形で途

切れ、これより高い地点では地層として認められない。次に火山灰の特徴を述べる。主に細粒砂サイズの粒子からなり、多量の火山ガラスと極少量の斑晶鉱物からなる。火山ガラスの形態はバブル型が多く、筋状に発泡した軽石型が少量含まれる。実体顕微鏡下での観察では、火山ガラスは褐色を帯び、バブル型ガラスの薄い部分はほとんど無色透明に見えるが、バブルの接合部などの肉厚部分では褐色であることが多い。軽石型ガラスは白色に見える。斑晶鉱物はシソ輝石、普通輝石が含まれる。調査区壁面から直接採取した火山灰試料に含まれる火山ガラスの化学組成を島根大学汽水域研究センターのJEOL8800M型EPMAで分析した値と、アカホヤ既知試料の化学組成を表9に示す。

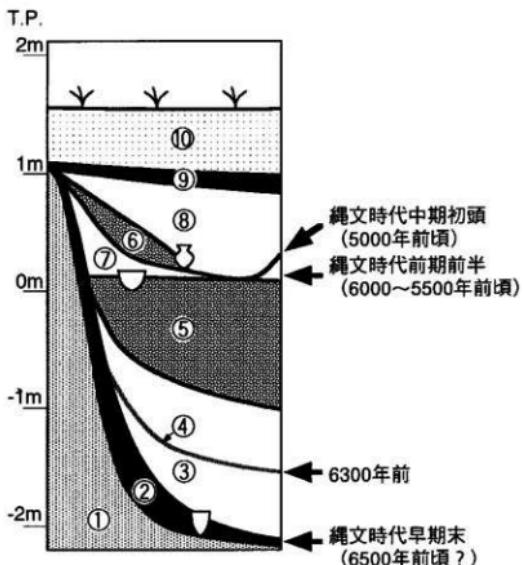


図73 模式柱状図と土器から明らかにされる堆積時期
1：基盤岩 2：泥炭質泥層 3：泥層 4：アカホヤ 5：礫層
6：泥炭質泥層 7：泥層 8：砂礫層 9：泥炭層 10：耕作土と盛土

す。両者の値は一致し、この火山灰層がアカホヤであると確認できる。

遺跡堆積層のイオウ分析

堆積物中の有機炭素はおもに陸源高等植物や動植物プランクトンに由来し、窒素はおもにアミノ酸に由来する。一般に陸上高等植物のC/N比（炭素濃度／窒素濃度）は15以上を示し（例えばHedges et al., 1986）、プランクトンのC/N比は5～6である（Bordoskiy, 1965a,b）。以上のことから堆積物中の炭素・窒素濃度は堆積環境を示す指標とされ、一般に陸域に近い環境ではC/N比が高く、沖方では低くなる。また、有機物が分解される際に酸素が消費されるため、有機物濃度が高い場合は堆積物中が還元的環境になりやすく、次に述べるイオウの固定率が高くなる。堆積物中のイオウ濃度は水域への海水流入の有無を示す指標となる。堆積物中に含まれるイオウの大部分は黄鉄鉱（FeS₂）として含まれるが、これは水中に含まれる硫酸イオンが硫酸還元バクテリアの活動によって硫化水素に還元され、さらに鉄と結びつくことによって生成される。黄鉄鉱の生成量を規制する主な要因は水中の硫酸イオン濃度である。硫酸イオンは海水中には多く含まれるが、淡水では温泉水の流入など特殊な場合を除き、ごく少量しか含まれない。したがって、海水が流入する環境の堆積物ではイオウ濃度が高くなり、淡水の堆積物ではイオウ濃度が低く、0.3%以上含まれることはまれである（Berner, 1984）。以上のことから遺跡堆積層から採取した泥試料について炭素・窒素およびイオウ分析を行った。試料は75°Cで24時間乾燥したあと200メッシュ程度に粉碎し、炭素・窒素については1Nの塩酸で炭酸塩を除去した後ヤナコCHNコーダーMT-3型で分析し、全有機炭素（TOC）、全窒素（TN）を求めた。イオウについてはホリバEMIA-120型硫黄分析装置で分析し、全イオウ（TS）濃度を求めた。分析に供した試料はトレーン壁面からアカホヤを挟む泥層と褐色泥層からそれぞれ鉛直方向に5cm間隔で厚さ1cmずつ採取した。なお、礫層を挟んで上下の泥層から採取した地点は水平方向に約20m離れているが、間に挟まる礫層は連続しているので層位の関係は確かである。次に試料採取地点の層序を述べる。下の泥層の採取地点では-1.2m～-2mに泥層が分布し、-1.5mにアカホヤが挟まる。-2m以下は基盤岩、-1.2m以上は礫層である。上の泥層の採取地点では+0.8m～+0.2mに泥層が分布する。+0.2m以下は礫層、+0.8m以上は泥炭層である。採取試料のうち最上部の1試料は泥炭層から採取した。

表9 橋越手地区採取試料とアカホヤ既知試料に含まれる火山ガラスの化学組成

EPMA wt(%)	HASHINAWATE		K-Ah		
	mean n=10 σ (n-1)		mean n=18 σ (n-1)		
	SiO ₂	74.57	0.93	SiO ₂	74.57
TiO ₂	0.49	0.08	0.55	0.06	
Al ₂ O ₃	12.84	0.20	13.07	0.29	
FeO*	2.57	0.13	2.53	0.21	
MnO	0.08	0.02	0.09	0.03	
MgO	0.48	0.11	0.47	0.07	
CaO	2.00	0.26	2.13	0.19	
Na ₂ O	4.37	0.07	3.53	0.28	
K ₂ O	2.60	0.65	2.83	0.12	
P ₂ O ₅					
Total	100.00		100.00		
ΣAlkali	6.97		6.36		

既知試料の値は町田・新井（1992）に基づく

図74に分析結果を示し、以下にそれについて述べる。礫層より下位の泥層では、有機炭素は5.3～17.0%の範囲で大きく変わり、窒素は0.57～1.25%である。CN比は8.4～14.2の範囲で大きく変化し、有機炭素の増減とよく対応する。イオウは-1.6m以深では最下部の2.3%を除いて3.9～4.6%と高く、-1.6m～-1.3mでは2.1～2.7%である。-1.3m以上では5.4～7.3%のたいへん高い値を示す。このような高い値を示す層準の試料を实体顕微鏡下で観察すると黄鉄鉱の結晶が多量に含まれる。礫層より上の泥層では有機炭素は1.2～7.3%の範囲で上方へ増加する傾向があり、泥炭層では18.38%の高い値を示す。CN比は泥層最下部の8.4から泥炭層の14.2まで上方へほぼ単調に大きくなる。

イオウは2.9~5.4%含まれる。すべての試料においてイオウが2%以上含まれており、泥層は海水が流入する還元的な環境で堆積したと判断できる。礫層より下の泥層ではCN比が増減を繰り返し、降水量の変化や三角州との距離の変化によって陸からの有機物供給量が増減を繰り返していたと考えられる。礫層より上の泥層ではCN比が上方へほぼ単調に増加しており、三角州との距離が近づくことで陸からの有機物供給量が増加したと考えられる。つまり、礫層を挟んで上下の泥層ともに海水が流入する環境で堆積したと考えられ、有機炭素濃度が高く肉眼的にも水生植物の遺体が多量に含まれることから、海岸付近に形成されたアシ原帯から塩水湿地の環境と考えられる。

堆積環境の検討

これまでに述べた、層序・層相とイオウ濃度から推定される堆積環境について述べる。基盤岩が構成する埋没地形面は、最終氷期の低海面期に陸上で形成されたと考えられ、縄文時代早期末の遺物が埋没地形面上部の旧土壤に含まれることから、これらの遺物が埋積したときにはこの地点は陸上だったと考えられる。その後、アカホヤ降灰以前にこの地点まで海が進入し、アシ原帯から塩水湿地の環境に変化した。アカホヤは-0.5~-0.7mで基盤にぶつかる形で途切れることから、それより上は堆積物が残りにくい陸上の環境だったと考えられ、-0.5m付近に当時の海面があったと考えられる。

アカホヤを挟む泥層に重なる礫層は、調査区北側の谷からの河川水流によって形成されたポイントバー堆積物と考えられる（中村・中山、1995）。泥が堆積する環境から礫が堆積する環境へ変化したことはこの地点に及ぶ河川の運搬能力が増大したこと示すもので、その要因のひとつとして海面が低下したことが考えられる。礫層上面では遺構は認められていないが、遺物はその場で放棄されたものと考えされることから、礫層堆積後、その上面は陸上になっていたと考えられる。礫層の上位に再びアシ原帯から塩水湿地成の泥層が重なる。この泥層は少なくとも+0.9mまで連続しており、その高さまで海水の影響が及んだことを示すものである。海水の影響下で堆積した地層の上限は、その地

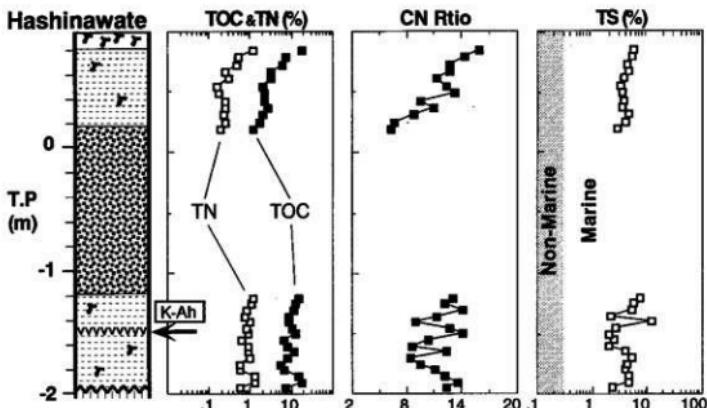


図74 堆積層の有機炭素・窒素濃度およびC/N比とイオウ濃度

層の堆積時の海面を超えないことが普通である。しかし、塩水湿地の場合には普段は海面より高くても、高潮時に海水の流入があればイオウが固定される可能性がある。現在の中海では年間を通じた潮位差が0.6mある。夏季の海面の高さは+0.6m前後で、この高さまで海水の影響が及び得る。これをそのまま当てはめた場合、塩水湿地成の泥層堆積時の海面の高さは現在より少なくとも0.3m高かったと見積もることができる。日本列島では多くの地域で6000～5000年前頃に海面が現在より2～5m程度高かったことが報告されている（太田ほか、1989）。しかし、橋繩手地区の堆積層から見る限りでは以下の理由により海面が現在より2m以上高くなったことは考えにくい。

①高いイオウ濃度を示す褐色塊状の泥層はアシ原帯から塩水湿地の堆積物と考えられる。そのような環境の水深は深くとも1m程度である。

②褐色塊状の泥層の堆積時には単調に三角州の位置が近づいてきていたと考えられ泥層堆積中に海面の上昇があったことは考えにくい。

周辺地域の縄文時代の古地理変遷

縄文時代の橋繩手地区周辺の古地理変遷を図75に示し、これについて以下について述べる。

縄文時代初頭（10000年前頃）

縄文時代早期の遺物は基盤上面の土壤化層に含まれ、これらが放棄された時には橋繩手地区は陸の環境で、海面は現在より低かったことを示す。中海・穴道湖周辺地域では縄文時代早期末より古い時代の遺跡はほとんど知られていないが、その時代の遺跡は現海面よりずっと低いところに埋もれていける可能性がある。

縄文時代早期末（6300年前頃）

すでに述べたように、橋繩手地区ではアシ原帯から塩水湿地の堆積層にアカホヤが挟まる。中村ほか（1996）はアカホヤの面的な分布から、当時存在した松江低地から出雲平野へ東から西へ深くなる古穴道湾（徳岡ほか、1990）の地形を示した。穴道湖の湖底ボーリングではアカホヤより下位で最も外海的要素の強い環境が出現し、2000年前頃まで内湾的環境が続いた（中村・徳岡、1997）。橋繩手地区は古穴道湾の最奥部の汀線付近だった。アカホヤの産状から、この時の海面の高さは-0.5m前後と考えられ、大橋川の河床面はこれより低いことから、古穴道湾と中海側は大橋川が水道となつてつながっていたと考えられる。この時、橋繩手地区はどちらの水域へも舟で簡単に行き来することができ、漁獲や物資の運搬に適した場所だったと推定できる。

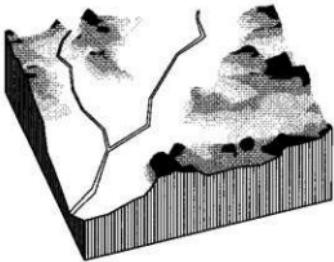
縄文時代前期初頭（6000～5500年前頃）

縄文時代前期初頭には橋繩手地区は三角州の前進によって陸化した。そのときの地表面を構成する礫層は風化が進んだ玄武岩礫からなることから、北側の谷から流れ出る小河川によってもたらされた堆積物と考えられる（中村・中山、1995）。この礫が朝駒川からもたらされた可能性については、朝駒川の堆積層に含まれる礫はその集水域の地質を反映して安山岩、玄武岩、流紋岩、泥岩など（島根県教育委員会編、1995）多様で、明らかに構成礫種が異なることから否定できる。

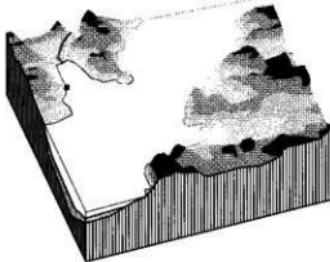
縄文時代中期以降（5000年前以降）

上述のように、縄文時代前期初頭～縄文時代中期初頭の遺物が混在する形で含まれる砂礫層の上位に塩水湿地の堆積物が重なり、縄文時代中期初頭以降に海面の上昇があったと考えられる。塩水湿地堆積層の上限は少なくとも+0.9mに達している。アカホヤ降灰時と最高海面時の海面の高さは1～

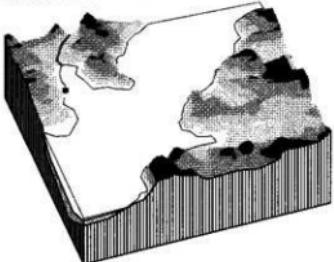
縄文時代初期（10000年前）



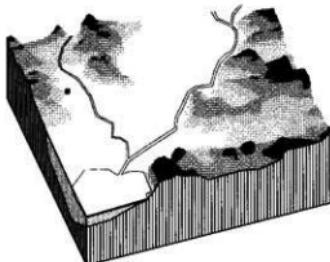
縄文時代中期初期（5000年前）



縄文時代中期末（6300年前）



弥生時代（2000年前）



縄文時代前期初期（6000年前）

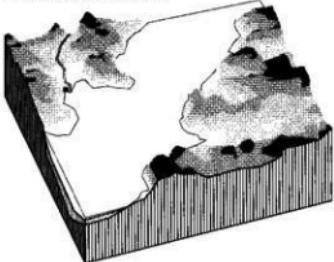


図75 橋繩手地区周辺の古地理図

松江低地を南南西上空から見た様子を地形データを基に立体図として作成した。白抜き部分が海域と河川を示す。黒四角が橋繩手地区。

2 m程度の差があると考えられるが、平面的にみるとアシ原帯～塩水湿地が形成される場は変わっていないことから、海面の上昇と三角州の前進がバランスし、汀線位置はあまり変化しなかったと考えられる。たとえば斐伊川のように碎屑物供給量の多い河川では海面上昇による海進作用を三角州の前進が上回っていたと考えられる。

弥生時代（2000年前頃）

橋繩手地区では縄文時代中期以降の環境を示す証拠は得られておらず、また、中海・宍道湖周辺全体でも縄文時代中期から縄文時代晩期については資料が少ない。弥生時代以降については朝酌川の遺跡から松江低地が拡大したことがうかがわれる（島根県教育委員会編、1995）。また、出雲平野や弓ヶ浜半島においても弥生時代になると沖積低地上に遺跡が急増する。

謝 辞

島根大学総合理工学部の赤坂正秀教授には火山ガラスの化学分析をご指導いただいた。ここに記してお礼申し上げます。

文 献

- Berner R.A, 1984 : Sedimentary pyrite formation, An update *Geochimica Cosmochimica Acta*, 48, 605-615.
- Bordowskij,O.K.,1965a:Source of organic matter in marine basins. *Marine Geology*, 3, 5-31.
- Bordowskij,O.K.,1965b:Accumulation of organic matter in bottom sediments. *Marine Geology*, 3,33-82.
- Hedges,J.I., Clark W.A., Quay,P.D., Richey,J.E., Devol,A.H. & Santos,U de M.,1986:Compositions and fluxes of particulate organic material in the Amazon River. *Limnology and Oceanography*, 31,717-738.
- 町田 洋・新井房夫、1978：南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰。第四紀研究、17, 143-163.
- 町田 洋・新井房夫、1992：火山灰アトラス－日本列島とその周辺。276p.
- 中村唯史、1993：松江市西川津遺跡のアカホヤ火山灰層。島根大学地質学研究報告、12, 67-70.
- 中村唯史・中山勝博、1995：島根大学構内遺跡にみられる側方付加堆積物とそこから推定できる古流速。LAGUNA汽水域研究、2, 29-32.
- 中村唯史・徳岡隆夫・大西郁夫・三瓶良和・高安克己・竹広文明・会下和宏・西尾克己・渡辺正巳、1996：島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡。LAGUNA汽水域研究、3, 9-11.
- 大西郁夫・西田四朗・渡辺正巳、1989：山陰地方中部の第四紀後期火山ガラス。島根大学地質学研究報告、8, 7-16.
- 島根大学埋蔵文化財調査研究センター編、1995：島根大学構内遺跡（橋繩手地区）発掘調査概報 I、44p.
- 島根県教育委員会編、1995：朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告、p198.

第7章 考察

1 遺跡の景観と人類活動変遷の諸段階

調査区は、縄文早期末～中期にかけての旧海岸線に相当している。このため、「縄文海進」による内湾環境の拡大や沿岸及び陸域における生態環境の変化を、ひとつの主導的契機として、遺跡の様相も変遷している。

以下、本調査区における時代ごとの景観や人類活動様相の段階について、第6章での理解に導かれながら、具体的に観ていく。

I期、縄文早期末（第8層上面、第7b～e層）

アカホヤ火山灰降灰直前。海面が、相対的に上昇する「縄文海進」期で、丘陵谷部に水域が進入、泥底の内湾やおぼれ谷が形成された。硫黄濃度分析や珪藻分析の結果、島根大学構内も、丘陵上に立地する教育学部棟を除いて、低地部には海水域が進入、内湾ないし泥質干潟の沿岸部となり、親水度が増した。

花粉分析の結果、該期の植生は、水辺には、イネ科の草本が繁茂し、自然堤防上には、エノキ、ムクノキ、ケヤキを要素とする河畔林が存在していたと想定されている。調査地周辺の陸域には、コナラ、クマシデ等、暖温帯中二次林の落葉樹林が存在していたと想定される。

こうした自然環境に呼応して、縄文、条痕等を有し、胎土に纖維を含んだ「纖維土器」を使用する人々が、遺跡を利用し始める。居住地は、調査区西側の丘陵上方付近であったと推定される。上器は、該期の海岸線付近からまとまって検出されており、不用となったものを波打ち際に廃棄したのだろう。土器の器表からは、煤が顕著に付着しており、煮沸に使用されたことが理解出来る。石器では、スクレーパー、石鎌、磨石、凹石等が出土しており、背後の山地で、狩猟、植物採集などを営んでいたことを伺わせる。これに併行して、内湾水域における漁撈活動が行われたことが、立地環境から想定されるが、これに関わる漁撈具等は具体的に検出されていない。

該期の周辺遺跡としては、菱根遺跡、上長浜貝塚等がある。菱根遺跡からは、ヤスや魚骨等が検出されており、やはり水域との関連で理解出来る遺跡である。

II期、縄文前期初頭～前半（第6層、第5層）

アカホヤ火山灰降灰後。海面が、I期よりも、さらに相対的に上昇した後、前期初頭段階で、一時的に停滞ないし小海退する¹⁰。この時期、調査区一帯は、付近を流れる河川の沖積作用によって、風化した玄武岩からなる砂礫層（第6層）が、約1.4mの厚さで堆積する。この砂礫層（第6層）上面から、前期初頭「轟B式」土器等が、プライマリーな状態で検出されており、該期の調査区内は陸地化していたか、水深が、膝程度までしかない、遠浅の水域であったと想定される。また、珪藻分析の結果では、前期初頭ないし前半の一時期に、淡水種が高率になることから、調査区周辺で河川淡水の影響が強まつたことが推定される。

こうした海面上昇の鈍化や停滞、下降は、沖積作用の進行を顕著にし、水域の浅海化、砂底、砂泥底化の促進につながったと考えられ、生態系や水産資源に対しても一定の影響を与えたことが予想さ

れる。推測の域を出ないものの、海面上昇が、一時的にしろ鈍化、停滞する現象が、周辺自然環境における生産領域を一定期間、安定化させ、集団の定住化を促すことにつながったのではないかろうか。「古穴道湾」沿岸地域において、早期押型文段階の遺跡が確認されず²²、特に、早期末から前期の遺跡が、相対的に顕著に存在する一要因として、こうした理由を、一仮説として考慮しておきたい。今後、前期初頭段階における海面上昇の一時的停滞、下降と遺跡形成との相関について、周辺遺跡においても一般化出来るか検証していく必要がある。

該期における山陰地域の土器様相は、近隣の西川津遺跡にみられる様に、隆帶文、条痕文、刺突文、押引文、沈線文、貝殻腹縁文等、多様なものを包括した土器群が展開する。これらは、器形や文様の属性から、九州「轟B式」や近畿地域土器との関連で把握出来るものであり、該期の交流の姿が想定されている。とりわけ、「轟B式」のうち、屈曲型器形を有するものは、海洋を介して広範囲の分布がみられ²³、本遺跡における「轟B式」系土器の出土も、日本海を介した地域間交流という該期の状況を反映したものとして理解出来よう。

該期における他地域の状況に眼を向けると、南九州地域では、アカホヤ火山灰降灰によって、人類、植生が完全に壊滅し、「塞ノ神式」期の文化が消滅、断絶した後、「轟式」「曾畠式」土器が到来したと予測されている²⁴。また、東海地域西部や琵琶湖岸においても、早期後葉に盛行した遺跡群が、早期末の「石山式」ないし「天神山式」段階で貝塚形成を終え、廃絶する現象の要因について、アカホヤ火山灰降灰による水産資源の衰退、枯渇にあったとする仮説がある²⁵。一方、北部九州地域、「古遠賀湾」、「古洞海湾」周辺では、繩文早期末～前期初頭の段階から、貝塚の形成が始まることが知られている。北部九州と同様に、山陰地域の場合でも、早期末から前期にかけて遺跡、貝塚が形成され、むしろ前期に至って遺跡数が増加していること等から、本地域では、アカホヤ火山灰降灰による環境への影響を考える必要はなさそうである。

花粉分析の結果では、該期の植生は、アカホヤ火山灰降灰前のⅠ期と顕著な差は認められない。また、前期初頭～前半には、調査区周辺の低地で、スギが生育していたことが推定されている。

調査区西側に堆積した腐植上層（第5層）からは、前期初頭～前半の丸木舟が出土しており、当時の生活様式に占める親水度の高さを直接的に傍証する考古遺物といえる。出土状態からみて、当時の汀線付近に遭棄されたか、座礁した後、埋没したと想定される。形状は、横断面の湾曲がほとんどないことから、外洋（日本海）向きではなく、波のほとんどない内湾静水域を舞台に、漁撈活動、交易、運搬等の水上航行に使用されたと考えられる。本丸木舟は、スギ丸太板目材製で、花粉分析で想定した調査区周辺の低地に生息していたものを原材にしている可能性がある。また、スギは、真直ぐに割れやすく、板材に加工することが容易である特性をもつことから、選択的に原材として採用したことかが推定出来る。

出土した石器では、スクレーパー、石匙、石錐、磨製石斧等があり、Ⅰ期と同様、狩猟、漁撈、採集活動を複合的に営む生業が行われたとみられる。具体的な獲得対象物の詳細については、オニグルミが数点出土しているほかは、動物遺存体の出土が皆無であったため不明である。

該期の周辺遺跡としては、多数あるが、西川津遺跡、佐太講武貝塚等が著名で、漁撈具、動物遺存体等も多く検出されている。漁撈具では、偏平な河原石を打ち欠いて作った石錐や骨角製のヤスが挙げられ、「古穴道湾」を舞台とした「内湾性漁業」が主要的位置を占めていたことが想定される。

Ⅲ期、縄文中期初頭以降（第4層）

II期の後、相対的に海面が上昇する。海面最高頂の時期は、早くとも中期初頭頃以降と想定される。中期における海進の痕跡は、他地域では一般的でないが、例えば、北部九州地域では、縄文海進最高頂期に形成された自然貝層がアカホヤ火山灰層の上層より検出されていることから、海面最高頂期が火山灰降灰後、具体的には約4700年前であったと推定されている^①。

この時期の出土遺物は、顕著でなく、調査区における人類活動は、低調であった。宍道湖、中海沿岸部では、中期前半～末の遺跡が比較的希薄で、日久美遺跡等、中海南岸の一部にしか存在していないことが特徴的であるが、この一要因を該期の海面上昇による急速な沿岸部生態系の変化に求めることが出来ないだろうか。この点についても、今後の課題である。

IV期、～奈良時代頃（第3層、第2層）

中期初頭以降の海進がピークに達し、停滞した後、海退に転じる。調査区内の水域は、海退と堆積で徐々に浅くなり、やがて葦が繁る湿地になっていった（第3層）。調査区周辺では、低地にスギ林が、丘陵には、アカガシ亞属を要素とする照葉樹林が分布していたと推定される。

この時期、調査区における人類活動は認められず、花粉分析の結果から、弥生～奈良時代における稻作農耕活動が存在した可能性は低いと考えられている。しかし、近隣の調査区からは、縄文晩期や弥生中期の遺物が出土しており、朝駒川流域の西川津遺跡やタテチヨウ遺跡では、貝塚や多量の木製農耕具等が検出されていることから、縄文晩期ないし弥生時代以降、周辺地域では活発な人類活動が行われていたと想定出来る。

以上、本次調査区における自然環境、人類活動の様相について、現段階で明らかになったことを要約的にまとめた。

このうち、海面変動に伴う沿岸部生産領域の地形や植生、水産資源の変化が遺跡の形成、消滅に与えた影響について注意しておくべきで、早期末～前期の遺跡形成や中期の希薄性がこれらと相關を有している可能性について指摘しておきたい。

上記の様相は、一調査区の成果にすぎず、今後の継続的かつ学際的、総合的な調査研究によって、追認、検証を重ね、厳密性を高めていく必要がある。また、こうした成果が、周辺地域の遺跡に対して一般化出来るか、地域性として抽出出来るものは何かについても、資料の蓄積を進めて、比較研究することが課題である。

注

- (1) 中山勝博「島根大学構内遺跡にみられる側方付加堆積物」『島根大学構内遺跡（橋繩手地区）発掘調査概報Ⅰ』1995年
- (2) 「押型文」期の遺跡も、地中深くに埋没している可能性はあるが、現在までのところ発見されていない。
- (3) 李相均「縄文前期前半期における轟B式土器群の様相」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』12、1994年
- (4) 新東晃一「火山灰からみた南九州縄文草・前期土器の様相」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』1980年
- (5) 山下勝年「東海地方西部におけるアカホヤ火山灰降下の影響とその時期」『知多古文化研究』3、1987年
- (6) 下山正一「第5章 自然遺物」『北九州市埋蔵文化財調査報告書第69集 椿橋貝塚』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室、1988年

2 丸木舟について

宍道湖、中海沿岸部の縄文遺跡は、漁撈活動や隠岐島産黒曜石の出土にみる水上交通の痕跡等から、水域との緊密な関連が想定されてきた。こうしたことから、該期における丸木舟の存在が予測されていたが、本遺跡において実物が出土したことで、これが実証された。ただし、本丸木舟は、形状からみて、外洋（日本海）向きではなく、波の静かな「古宍道湾」を舞台に、「内湾性漁撈」や遺跡間での物資運搬に使用されたと推定している。

本地域と丸木舟は関わりが深く、現在、中海には、ソリコブネ、モロタブネと呼ばれる、伝統的な準構造の刳舟が残存している^①。ソリコブネは、スギないしモミを用い、割竹型丸木舟（オモキ）の舟首先や舷側上部にツラ板、タナブチ等の部材を装着したもので、薪炭、竹木、肥料等の物資運搬や赤貝捕りに使用されていた。モロタブネは、オモキの舟首先や舷側上部にツラ板、ワダナ等の部材を装着したもので、美保神社「諸手船神事」専用に使用される。

参考程度だが、18世紀後半の『大根島萬指出帳』によれば、中海の大根島村落、家族数に占める船の所有は、2～3家族に1艘の割合となっており、同時期の中海沿岸村落の多くも、ほぼ、これに類似するものだったと推定されている^②。

すなわち、こうした民俗学的な記録等から、本地域の生活様式に占める水域での諸活動が重要な位置を占めていたと理解出来る。江戸時代のこうした状況を、縄文前期の様相と単純に比較することは出来ないが、遺跡の水親的性格を考慮すると、該期の生産活動の中で、丸木舟が看過出来ない位置を占めていたに違いなく、今後、近隣調査地から同様の資料が出土することも充分、予測される。

表10は、既出の縄文時代丸木舟一覧で、本遺跡出土のものは、この中で最古級の位置を占める資料である。日本海側における縄文前期は、漁撈活動や海洋を介した地域間交流が本格的に展開する時期として認識してきた。丸木舟は、水域を舞台としたこれらの諸活動を具体的に行う手段として不可欠な道具であり、縄文前期における文化、生活様式の展開と特性を端的に物語る格好の物証として明記出来る重要な遺物である。

注

(1) 石塚尊俊『鍼と刳舟』慶友社、1996年

(2) (1)と同じ。

その他の参考文献

富山考古学会縄文時代研究グループ『縄文時代の木の文化』真陽社、1989年

福井県島浜貝塚資料館『いま甦る丸木舟』1985年

川崎晃稔『日本丸木舟の研究』法政大学出版局、1991年

表の文献

- 1、本書第5章3(1)を参照のこと。
- 2、同志社大学文学部文化学科『伊木力遺跡－長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査』1990年
- 3、三田史学会『加茂遺跡－千葉県加茂郡木舟出土遺跡の研究』1952年

表10、縄文時代の丸木舟一覧表

No	都道府県	遺跡	資料名	樹種	時期
1	島根県	島根大学構内遺跡（橋繩手地区）	丸木舟	スギ	前期初頭～前半
2	長崎県	伊木力遺跡	丸木舟	センダン	前期中葉
3	千葉県	加茂遺跡	独木舟	ムクノキ	前
4	神奈川県	伝福寺裏遺跡	丸木舟	イヌガヤ	前期後半
5	福井県	鳥浜貝塚	丸木舟第1号	スギ	前期後半
6	東京都	中里遺跡	独木舟	ムクノキ	中期初頭
7	栃木県	西山田遺跡	独木舟	ハルニレorアキニレ	後
8	千葉県	宮田下遺跡	丸木舟		後
9	千葉県	臼新田	丸木舟		後
10	千葉県	高谷川B遺跡	丸木舟		後
11	千葉県	千葉市畠町	丸木舟（第1号）	カヤ	後
12		千葉市畠町	丸木舟（第2号）	カヤ	後
13		千葉市畠町	丸木舟（第3号）	カヤ	後
14	千葉県	米倉大塙	丸木舟	カヤ	後
15	千葉県	矢摺泥炭層遺跡	丸木舟	クリ	後
16	福井県	鳥浜貝塚	丸木舟第2号	スギ	後
17	岐阜県	末福遺跡	丸木舟1号	クス？	後
18		末福遺跡	丸木舟2号		後
19	滋賀県	元水茎遺跡	丸木舟1号		後
20		元水茎遺跡	丸木舟2号		後
21		元水茎遺跡	丸木舟3号		後
22		元水茎遺跡	丸木舟4号		後
23		元水茎遺跡	丸木舟5号		後
24		元水茎遺跡	丸木舟6号		後
25		元水茎遺跡	丸木舟7号		後
26	京都府	和束川底遺跡	丸木舟		後
27	鳥取県	桂見遺跡	丸木舟		後
28		桂見遺跡	丸木舟		後
29	埼玉県	伊奈氏屋敷跡	丸木舟1号	ケヤキ	後期末～晚期前葉
30		伊奈氏屋敷跡	丸木舟2号	カヤ	後期末～晚期前葉
31	埼玉県	膝子遺跡	丸木舟1号	クリ	後晩
32		膝子遺跡	丸木舟2号	クリ	後晩
33	埼玉県	老袋遺跡	丸木舟	カヤ	後晩
34	鳥取県	島遺跡	丸木舟		後期末～晚期初頭
35	滋賀県	松原内湖遺跡	丸木舟10隻		晩
36	滋賀県	大津市錦織	丸木舟	カシ	晩
37	滋賀県	長命寺遺跡	丸木舟2隻		晩
38	京都府	東土川遺跡	丸木舟		晩
39	島根県	佐太講武貝塚	丸木舟		晩

- 4、赤星直忠・大塚真弘「横須賀市久里浜伝福寺裏遺跡の調査」『第6回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
1982年
- 5、福井県教育委員会『鳥浜貝塚－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査3－』1983年
- 6、東北新幹線中里遺跡調査会『中里遺跡－発掘調査の概要II－』1985年
- 7、大平町教育委員会『独木舟 桜木県下都賀郡大平町西山田出土』1984年
- 9、清水潤三「日本古代の船」「日本古代文化の探求 船」社会思想社、1975年
- 10、9と同じ。
- 11、9と同じ。
- 12、9と同じ。
- 13、9と同じ。
- 14、9と同じ。
- 15、倍当川遺跡調査会『八日市場市矢摺泥炭遺跡発掘調査報告－丸木舟の調査－』1984年
- 16、5と同じ。
- 17、紅村弘『東海の先史遺跡』総括編、1963年
- 18、17と同じ。
- 19、滋賀県教育委員会『近江八幡市・元水墓町遺跡調査概要』1966年
- 20、19と同じ。
- 21、19と同じ。
- 22、19と同じ。
- 23、19と同じ。
- 24、19と同じ。
- 25、19と同じ。
- 26、辻尾栄一「古代なにわ刳舟の考察」「郵政考古紀要」IV、1981年
- 27、鳥取県教育文化財団『丸木舟一般公開資料』1996年
- 28、27と同じ。
- 29、埼玉県埋蔵文化財調査事業団『東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書II－赤羽・伊奈氏屋敷跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第31集、1984年
- 30、29と同じ。
- 31、埼玉県「膝子遺跡」「新編埼玉県史」資料編1、1980年
- 32、31と同じ。
- 33、9と同じ。
- 34、北条町教育委員会『鳥取県東伯郡北条町島遺跡発掘調査報告書 第1集』1983年
- 35、福岡市立歴史資料館『古代の船－いま甦る海へのメッセージ』福岡市立歴史資料館図録第12集、1988年
- 37、滋賀県教育委員会『長命寺湖底遺跡発掘調査概要』1984年
- 38、26と同じ。
- 39、赤澤秀則氏に御教示頂いた。

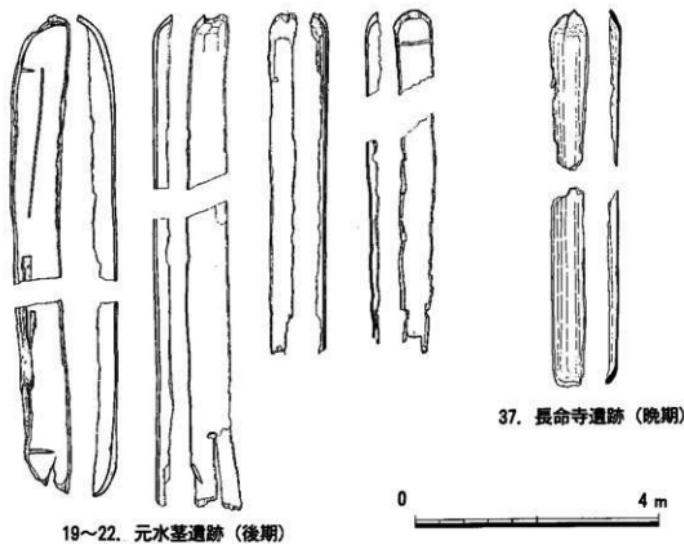
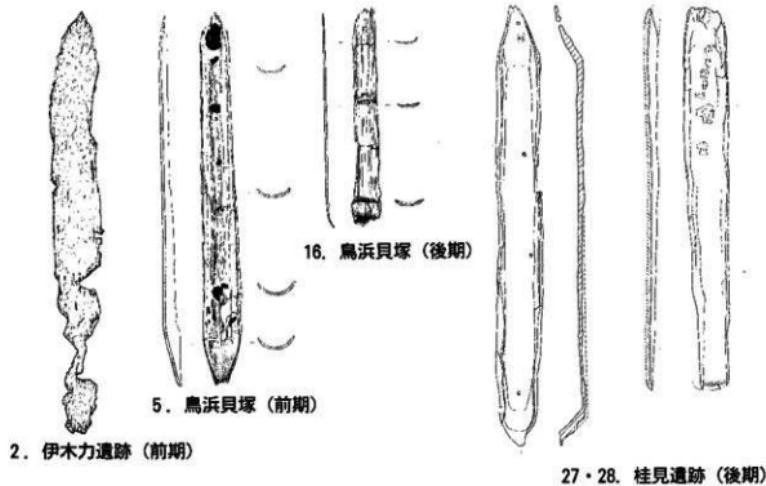


図76 繩文時代の丸木舟

(各文献より転載)

第8章 まとめ

島根大学構内遺跡は、從来、その様相が未解明で、組織的な発掘調査が、本次、初めて実施された。その結果、当調査区は、縄文早期末～前期を主体として、いわゆる古宍道湾北東最奥部沿岸に生成、展開した初現期低湿地遺跡であることが判明した。

また、低湿地遺跡の特性から、アカホヤ火山灰層、有機質遺物、花粉・珪藻化石群集等が良好な状態で残存しており、これらの総合的、学際的な解析によって、該期の古環境変遷の復元が可能となった。

縄文早期末～前期は、「古宍道湾」、「古中南海湾」の縁辺において最初に遺跡の成立をみる時期であり、地域史の叙述における第一の画期として認識されてきた。これらの成立基盤については、遺跡の立地や漁撈活動の痕跡、丸木舟の出土からみて、水域との関連で理解してよい。また、自然史からみた当該期も、アカホヤ火山灰の降灰や、「縄文海進」、照葉樹林帯の北進等、後水期における一画期として注目されてきた。当地域における遺跡の展開が、こうした自然環境の変遷とどの様な相関を有するのか、重要な解明課題であり、本遺跡における調査研究成果は、ひとつのケーススタディーとして、これらの解明に寄与するものと考えている。

從来、縄文時代における低湿地遺跡の調査研究は、東日本の埼玉県「寿能泥炭層遺跡」を始め、近畿の滋賀県「栗津湖底貝塚」、日本海側の福井県「鳥浜貝塚」、北西九州の長崎県「伊木力遺跡」等が著名で、該期の人類活動を生態系との関連から捉える上で、有益な実績をあげてきた。山陰地域においては、近隣の「西川津遺跡」や鳥取県「日久美遺跡」、「陰田遺跡」等が著名である。本遺跡の調査研究は、山陰地域沿岸部におけるこうした先行研究に新たな資料を加え、各地域遺跡の個別資料を繋ぐ役割を果たす。今後、こうした成果を相対化し、文化内容や自然環境の共時的な様相、その変遷過程を統括的に明らかにしていくことによって、縄文時代史の地域的、広域的な展開と特性について再構築することが可能になると課題認識している。

注

- (1) 埼玉県教育委員会『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』1982年
- (2) 滋賀県教育委員会ほか『栗津貝塚湖底遺跡』1984年
- (3) 福井県教育委員会『鳥浜貝塚 縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1～6』1979～1987年
福井県立若狭歴史民俗資料館『鳥浜貝塚研究 1』1996年
- (4) 同志社大学文学部文化学科『伊木力遺跡 長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査』1990年
- (5) 島根県教育委員会『朝酰川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書 I・III・V』1980・1987・1989年
- (6) 米子市教育委員会ほか『加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日久美遺跡』1986年
- (7) 米子市教育委員会ほか『一般国道9号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 陰田』1984年



1. 「大歳山式」土器出土状態



2. 「第5層上面・第6層上面」全景（南から）



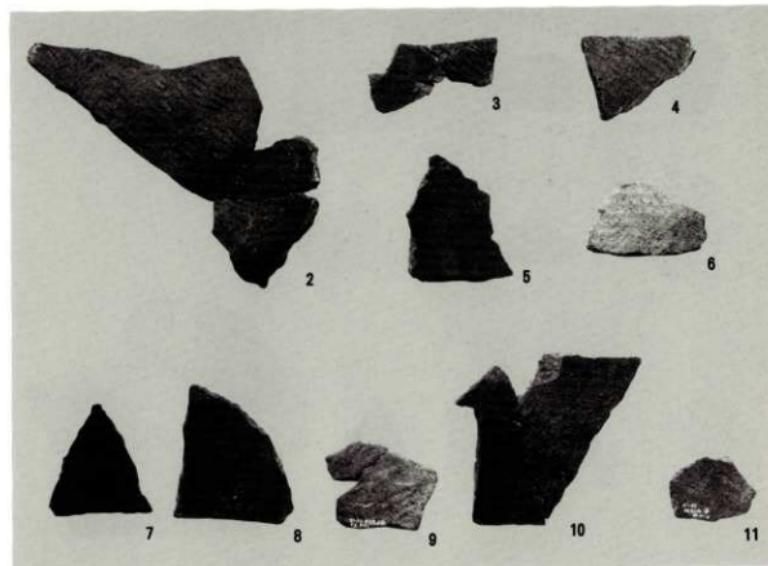
1. 「第8層上面」全景（東から）



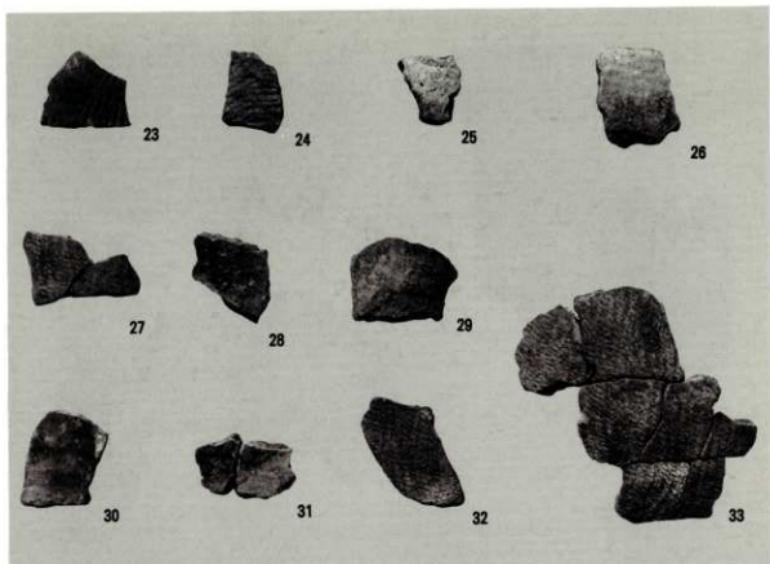
2. 「第8層上面」全景（南から）



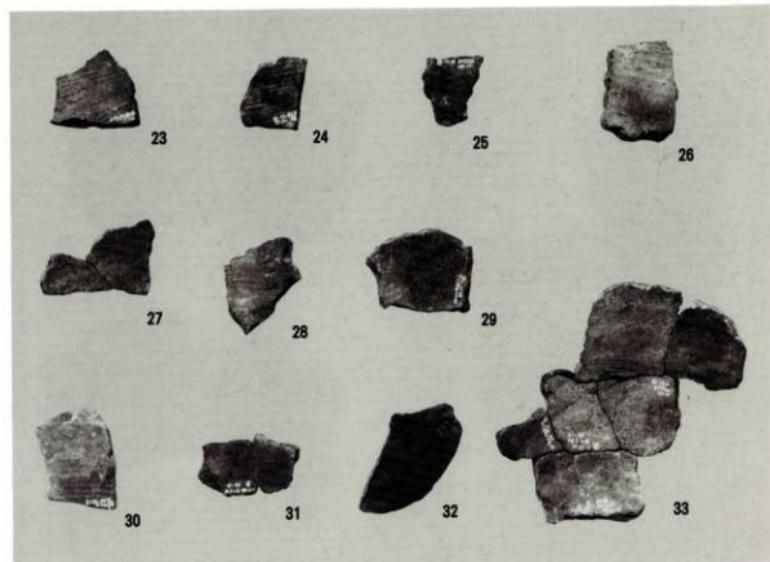
1. 「第8層上面」出土土器（1 A類、1／3、外面）



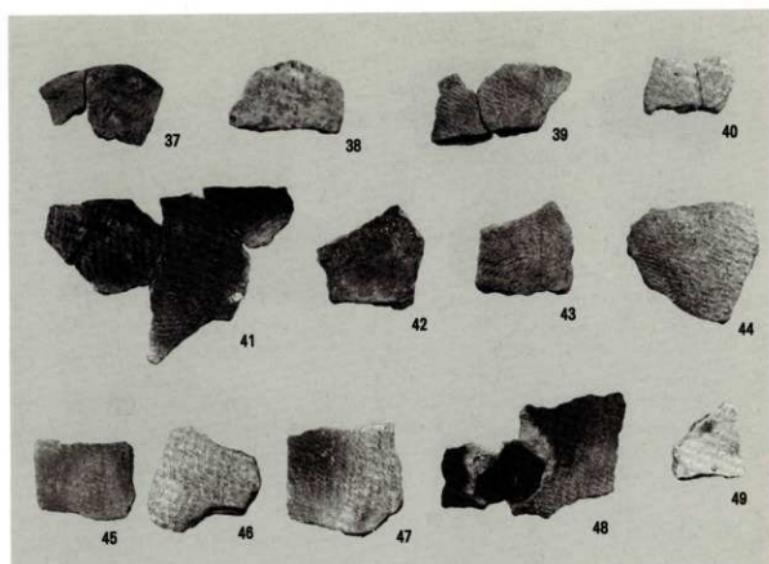
2. 「第8層上面」出土土器（1 A類、1／3、内面）



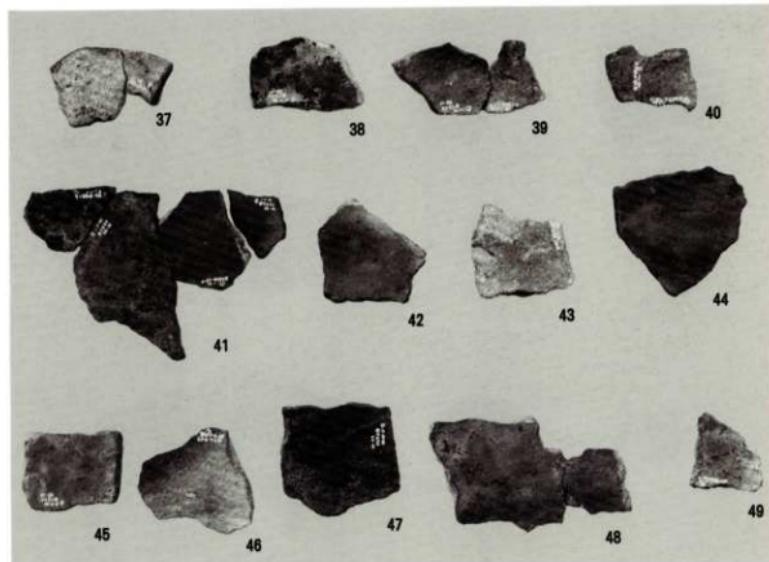
1. 「第8層上面」出土土器（1B類、1／3、外面）



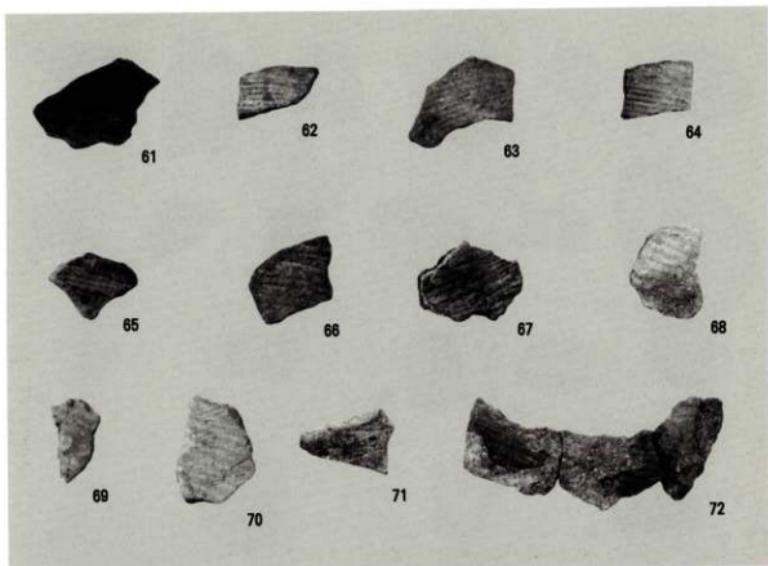
2. 「第8層上面」出土土器（1B類、1／3、内面）



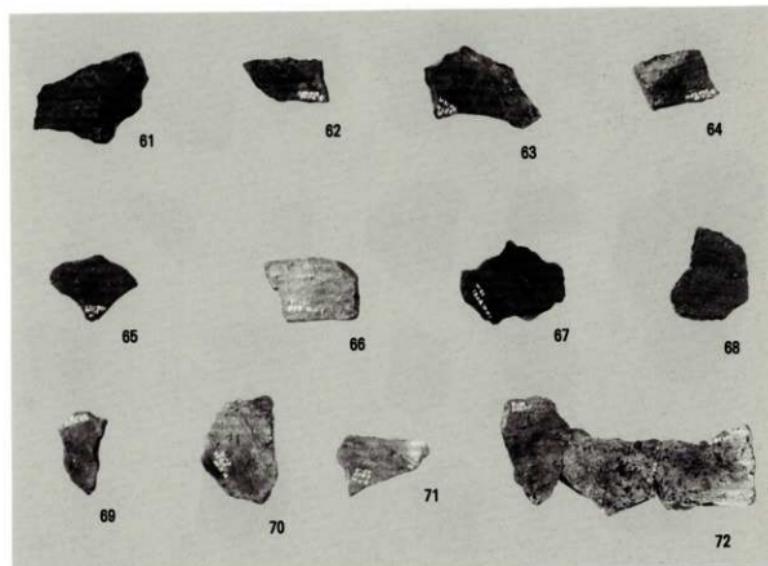
1. 「第8層上面」出土土器（1C類、1／3、外面）



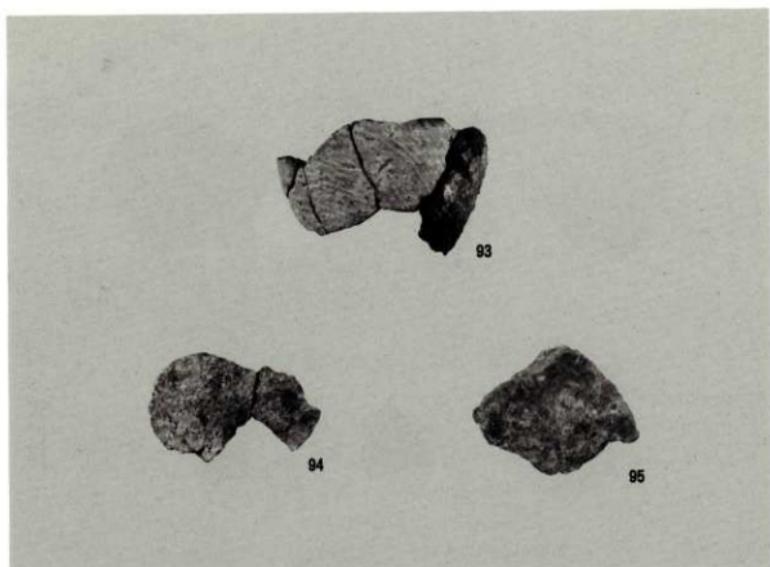
2. 「第8層上面」出土土器（1C類、1／3、内面）



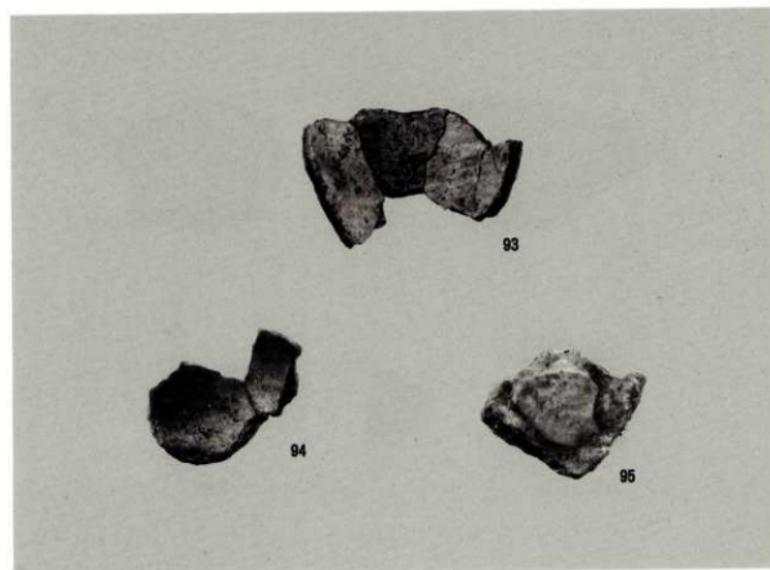
1. 「第8層上面」出土土器（1D類、1／3、外面）



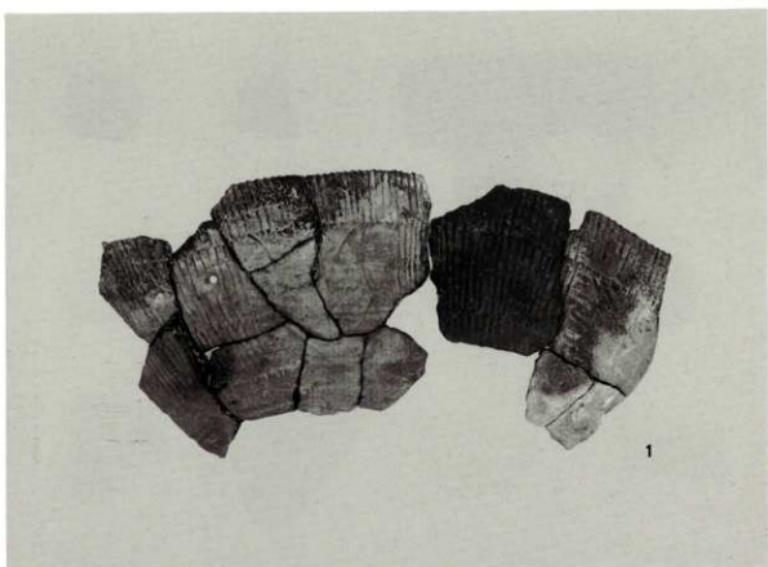
2. 「第8層上面」出土土器（1D類、1／3、内面）



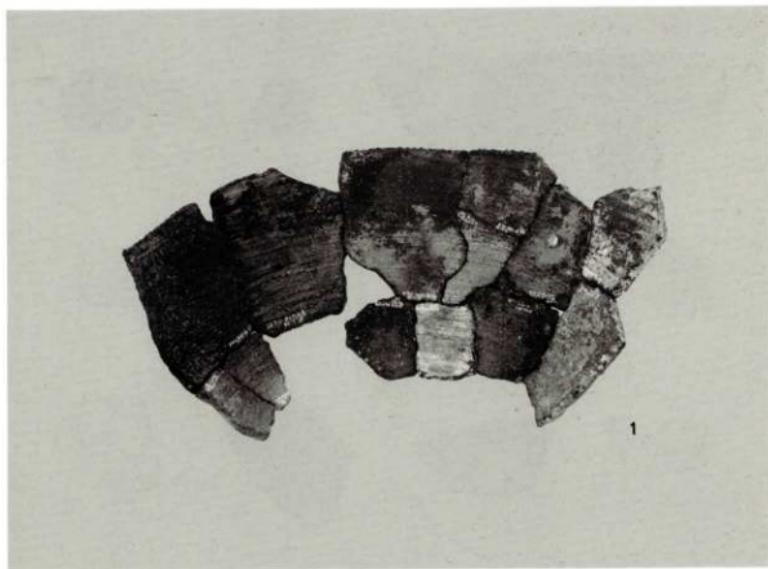
1. 「第8層上面」出土土器（底部、1／3、外面）



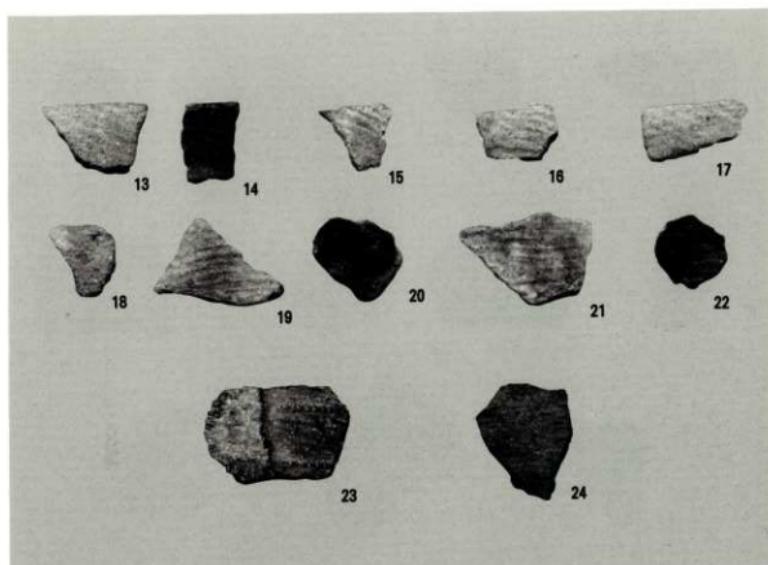
2. 「第8層上面」出土土器（底部、1／3、外面）



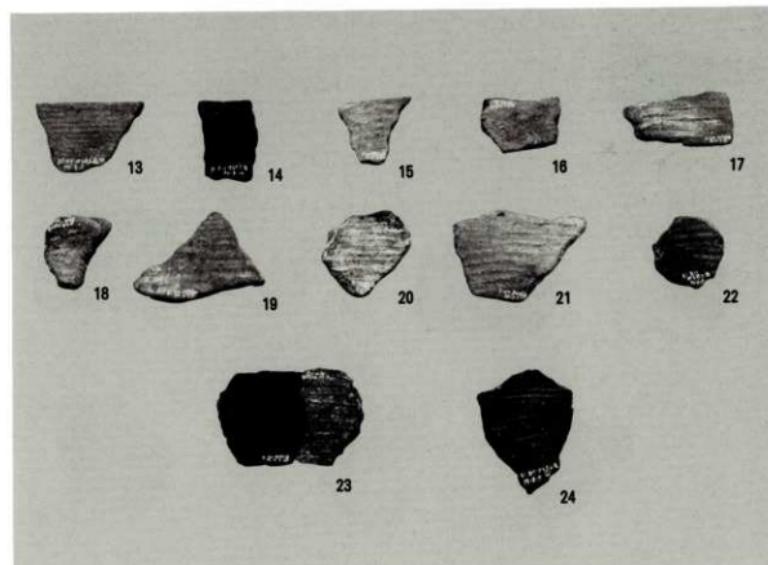
1. 「第5層上面・第6層上面」出土土器（3類、1／3、外面）



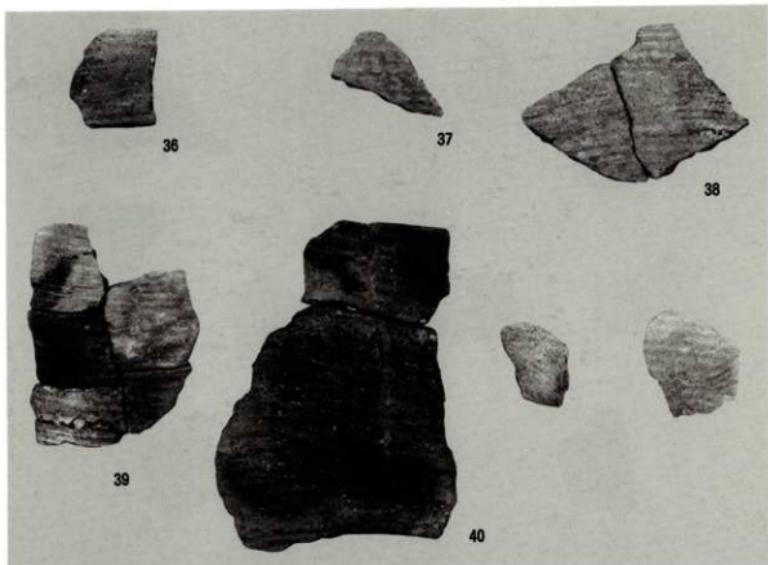
2. 「第5層上面・第6層上面」出土土器（3類、1／3、内面）



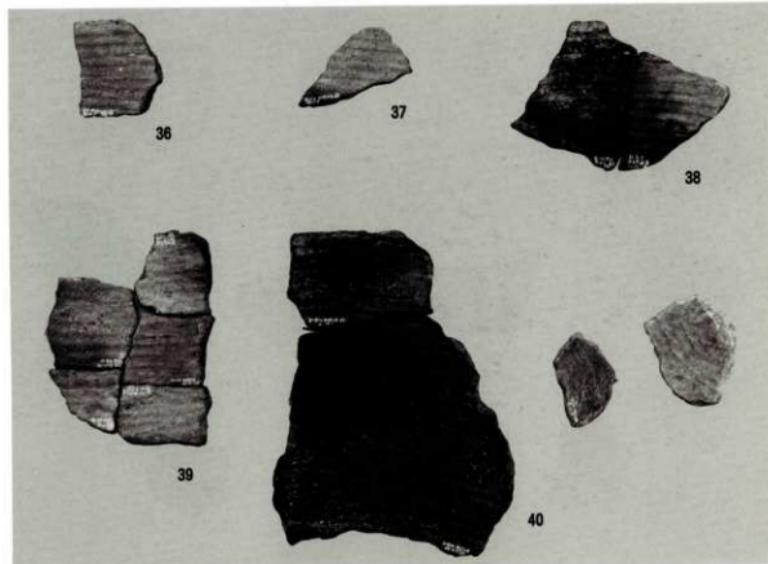
1. 「第5層上面・第6層上面」出土土器（3類、1／3、外面）



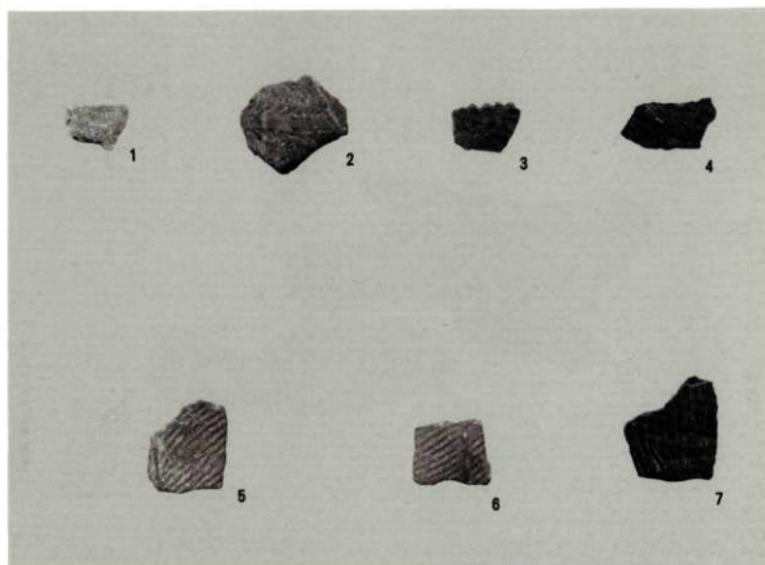
2. 「第5層上面・第6層上面」出土土器（3類、1／3、内面）



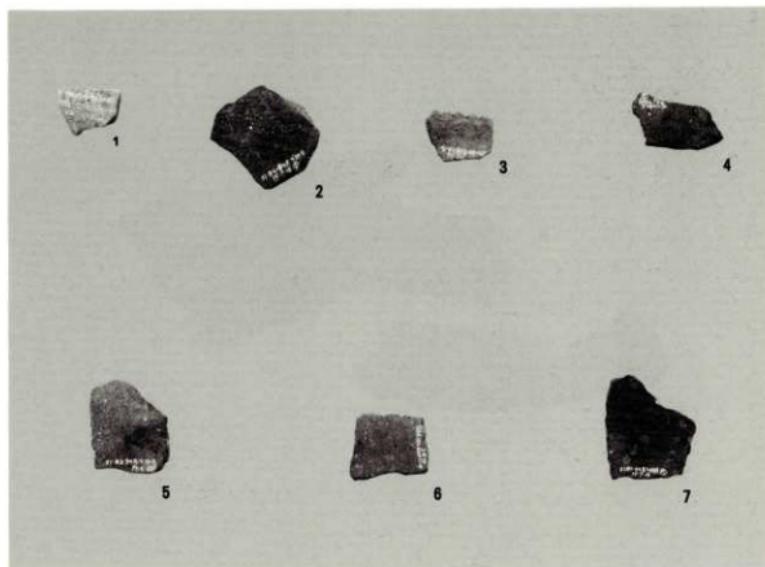
1. 「第5層上面・第6層上面」出土土器（3類、1／3、外面）



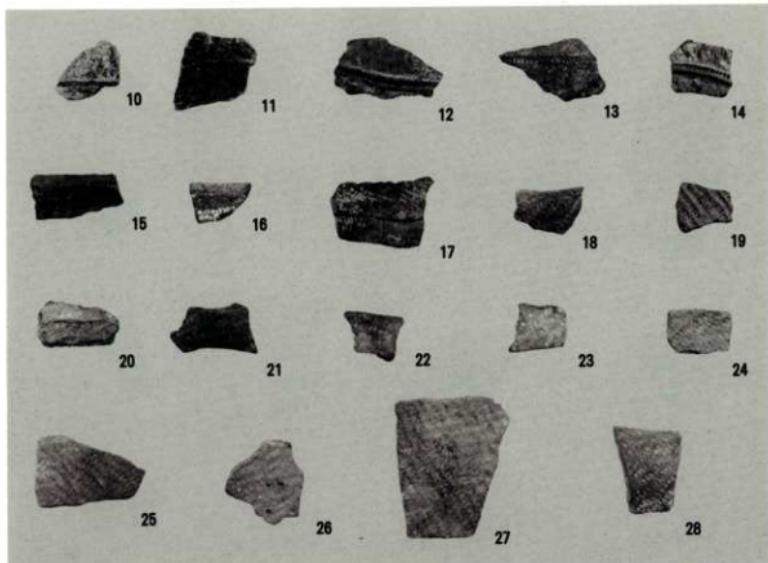
2. 「第5層上面・第6層上面」出土土器（3類、1／3、内面）



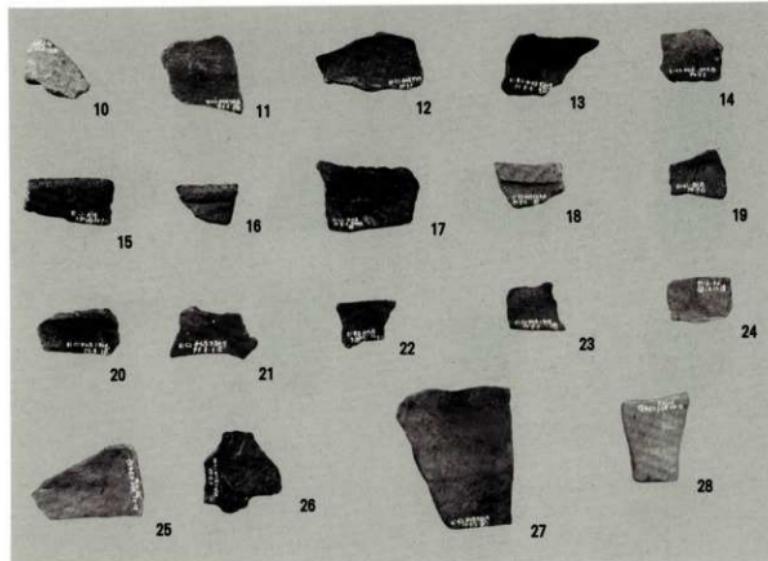
1. 「第4層下位砂層」出土土器（3・6・7・8類、1／3、外面）



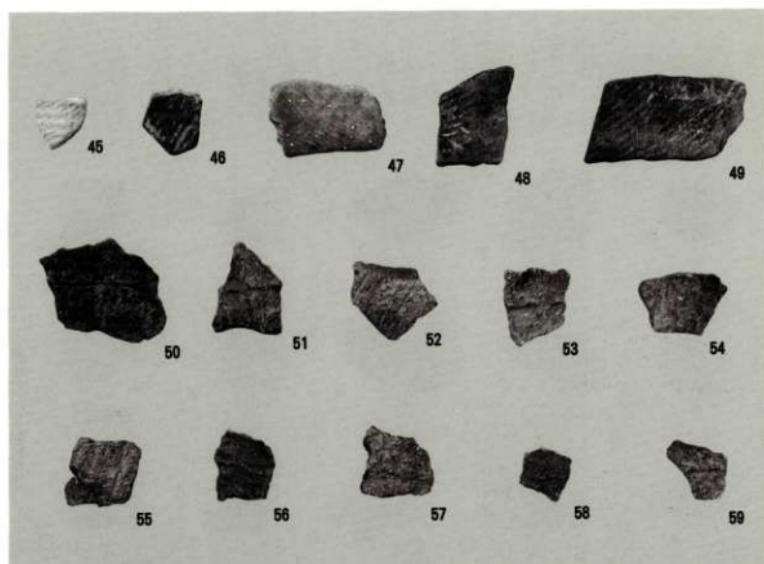
2. 「第4層下位砂層」出土土器（3・6・7・8類、1／3、内面）



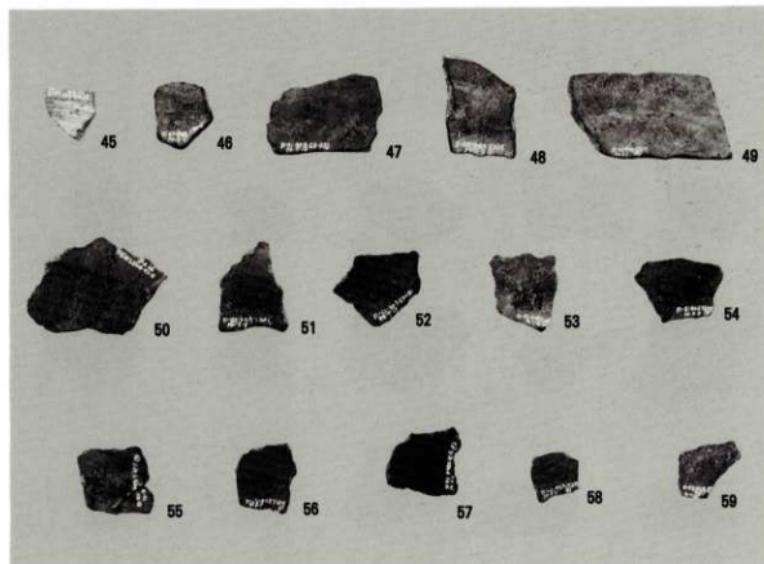
1. 「第4層下位砂層」出土土器（9A・9B・10A類、1／3、外面）



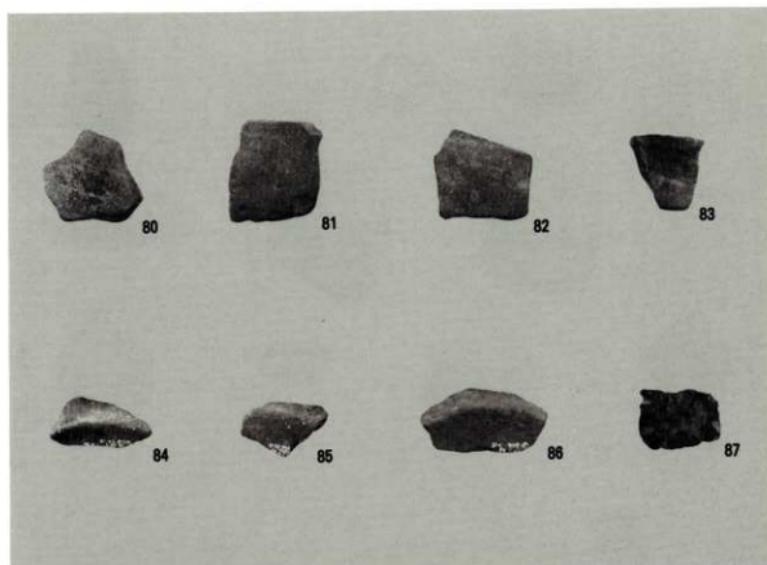
2. 「第4層下位砂層」出土土器（9A・9B・10A類、1／3、内面）



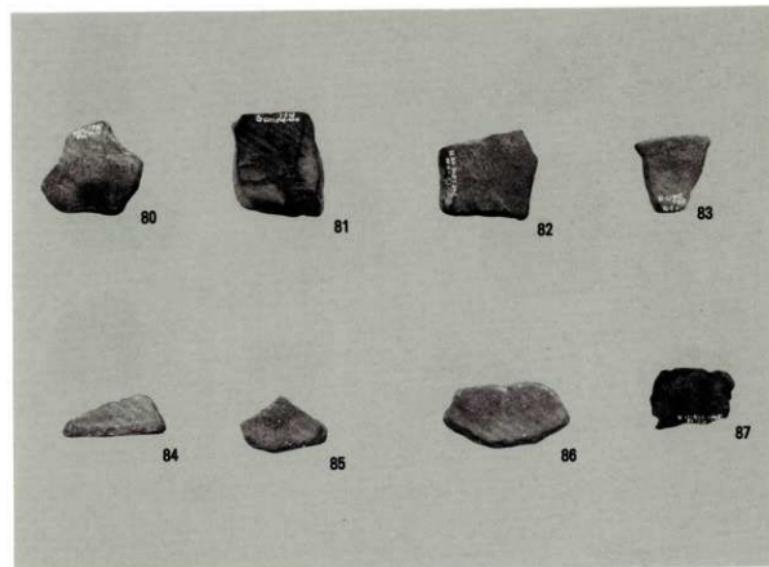
1. 「第4層下位砂層」出土土器（10B・11類、1／3、外面）



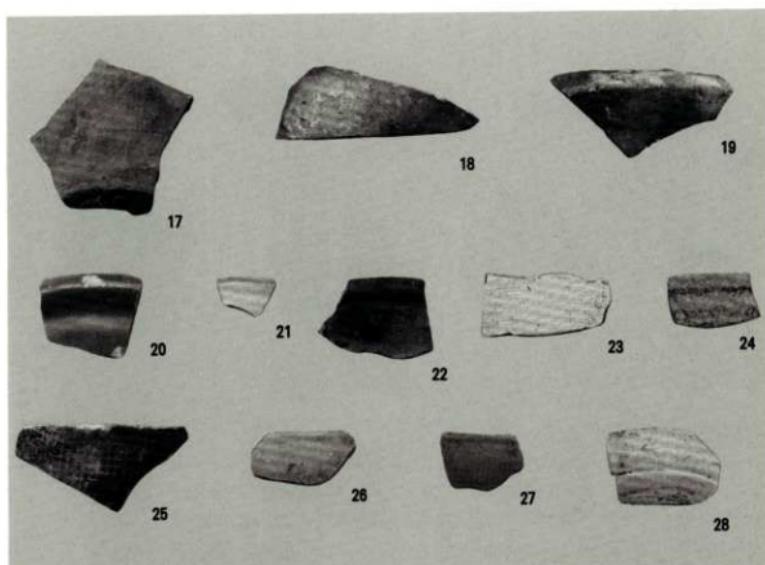
2. 「第4層下位砂層」出土土器（10B・11類、1／3、内面）



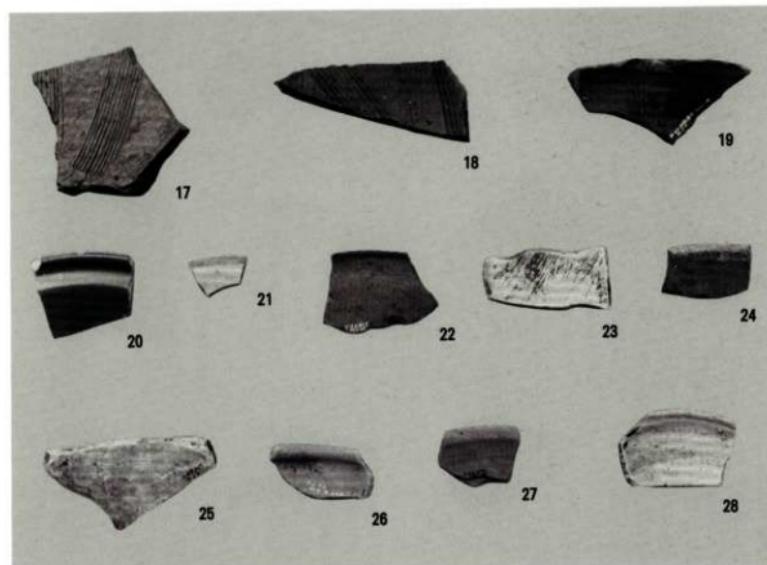
1. 「第4層下位砂層」出土土器（13類・底部、1／3、外面）



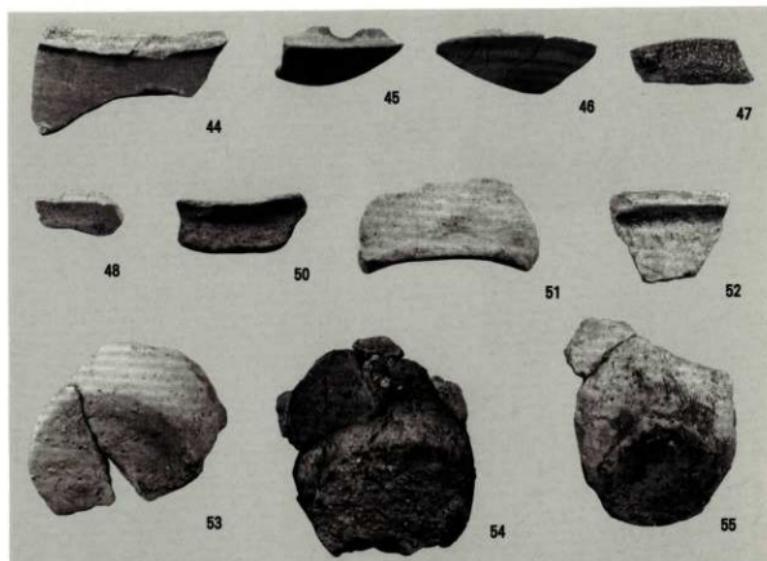
2. 「第4層下位砂層」出土土器（13類・底部、1／3、内面）



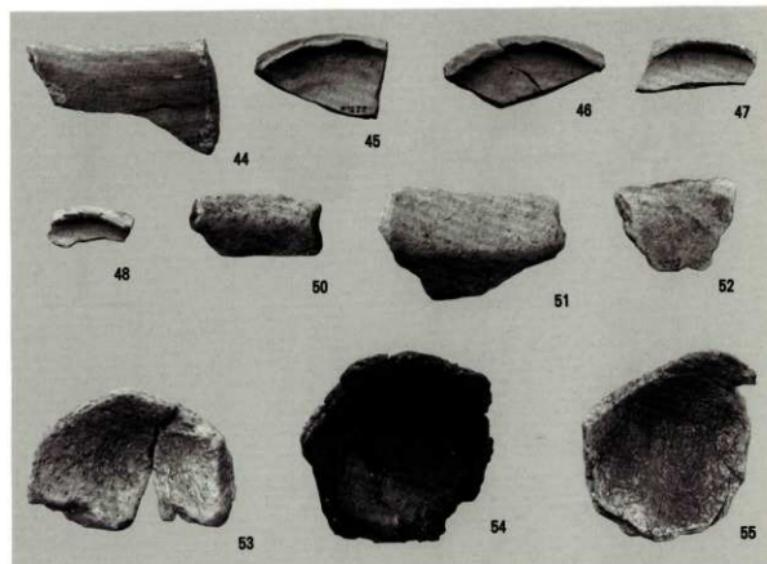
1. 「第1層」出土遺物（1／3、外面）



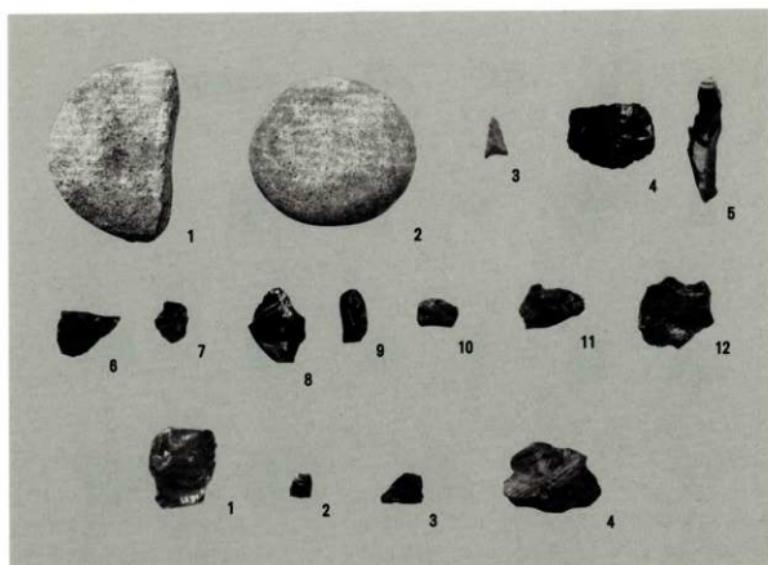
2. 「第1層」出土遺物（1／3、内面）



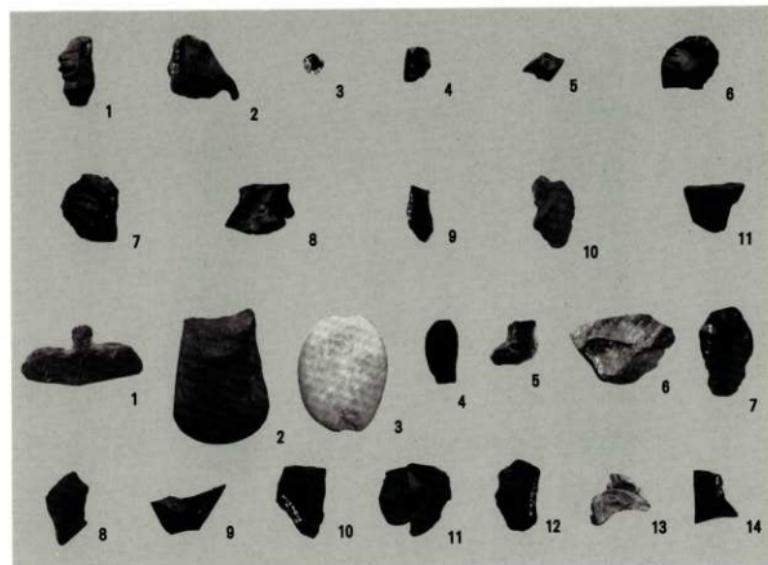
1. 「第1層」出土遺物（1／3、外面）



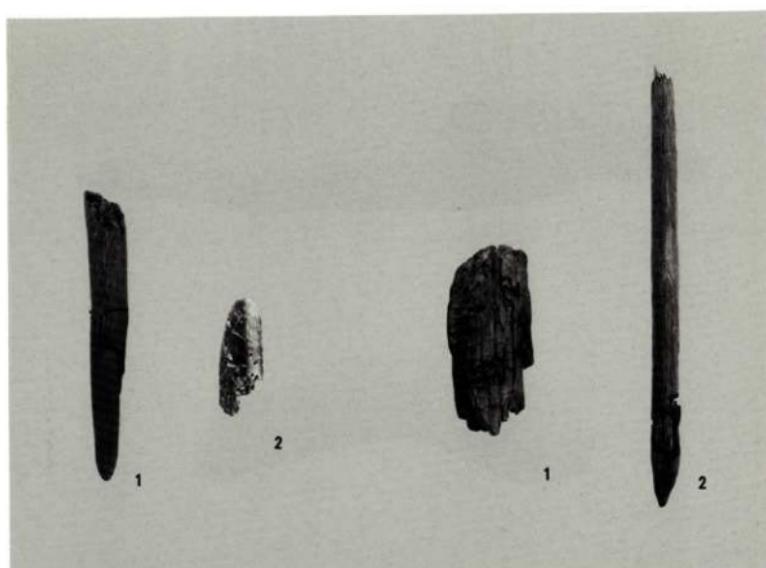
2. 「第1層」出土遺物（1／3、内面）



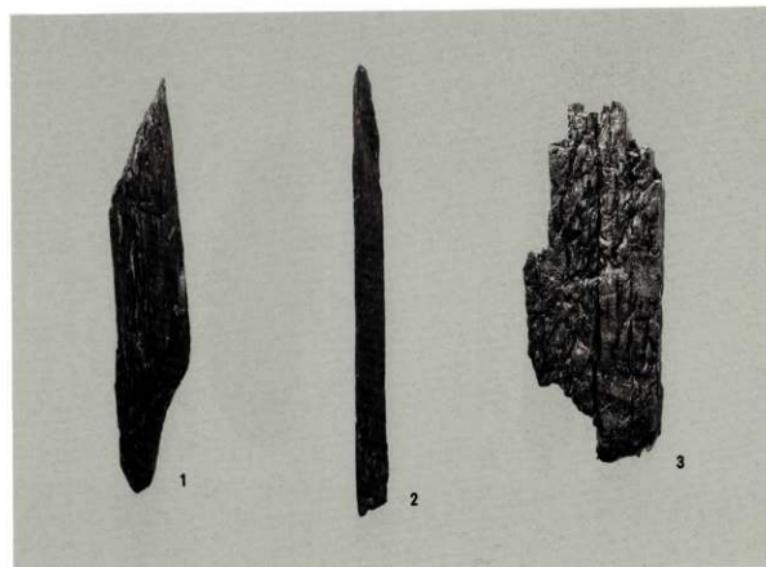
1. 「第8層上面」「第5層」出土石器 (1／3)



2. 「第5層上面」「第6層上面」出土石器 (1／3)



1. 「第7層上面」「第6層下位粘土層」出土木製品（1／3）



2. 「第5層上面」出土木製品（1／3）

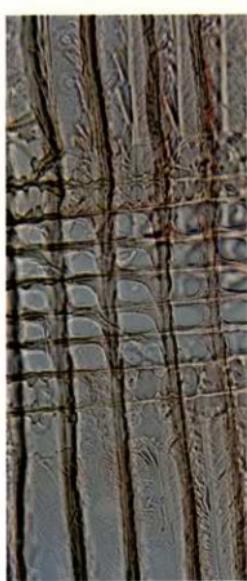
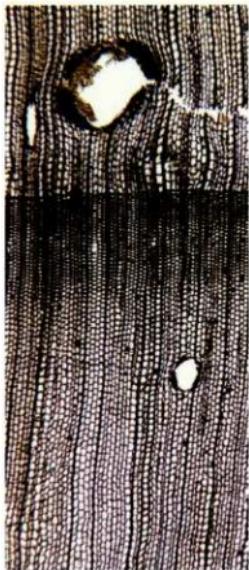


1. 「第6層上面」出土木製品（1／3）



2. 「第4層下位砂層」出土木製品（1／3）

図版三九 木製品類微鏡写真





3-1 38倍
3-1～3 アサダ：No.4-10



3-2 95倍



3-3 380倍



3-4 196倍
3-4～6 エノキ属：No.4-3



3-5 190倍



3-6 380倍

島根大学埋蔵文化財調査研究報告 第1冊

島根大学構内遺跡第1次調査

(橋繩手地区 1)

発行日 1997年3月31日

編集発行 島根大学埋蔵文化財調査研究センター

住 所 島根県松江市西川津町1060
〒690 T E L (0852) 32-6496

印 刷 柳 黒 潮 社
島根県松江市向島町182-3
